

児玉町文化財調査報告書 第27集

向田 A ・ 向田 B ・ 壺丁田遺跡

県営は場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6

埼玉県児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第27集

むかい だ

むかい だ

いっ ちょう だ

向田 A ・ 向田 B ・ 壺丁田遺跡

県営は場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6

1998

埼玉県児玉町教育委員会

序

今回報告する向田A遺跡・向田B遺跡・壱丁田遺跡は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成5年度工区の工事に伴い、児玉町教育委員会が発掘調査を実施したものです。

児玉南部地区の平成5年度工区は、これまでの女堀川中流域右岸に広がる沖積低地の条里地割りが残る水田地帯と異なり、生野山残丘内に位置する比較的広い谷内の耕地が主な対象で、その東側半分の水田については、すでに昭和40年代に土地改良事業が実施されていました。そのため、当初は工区内における遺跡の存在は、かなり希薄であろうと思われていましたが、その予想に反して、向田A遺跡と向田B遺跡の調査では、これまで町内ではあまり検出例のない室町時代後期の水田跡の一部が検出され、谷奥の壱丁田遺跡の調査では、鎌倉時代から室町時代に続く領主層の屋敷跡の存在が明らかにされました。残念ながら、この屋敷に居住した人物については、古文書や伝承等の記録が残っていないため、明確にすることができませんが、中世においても積極的に谷内の開発が行われており、その開発状況が当時に比べて機械化や技術進歩の著しい現在とさほど大差ない様相であったことは驚きに耐えません。これらの成果は、比較的資料の少ない当地区の中世の歴史を考える上で、活用すべき貴重な成果と言えるでしょう。

最後に、発掘調査を実施するにあたって、御理解と御協力を賜った埼玉県本庄土地改良事務所や児玉南部土地改良区をはじめとする地元関係機関や各位に対して、深甚なる敬意を表し、この場を借りてお礼申し上げます。また、寒風吹きすさぶ中、日当たりも悪く地面も凍りつくような現地で、発掘作業に当られた皆様のご労苦に、衷心より感謝いたします。

平成10年3月10日

児玉町教育委員会
教育長 富 丘 文 雄

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字入浅見に所在する向田A遺跡・向田B遺跡・荅丁田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成5年度工区の工事に伴う事前の記録保存を目的として、平成5年度に児玉町教育委員会が実施したもので、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
3. 本書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・町費及び県費委託金である。
4. 本書の執筆は、第Ⅱ章を野口泰宣が、その他は恋河内が執筆した。
5. 本書の編集は、恋河内が行った。
6. 本書の写真は、遺構を恋河内が撮影し、遺物については中里広子の協力を得た。
7. 出土遺物観察表に示した記号は以下のとおりである。
A－法量、B－成形、C－整形・調整手法及び形態の特徴、
D－胎土、E－色調、F－残存度、G－出土層位、H－備考。
8. 現地発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関より様々なご協力やご助言を賜った。記して感謝いたします。
赤熊浩一、浅野晴樹、荒川正夫、岩瀬 譲、梅沢太久夫、
太田博之、岡本幸男、金子彰男、小林康幸、駒宮史朗、
坂本和俊、佐藤好司、篠崎 潔、外尾常人、田村 誠、
富田和夫、中村倉司、中沢良一、長瀧歳康、野口泰宣、
平田重之、福山俊彰、増田一裕、松澤浩一、丸山 修、
丸山陽一、三上元一、矢内 勲、吉岡康暢
埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県本庄土地改良事務所、
児玉南部土地改良区、早稲田大学本庄校地文化財調査室、

目 次

序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	共和地区の郷村と中世館跡 —遺跡の歴史的環境—	3
	第1節 共和地区の庄・郷・村	3
	第2節 共和地区の中世館跡	7
第Ⅲ章	向田A遺跡の発掘調査	15
	第1節 遺跡の概要	15
	第2節 検出された遺構と遺物	19
	1. 水 田 跡	19
	2. 井 戸 跡	20
	3. 柵 跡	21
	4. 土 壇	22
	5. 溝 跡	26
	6. 縄文時代の遺物	27
第Ⅳ章	向田B遺跡の発掘調査	29
	第1節 遺跡の概要	29
	第2節 検出された遺構と遺物	31
	1. 水 田 跡	31
	2. 溝 跡	34
	3. 土 壇	37
第Ⅴ章	壱丁田遺跡の発掘調査	41
	第1節 遺跡の概要	41
	第2節 検出された遺構と遺物	44
	1. 掘立柱建物跡	44
	2. 井 戸 跡	60
	3. 土 壇	68
	4. 溝 跡	71
	5. ビット出土・表採の中世遺物	92
	6. その他の遺物	96
第Ⅵ章	ま と め —壱丁田遺跡の遺構と遺物—	97
	第1節 中世の陶磁器と土器	97
	1. 貿易陶磁器	97
	2. 国産陶器	98
	3. 在地産土器	103
	第2節 遺構の変遷とその性格	108
	1. 壱丁田遺跡の遺構の変遷	108
	2. 壱丁田遺跡の性格と周辺の様相	113
参考文献		117
写真図版		

発掘調査の組織

平成5年度（発掘調査）

主 体 者 児玉町教育委員会

教 育 長 富 丘 文 雄

事 務 局 児玉町教育委員会社会教育課

課 長 大 塚 勲

課長補佐 吉 川 敏 男

社会教育係長 清 水 満

主 任 鈴 木 徳 雄

主 任 田 島 賢 二

主 事 倉 林 美 恵 子

主 事 徳 山 寿 樹

調査担当 主 事 恋 河 内 昭 彦

平成9年度（整理・報告）

主 体 者 児玉町教育委員会

教 育 長 富 丘 文 雄

事 務 局 児玉町教育委員会社会教育課

課 長 関 根 安 男

文化財係長 鈴 木 徳 雄

主 任 杉 山 茂 俊

主 事 徳 山 寿 樹

主 事 大 熊 季 広

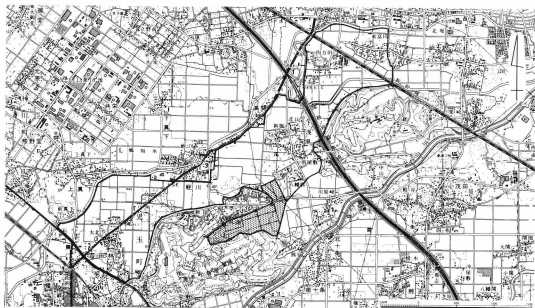
担 当 者 主 任 恋 河 内 昭 彦

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

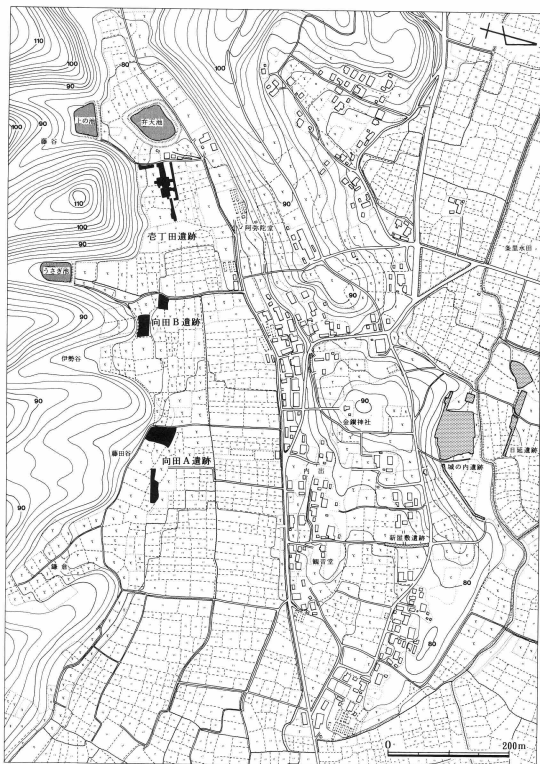
本報告の向田A遺跡・向田B遺跡・杓丁田遺跡は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成5年度工区の工事に伴って、発掘調査を実施したものである。平成5年度工区は、生野山残丘内にある東西約1400m・南北約200mの比較的規模の大きな谷田を対象にしている。その対象面積は約26haであるが、このうちの西側約20haの水田は、すでに昭和40年代に共和南部土地改良事業が実施されている。そのため、今回の事業に伴う新たな面工工事の対象は、東側谷奥の水田約0.9haと谷内の残丘北側斜面下の畑地約4.8haの合計約5.7haである。

この平成5年度工区の面工工事対象区域内には、残丘北側斜面下の低台地上に向田遺跡(No35遺跡)と杓丁田遺跡(No301遺跡)が所在している。そのため、これらの遺跡の取り扱いについて、担当機関の埼玉県本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会の間で協議を重ね、それをもとに平成4年12月に県文化財保護課・県耕地課・埼玉県本庄土地改良事務所・児玉町教育委員会の四者による調整会議が行われた。その結果、工事によってやむを得ず遺跡が破壊される部分については、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

発掘調査に関する届出は、埼玉県本庄土地改良事務所より平成5年5月12日付け本地第183-2~4号による「埋蔵文化財発掘の通知」が、児玉町教育委員会より平成4年5月10日付け見教社第33-1号(向田A遺跡)・第33-2号(向田B遺跡)・第33-3号(杓丁田遺跡)による「埋蔵文化財発掘調査の通知」が、それぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出されている。なお、文化庁からは、平成5年11月22日付けの委保記第5-4380号(向田A遺跡)・委保記第5-4381号(向田B遺跡)・委保記第5-4382号(杓丁田遺跡)により、発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があった。



第1図 県営ほ場整備事業児玉南部地区平成5年度工区位置図



第2図 発掘調査位置図 (1969年作成地図使用)

第Ⅱ章 共和地区の郷村と中世館跡 一遺跡の歴史的環境一

第1節 共和地区の庄・郷・村

中世における共和地区の概況について、この地域に広く条里が施行されていたこと、この地域一帯に見玉庄という荘園が存在したこと、さらに武蔵七党の一つ見玉党の庄氏一族(庄・蛭河・阿佐美・本庄・四方田・今井氏等)や真下氏・富田氏らが名字の地としていたことは既に述べた(野口1997)が、ここでは文献資料に見られる中世後半から近世に至る共和地区の中世の郷村について触れておく。

文献資料の中で信頼のおける文書・記録史料から共和地区の様子が窺えるものは、九条兼実の日記『玉葉』に見られる見玉庄の記事が初見である。安元元年(1175年)11月の条の記事に見玉庄についての記事が見られるが、この他に史料も無く、共和地区に所在した荘園かどうかについても確定されたものではない。しかし、見玉庄の庄の字を名字にしたと思われる見玉党庄氏の分布や、文永11年(1274年)11月の「大嘗会雜事配賦」(金沢文庫文書)などにより、共和地区に所在したものと推定している(野口1991)。

次に史料にあらわれるのが、正和3年(1314年)7月の「関東下知状」(根津美術館所蔵)である。この史料に共和地域に隣接した本庄の名が初めて登場するが、鎌倉時代の正和3年に武蔵国本庄内の地をめぐって本庄国房と由利頼房が争ったもので、本庄太郎国房は源平合戦で活躍した庄太郎家長の第四子本庄四郎左衛門尉時家の曾孫にあたる。国房の曾祖父時家は、『吾妻鏡』に数度名前を見せており、寛喜元年(1229年)正月と天福元年(1233年)の幕府の院政の儀式馬を引いている。時家は仁治2年(1241年)5月に小林時景の所従藤平太に路傍で狼藉を働いたと訴えられ、幕府から所帯を収公されている。時家曾孫の国房と由利氏の争いは、正応4年(1291年)頃より起こっており、あるいは先の小林氏との争いで失った所領がこの本庄内の生子屋敷及び立野林と畠であったかも知れない。それが由利氏の手に渡り、国房にとっては名字の地であり、年々の得分の返済を滞らせて由利氏と争ったものとも考えられる。しかし、争いは決着がつかず、時家の代より相伝してきた筑前国小中庄の地頭職を由利氏に渡すことで決着がついたようである。その後、本庄内の地がどうなったかはわからないが、小中庄と引替に国房が確保したとも考えられる。残念ながら現時点では生子屋敷と立野林はどこなのかはわかっていない。

この史料以後、鎌倉時代におけるこの共和地区及び周辺地域に関連する史料はないが、この地域の状況は、中世も後半の南北朝末頃頃になって史料に散見するようになる。鎌倉幕府が滅亡し、さらに建武の新政権も崩壊して南北朝期に入るとこの地域も動乱の時代に組込まれるが、すでに鎌倉時代において見玉党一族に滅亡する一族が見られ始め、共和地域及び周辺地域にも見玉党一族以外の武士が入り込んでいるように思える。鎌倉幕府が滅んだ後、北条氏の生き残り北条時行らが鎌倉を一時奪取した中先代の乱が起きたが、建武2年(1335年)に足利方に見玉党蛭河彦太郎入道が捕らえられている(注1)。蛭河氏は、蛭河四郎左衛門尉が得宗被官になっていたと推定され(注2)、北条氏と行動を共にしていたと思われるが、この事件により蛭河氏は本貫地の蛭河郷を失ったことは確実である。蛭河氏はこれ以後、この地域での活動は全く見られなくなっている。

延元2年(1337年)9月、武蔵国の安保原および薊山で、北畠軍と足利軍との激しい合戦が繰り広げられた(注3)が、地に残る伝承(注4)以外には史料に乏しい。伝承では、薊山(現在は浅見山・大久保山ともいう)にあったという児玉党の菩提寺西光寺が戦果のため焼失した事、新田氏に所属して活躍した真下春行が討死した事、真下城の攻防などを伝えている。

南北朝期も末期の明德元年(1390年)の「藤原泰次寄進状」(黒田氏所蔵文書)には、「下児玉郷」の記載がある。下児玉郷は、現在の美里町大字下児玉付近と思われる。これは、藤原泰次が武蔵国下児玉郷内浅羽方の田一町七段を、徳蔵寺長老に寄進したものである。下児玉郷は、身馴川(現小山川)を挟んで阿佐美郷とは近接している。寄進者の藤原泰次は、姓は不詳であるが、後の日光輪王寺聖教にも見える本庄郷にいた藤原栄次や、児玉党本庄氏嫡流が代々名前の下字に「次」の字を通字として用いていることから、この泰次も本庄氏の一族と考えられる。この外、下児玉郷内の「浅羽方」の意味がよくわからないが、同じ児玉党の系譜を引く浅羽氏(坂戸市出身の武士)の所領の一部がこの郷内にあったものであろうか。

応永3年(1396年)の「日光輪王寺大般若経奥書」には、「児玉郡本庄郷・西栗崎」の地名が見える。この聖教は、関東の天台宗系の諸社寺で10月18日に一斉に大般若経の一日頓写事業が行われている。児玉郡では金鑽の大光普照寺・阿久原・本庄郷・西本庄栗崎有勝寺(現有勝寺)・児玉郡円岡(円良岡か)・金鑽宮談所で書写が行われた。この中で注意を引くことの一つは、先にも述べてきたが本庄の地が、この段階で本庄郷と西本庄という表現が使われていることである。西本庄栗崎に有勝寺があり、この寺は今も本庄市栗崎にあるので、本庄郷は栗崎より東側(東北部でもよい)にあることになる。北部から北東にあたる北堀付近が本庄郷にあたるかも知れない。もう一つの点は、下児玉郷の所でも触れたが、児玉郡本庄郷で藤原栄次が居ることである。先に触れた明德元年の藤原泰次と応永3年の藤原栄次とはわずか6年しかたっていないが、ほぼ同時期に藤原泰次と藤原栄次の名前が見られ、両人は親子関係なく極めて近い関係ではないかと思われる。

その後、応永25年(1418年)の「足利持氏御判御教書」(安保文書)に、蛭河郷が見える。この史料は安保宗繁及び満春が、児玉郡及び秩父郡内の所領が国人衆の押領にあっていることを訴えたもので、横領した国人衆に「本庄左衛門入道号西」らをあげている。特に児玉郡の安保氏の所領として、「蛭河郷・阿久原郷・太田村(太駄村)」をあげている。この内の蛭河郷は、前述した児玉党蛭河彦太郎入道が建武2年の中先代の乱で足利方の捕虜となった際に失ったものを、後に本庄氏が獲得し、上杉禪秀の乱で禪秀に与した本庄氏の所領を持氏が没収し、持氏方の安保氏が獲得したものであろう。この事は、本庄氏が蛭河郷へも進出していたことを示している。本庄左衛門入道は、「号西」と書かれているように、この時期には西本庄氏と呼ばれていたようで、後の永享12年(1440年)の「上杉憲実書状」(安保文書)にも西本庄左衛門入道の名が見られる。先にあげた本庄郷の藤原栄次を本庄氏と推定したが、西本庄氏が栄次から直接系譜を繋げる一族かは根拠に乏しいが、少なくとも極めて隣接する地域であるので、同じ本庄氏の一族と思われる。

丹党系安保氏の共和地区への進出は、この蛭河郷の領有だけではなく、かなり早い段階から児玉郡塩谷郷や宮内郷へ進出し(建武3年「足利直義下文」ほか)、日光輪王寺聖教にも児玉郡円岡に「丹治光泰」・「安保左衛門三郎、号円岡」と記され、安保光泰が円岡光泰として円岡の地に進出していた

ことが窺える。「円岡」は、円良岡と推定され、現在の児玉町八幡山から神川町八日市にまたがって地名が残されている。共和地区の上真下とは隣接しており、円良岡と姪川の地は中にその真下郷(児玉町上真下・下真下)を挟むだけの近接地域である。

南北朝より室町時代にかけては、共和地域を本拠として活躍した児玉党系一族(庄氏及び庄氏より分れた姪河・阿佐美・薦田・牧西・本庄・今井・四方田氏、真下氏、富田氏)の活動は、本庄氏を除いて見られなくなっている。安保氏が児玉郡内各所に所領を獲得し、また鎌倉の円覚寺塔頭の寺領となるケースが増加している(黄梅院や雲頂庵など)。

戦国期になると、天文21年(1552年)の「北条家朱印状」(鈴木文書)に今井之村、永禄元年(1558年)の「小幡憲重黒印状」(鈴木文書)に今井とある。永禄5年の南図書助判物(出浦文書)には円岡が見られ、天正5年の「北条氏邦朱印状」(武州文書)には入阿佐美・阿佐美之村が見える。さらに天正18年(1590年)の「小幡信茂判物」(鈴木文書)には、両今井村・両阿佐美村・両富田村・四方田村などがあり、戦国時代には真下・阿佐美・四方田・今井・富田郷は村名を称しており、この中の真下・阿佐美・今井・富田村は2村に分村していたことが窺える。

中世の共和地区の庄・郷を考えるには、当地区内の条里水田に用水を供給している九郷用水について考える必要がある。九郷用水の詳細は、『九郷用水関係史料集』(児玉町1989)に詳しいが、その開鑿は古代にまで遡るとみられる。この用水の名の「九郷」とは、九つの郷を指すともいわれ、「九郷」自体の呼び名も戦国時代には既に存在していた(天正15年「北条氏邦朱印状」鈴木家文書)。

明治21年に作られた『共和村地誌』の一つ『姪川地誌』付録の「九郷用水誌」によれば、九郷とは青柳郷(八幡山)・黄田郷(八日市)・真下郷・姪川郷・今井郷・浅見郷・高関郷(四方田郷)・富田郷・北堀郷の九つをあげている。これは、九郷用水の開鑿伝承や、用水流域村に鎮座する金鑽神社の分霊社の存在から考えられたものと思われる。特に九郷用水流域に金鑽神社の分霊社が多く祭られており、開鑿伝承も古代まで遡り、金鑽神社が深くかかわっているため、中世期のこの地域とこの神社との関係は切り離せない。各地域の金鑽神社の創立時期については、伝承以上のものは残されておらず定かではないが、現在では金鑽神社分霊社は単独で鎮座するものや境内社となっているものなど様々であり、その分布は次の通りである。

- ・八幡山(児玉町大字八幡山)金鑽神社。元は台山と呼ばれる円良岡の地にあり、現在は種池神社内に移転されている
- ・児玉(児玉町児玉)金鑽神社。八幡神社に合祀。由緒は不明。
- ・八日市(神川町八日市)金鑽神社(八荒神)。児玉町の前真下と接する場所に「八荒神」という小字名がある。前真下と吉田林の鎮守という。
- ・上真下(児玉町上真下)金鑽神社。集落の北部の八丁八反内に鎮座していたが、陸軍児玉飛行場(現工業団地)の建設に伴い日枝神社社地に移転。日枝神社は金鑽神社に合祀。
- ・下真下(児玉町下真下)金佐奈神社。当社も集落の北部の八丁八反内に鎮座していたが、陸軍児玉飛行場(現工業団地)造成のため移転。
- ・姪川(児玉町姪川)金鑽神社。元は字金鑽林に鎮座。現在は胸形神社に合祀。
- ・入浅見(児玉町入浅見)金鑽神社。鎮座地は現在地(古墳上)に移転したともいわれている。

- ・下浅見(児玉町下浅見)金鑽神社。八幡神社に合祀。
- ・高関(児玉町大字高関)金鑽神社。末社というのが鎮座地及び由緒は不明。
- ・四方田(本庄市四方田)金佐奈神社。
- ・東今井(本庄市今井)金鑽神社。現在不明。
- ・西今井(本庄市今井)金鑽神社。
- ・東富田(本庄市東富田)金鑽神社。現在は熊野十二社神社に合祀。
- ・西富田(本庄市西富田)金鑽神社。
- ・北堀(本庄市北堀)金鑽神社。現在なし。他の地域へ移転するともいう。
- ・栗崎(本庄市栗崎)金鑽神社。
- ・西五十子(本庄市西五十子)金鑽神社。現在不明。
- ・下児玉(美里町下児玉)金鑽神社。

(この他にも神川町小浜、児玉町河内・太駄、神泉村下阿久原にもある)

以上のように、九郷用水流域及び周辺地域には、18か所に金鑽神社の分霊社が鎮座していた(長谷川1970)。これらの村々の多くは、いずれも九郷用水から用水を引いていた村で、蛭川以下の下流域を「下郷」とも称していたようである(天正15年「北条氏邦朱印状」鈴木家文書)。

近世後期に編さんされた『新編武蔵風土記稿』には、戦国末期から近世初頭のこの地域の土地支配関係を示す呼び名の領・庄・郷が記されている。この中で庄名について触れてみる。文面通りに捉えられないものであるが参考にあげる。旧児玉郡では、若泉庄と蛭川庄・池田庄の3庄が記されている。この内、若泉庄が最も広範囲に及び、本庄市と児玉町の大部分と美里町北部がその庄域となっている。共和地区の内、蛭川・東今井村は蛭川庄となっている。旧児玉郡内に児玉庄があったことは既に述べたが、児玉庄自体いつごろまで存続出来たのかは不明である。おそらくは、早期に消滅したものと思われるが、その範囲とかなりが重複すると思われる若泉庄の存在は、中世を通じて史料上に全く出てこない。この若泉庄の存在は、近世初期の段階で考えられたものであろうか。

共和地区は、古代末期に児玉庄という荘園の存在が知られているだけで、荘園内に含まれると推定される郷・村の構成は知られていない。わずかに共和地区のほぼ中央に位置する蛭川地域に「蛭河郷」が存在する。旧児玉郡の中央部から西部にかけて「枝松名」という「名」が存在し、その名内には塩谷郷・宮内郷・長基郷(長沖か)が含まれる。これらは、近世においては蛭川村・塩谷村・宮内村・長沖村であり、現在は大字名となっている。この地区の近世の村名がそのまま郷名に替えられるなら、浅見郷(阿佐美郷)・真下郷・富田郷・今井郷・四方田郷が存在したことになる。これらの郷名は、蛭河氏・阿佐美氏・真下氏・富田氏・今井氏・四方田氏と、児玉党一族の名字となっていることから、郷名を称していた可能性が高い。真下・阿佐美・富田・今井郷は、戦国期以降は分郷して上真下村と下真下村、入浅見村と下浅見村、東富田村と西富田村、東今井村と西今井村に分れている。

この地域は条里水田地帯であり、水田の多くは1町四方の区画が圃場整備以前には明瞭に残っていた。そのためか、近世における各村は、村高が500石前後と均等になっている特徴がみられる。吉田林村536石(近世初頭の薪田150石)・下浅見村500石・入浅見村505石(近世期の薪田高20石)・蛭川村875石・上真下村617石・下真下村386石・高関村100石・四方田村140石・東今井村97石・西今井村677

石・東富田村313石・西富田村270石である。九郷用水を引水し条里水田地帯の周辺地域では、八日市村545石と八幡山町421石となっている。の中で吉田林村や高関村は、中世においては周辺の村に含まれていたと思われる、児玉党に吉田林氏や高関氏はない。ただ四方田村は村高が少なく、四方田氏は庄氏より比較的早期に分派しているので、中世の四方田郷は近世の村よりかなり広域に広がっていたものと思われる。

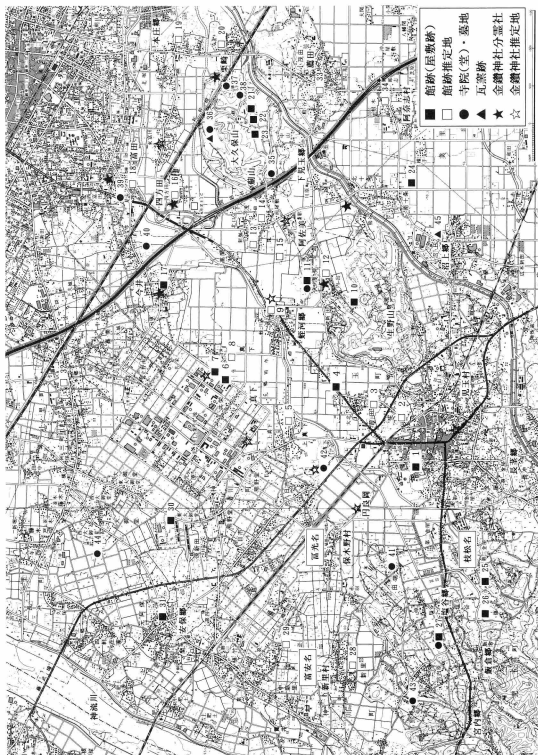
第2節 共和地区の中世館跡

共和地区には条里水田が広がり、南部の残丘上には生野山古墳群があり、この地域がかなり早くから開発されていたことは疑いない。古代後半頃より武装する集団が武蔵国の西部山際地域に南北にわたり出現したが、児玉町地域でも児玉党と呼ばれる武士団が誕生している。この児玉党一族の内、庄氏・真下氏・富田氏などが共和地区に早期に分布し、さらに庄氏からは蛭河・阿佐美・今井・四方田・本庄・久下塚氏などが分れている。このように、児玉町の共和地区から本庄市にかけて、面積的にも限られた地域内に多くの武士が割拠していたことは、この地域がそれなりに生産力の高い地域であったことを示している。その武士達の分布に応じて、その館跡と推定される場所も各地に見られる。

『埼玉の館城跡』(埼玉県1968)によれば、城内(児玉町入浅見)、関根氏屋敷・武井館(児玉町下浅見)、真下氏館(児玉町下真下)、栗崎館(本庄市栗崎)、城山(本庄市城跡)、富田氏館(本庄市西富田)、堀の内(本庄市北堀)、堀の内(本庄市牧西)、堀の内(本庄市四方田)、久城田(本庄市今井)などがあげられている。その後の発掘調査でも中世館跡が確認され、『埼玉の中世城館跡』(埼玉県1988)にはさらに多くの館跡が掲載されている。この報告書にも漏れている分も含め、共和地区内の館跡について概要を触れてみる。今回の報告でも取上げたように、発掘調査を経てデータを収集出来た館跡は多くなく、伝承や地割りなどから推定される館跡が多い。

下浅見地区では、関根氏屋敷・御蔵屋敷・武井館と真福寺の4箇所がある。関根氏屋敷(第5図)は、宇新堀にあり、現在関根家の屋敷地となっていることからついた名称で、十数年前までは館の東側に水堀が残されていたが、現在は埋められている。近世期には村の郷蔵屋敷があり、明治維新後は農民持ちとなり、現在は関根家の敷地となっている。館の南側と北側には土塁があったようであるが、現在は見られない。堀は、約70m四方の内郭を圍繞する内堀については、地籍図で明確に把握できるが、その一回り外側を圍繞する外堀については、東西と南の道に比定できるものと思われる、おそらく120m四方程度の規模と推測される。館の南西部には「おあちゃ稲荷」があり、館にまつわる伝承(注5)も残されている。関根家旧宅の裏には氏神そばに中世の五輪塔3基が残されており、近世の村絵図(下浅見関根家文書)にも館跡堀が記載されている。この館とその主については、『下浅見地誌』には「古宅地」として「二重堀」と称し、「古くから児玉党阿佐美氏の館といわれ、その後、守護役の手島丹後守居住の地という。その後、地頭の朝日寿永の居宅となる。敷地が四方に二重堀がめぐり、東の一方しか出入口がなく往来が不便なことと、名将の城跡だったので恐れ多く誰も住まないうち地頭の郷蔵の敷地になった」と記している。

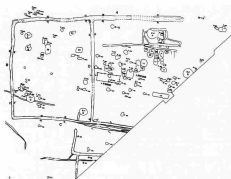
御蔵屋敷は、宇前屋敷にあり、現在は福島家の屋敷になっているので、「福島氏館」とも呼ばれて



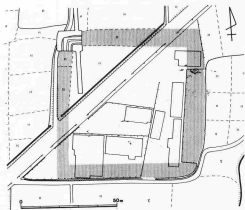
第3図 周辺の中世主要遺跡

中世主要遺跡一覧表

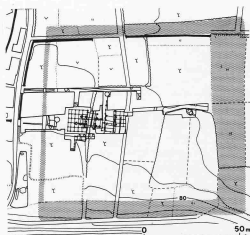
No	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 期	備 考	参 考 文 献
1	雄ヶ岡城跡	兄玉町八幡山	城跡	16C～17C	山内上杉氏の築城といふ伝承あり。	埼玉県1988
2	吉田林「堀の内」	兄玉町吉田林	館跡推定地	不明	13C頃の屋敷跡を後出した女池遺跡と隣接。	
3	蔵 屋 敷	兄玉町吉田林	館跡推定地	不明	旧地頭の蔵敷で、方格地割りをもつ。	
4	毛無し屋敷跡	兄玉町吉田林	館跡	15C前以降	幅5mの堀が囲繞する60m四方の方形館。	恋河内1995
5	伝 東 福 寺	兄玉町上真下	館跡・寺院推定地	不明	約85mの方格地割り。	
6	古井戸1号館跡	兄玉町下真下	館跡	15C後～16C	52m×88m以上の長方形区画。	井上1986
7	古井戸2号館跡	兄玉町下真下	館跡	13C～14C	二重堀による67m×84m以上の長方形区画。	井上1986
8	真下氏館跡	兄玉町下真下	館跡推定地	不明		埼玉県1968
9	姪河氏館跡	兄玉町姪川	館跡推定地	不明	約120m程度の方格形で、中央に内部をもつ。	菅谷1981
10	碓丁田遺跡	兄玉町入浅見	館跡	13C～16C初	約100m四方の方形館。	本報告
11	城の内遺跡	兄玉町入浅見	寺院・館跡	13C～15C後	寺院から堀と土塁によって区画された館に改造。	恋河内1997
12	小字「内出」	兄玉町入浅見	館跡推定地	不明	地割りは不明瞭、一部に土塁跡の高まりあり。	
13	間根氏屋敷	兄玉町下浅見	館跡推定地	不明	約70m四方の内堀があり、外堀の存在も推測。	菅谷1981
14	御蔵屋敷(福島氏館)	兄玉町下浅見	館跡推定地	不明	堀による29×47mの区画をもつ。	菅谷1981
15	武井館跡	兄玉町下浅見	館跡推定地	不明	堀が囲繞する70m×80mの長方形区画。	菅谷1981
16	四角田「堀の内」(四方田邸)	本庄市四方田	館跡推定地	不明	160×110mの規模で、内部は区画される。	菅谷1980
17	北郷遺跡	本庄市今井	館跡	15C末～16C初	ほぼ直角に由る幅3.6mの堀を後出。	富田・赤熊1985
18	西富田「堀の内」	本庄市西富田	館跡推定地	不明	一部に堀の痕跡あり。	本庄市1986
19	北堀「堀の内」	本庄市北堀	館跡推定地	不明	約100×80mの長方形区画、外堀は不明確。	本庄市1986
20	栗崎「堀の内」	本庄市栗崎	館跡推定地	不明	210×150mの規模で、中央に内部をもつ。	本庄市1986
21	大久保山道跡A2地区	本庄市栗崎	屋敷跡・館跡	12C後～13C	堀による50mから100m区画の館に変遷。	荒川1995
22	大久保山道跡A地区	本庄市栗崎	館跡	12C中～13C中	堀による100m規模の方形区画をもつ。	荒川1995
23	大久保山道跡C地区	本庄市栗崎	館跡	13C中	堀による80m程度の方格区画をもつ。	荒川1995
24	新倉館跡	美里町南十条	館跡	15C末～16C前	120×140mの規模で、中央に内部をもつ。	菅谷・岡本1980
25	観音山道跡(別所城跡)	兄玉町金屋	城跡	不明	豪邸堀の堀と火葬墓・土蔵墓を後出。	町教委調査
26	篠城城跡	兄玉町塩谷	城跡	不明	兄玉堂塩谷氏の居城といふ伝承あり。	埼玉県1968
27	真鏡寺館跡	兄玉町塩谷	館跡	13C～15C	約200mの方格形で、内部の存在も推測される。	恋河内1991
28	岡部屋敷館跡	神川町新里	館跡	不明	160×140mの方格区画。	神川町1989
29	中新里城跡	神川町中新里	城跡	不明	300×240mの長方形区画。	神川町1989
30	阿保境館跡	上里町大御堂	館跡	13C～15C前	約163m四方の方格形で、中央に内部をもつ。	平田1989
31	安保氏館跡	神川町元阿保	館跡	12C後～17C	230×160mの規模で、中に内部をもつ。	篠崎1995
32	金井氏館跡	上里町七本木	館推定地	不明	規模不明。土塁が一部存在していたといふ。	上里町1992
33	小茂田「堀の内」	美里町小茂田	館跡推定地	不明		埼玉県1988
34	阿那志「堀の内」	美里町阿那志	館跡推定地	不明		埼玉県1988
35	小字「西光寺」	兄玉町下浅見	寺院推定地	不明	兄玉堂の菩提寺。葛山合戦で焼失したといふ。	
36	浅見山I遺跡	本庄市東富田	寺院・瓦窯跡	13C～14C	斜形を造成した寺院跡と小規模な瓦窯跡を後出。	本庄市1986
37	宍勝寺	本庄市栗崎	寺院		庄小太郎頼家の墓とされる五輪塔あり。	
38	東谷中世墳墓群	本庄市栗崎	堂・墓地	13C～15C	堂宇を伴う墳墓群。瓦・蔵寄・破砕などが出土。	本庄市1976
39	社具路遺跡	本庄市西富田	墓地	13C後～15C	火葬墓・土蔵墓、瓦・陶磁器・土器・土師器など出土。	長谷川1987
40	塔頭遺跡	本庄市今井	墓地	13C～16C	土蔵墓・井戸等を後出。	吉澤氏の調査による。
41	田端中原遺跡	兄玉町田端	墓地	13C～17C	方形区画内や多数の土蔵墓、火葬墓を後出。	徳山1992
42	反り町遺跡	神川町八日市	寺院推定地	13C後～14C前	「八雲寺」の南側に隣接し、1号溝から瓦が出土。	金子1995
43	元大館跡	神川町新里	寺院跡	12C末～14C	瓦・常滑・美濃・宝篋印塔などが出土。	栗岡1996
44	堂裏遺跡	上里町大御堂	寺院跡	13C～	阿保山古墳跡の阿保池を後出。瓦・石等も出土。	上里町1992
45	水殿瓦窯跡	美里町沼上	瓦窯跡	13C前半	瓦窯跡4基を確認。鎌倉永福寺再建瓦を焼成。	丸山1990



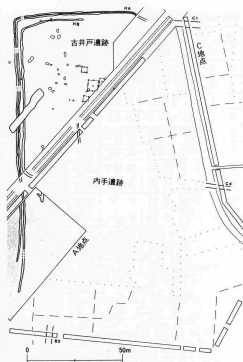
古井戸1号館跡(井上1986より)



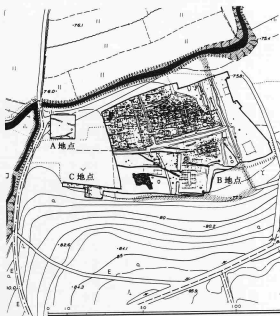
毛無し屋敷跡(忍河内1995より)



老丁田遺跡(本報告)

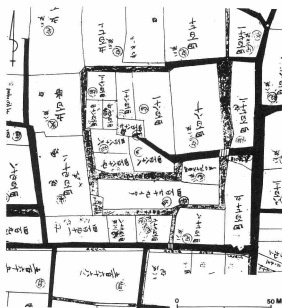


古井戸2号館跡・内手遺跡(鈴木1995より)



城の内遺跡(忍河内1997より)

第4図 共和地区の中世館跡関連遺跡



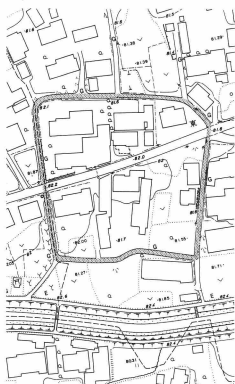
間根氏館跡(菅谷1881より)



武井館跡(菅谷1881より)



河野氏館跡(菅谷1881より)



伝東福寺跡

第5図 共和地区の中世館跡推定地

いる(菅谷1981)。昭和40年代頃は、館の東側に水堀が残っていた(柳1969)。特別に遺構は見られないが、東西28m・南北41m・南北約47mの規模で、幅2m程度の溝が屋敷を圍繞している。館の北西隅の氏神脇に数基の五輪塔や宝篋印塔の部品が見られる。これも阿佐美氏の館跡といわれるが、確証はない。

武井館(第5図)は、水田地帯に面した微高地に所在し、かつては東部と北部に堀があったと言われている。現在は圃場整備によって地表面の地割りが変更され、堀跡の痕跡は全く見られない。明治9年の地籍図によると、東西約70m・南北約80mの長方形区画の北と東に堀があり、その堀は北東に向かって約280m北側の関根氏屋敷に関係する堀とつながっている。周辺には、「在家」という小名が残されている。館跡の名称は、近くに武井橋があるのでそう呼ばれているが、館の居住者にまつわる伝承などは、「下浅見地誌」に「この橋(武井橋)の北の旧字在家に稲荷あり。鉢形北条の臣松岡伊織と云うものここに住し、後に武井に改姓し時にこの橋を架すと云」とある。

下浅見地区には以上の館跡の他に、字後張にある曹洞宗寺院の真福寺が館跡の可能性がある。同寺のある字後張は、大字の北部の本庄市四方田に突き出たような位置にあり、境内には板碑や五輪塔などが所在している。あるいは、この地域は中世には四方田に含まれていたかも知れず、四方田にある四方田氏館跡(菅谷1980)とは極めて近い位置にある。従来より館跡とは考えられていなかったが、真福寺所蔵の近世文書の中に、「寺の周囲に水堀がめぐって、土手を崩して堀を埋めて水田にした」と書かれていて、土塁と堀があったことを示している。館跡から寺院へと変化したものとも考えられる。地理的な関係から児玉党阿佐美氏が四方田氏との関係も考えられる。

入浅見地区は、城の内遺跡・内出・苅丁田遺跡が知られている。城の内遺跡(第4図)は、生野山から数本延びる尾根の北側にあり、尾根の斜面下の低台地上に立地している。水堀の一部が残っていたが、現在はほ場整備により消滅した。付近には、「矢場(あるいは馬場)」などの小名が残る。阿佐美実高の居館との伝承もある。遺跡は、ほ場整備に伴って発掘調査が実施されており(恋河内1997)、残丘北側下の低台地を造成して、鎌倉時代初期(12世紀末～13世紀前半)に寺院か堂を伴う屋敷が建設され、その後室町時代後期(15世紀中葉頃)に東西120m・南北80mの不整四角形の敷地に、堀と土塁をもつ館かそれに付随する曲輪的な屋敷に改変されたことが明らかになっている。調査区域内からは、屋敷の内外を区画する箱堀状の堀跡をはじめ、門跡・建物跡・井戸跡・堅穴状遺構・土城など多数の遺構が検出され、文永10年(1273年)銘の板碑や、13世紀前半以前の縄目叩きの平瓦と14世紀頃の連珠文軒平瓦(本庄市浅見山Ⅰ遺跡出土の瓦と同範)などをはじめ、鉄製品・石製品・木製品・日常雑器など、比較的豊富な種類の遺物が出土している。

この城の内遺跡と尾根を挟んで反対側の南側斜面の小字内出(第2図)付近に、児玉党阿佐美氏の館跡と推定される場所がある。その緩やかな南斜面上に東西に土塁状の高まりが一部に残っている。館跡の区画は未調査のため不明であるが、推定地南側は二本の尾根に挟まれた谷戸田が広がり、開発領主が占拠するには地理的に理想的な立地をしており、塩谷の真鏡寺館跡(恋河内1991)や大久保山内の大久保山遺跡のような立地景観が想像される。周辺には、新屋敷・前田・鎌倉・矢田・庄田などの地名が残り、また推定地の東側には観音堂が、西側には金鑽神社がある。

本報告の苅丁田遺跡(第4図)は、谷の最深部に弁天池のすぐ下側に位置し、ここから中世の屋敷

跡が調査されている。詳細は、第V章以降で述べているので、ここでは触れない。

蜷川地区には、大字のほぼ中央部に位置する女堀川の自然堤防上に「東廓・中廓・西廓・南廓」の地名がある。この内、東廓に方形の区画が地籍図に見られ(第5図)、ここが蜷河氏館跡と推定されている(菅谷1981)。その地籍図によると、120m程度の方形館と思われ、そのほぼ中央部に65m×50mの内郭がある。すでに館跡の中央を国道が通り民家が建っているため遺構はほとんど見られず、わずかに堀跡が道路として利用されている。館跡内に板碑1基が残る。

蜷川地区で館跡と推定される場所は、この東廓の館跡のみであるが、南廓にも方形の区画が見られその可能性もある。しかし特別に伝承もなく、未調査のためそれ以上明らかに出来ない。

下真下地区は、兄玉党真下氏がいた地域で、戦国期の文書にも真下氏の存在が見えるので鎌倉期から戦国期にわたる館跡の存在が推定される。古くより知られているのは真下氏館がある。この館跡については、『埼玉の館城跡』(埼玉県1968)では字石橋とし、現在の共有墓地付近としている。『埼玉県北部の城』(柳1969)でも同様であり、周辺に真下氏縁の観音堂や坂本家墓地を関連の史跡として掲載している。しかし、この館跡については遺構はまったく見られない。明治20年に編さんされた『下真下地誌』には、「明治村誌ニ云、本村中央中屋敷及び中内手ニ亘リ旧真下氏ノ居所ト載セ、又真下左兵衛ハ新田氏ニ仕ヘルト云々」とあり、さらに「里言ニ年月不詳ト雖モ、大敵辰巳ヨリ寄せ来ル、東大手ノ門ヲ鎖シ、死ヲ以テコレヲ守ル、利セズシテ裏門ヨリ西方ヲサシテ落ント欲シ、遂ニ敵兵ノ為ニ討死ス」と書かれている。これによれば『埼玉の館城跡』のいう字石橋ではなく、字中屋敷・中内手付近にあったことになる。現在では下真下の北部は工業団地となっており、戦時中に陸軍兄玉飛行場の造成のため民家や墓地までもが移転の対象となり、昔の風景とは一変しているため、現在遺構として残っているものはない。

戦後、飛行場跡は開墾され畑地となったが、工業団地が造成された際に発掘調査が実施され、字古井戸より二つの館跡が確認されている(井上1986)。古井戸1号館跡(第4図)は、館跡の全体は調査できていないが、東西88m以上・南北52mの長方形を呈している。敷地内部は、中央部の南北に走る堀によって東西に区切られ、掘立柱建物跡・土間状遺構・井戸跡などが検出されている。遺物は、近世のものが多く、堀跡から中世の内耳鍋・片口鉢・播鉢・土師器皿等が、井戸跡から板碑が出土しており、館跡の時期はこれらの遺物から16世紀代とされている。古井戸2号館跡(第4図)は、東西67m・南北84m以上の規模で、二重の堀が長方形にめぐり形態を呈しているが、その外側の堀や館跡の外郭に関係すると思われる溝が、南側に隣接する内手遺跡でも検出されている(鈴木1995)。内部からは、小規模な掘立柱建物跡や土壌が検出されている。遺物は非常に少なく、時期は出土した常滑窯製品や青磁から13世紀～14世紀頃とされている。

上真下地区では、館跡と伝えられた場所は特別にないが、本来は下真下と上真下は一村であり、戦国末期頃に分村したものと思われる。地理的には上真下の方が九郷用水の上流にあたり、重要な位置をしめているが、特別に伝承は伝わっていない。上真下の字東と中内面にかけて地図を見ると、約85m四方の方形区画が確認できる(第5図)。この方形区画は、現在道路になっていて、その道の内側にわずかに高まっている場所が数箇所見られ、土塁の跡ではないかと思われる。方形区画の北側に板碑1基があり、区画の北側には共有墓地がある。『上真下村誌』には、この墓地入口から「応

永武拾弐年(1415年)、真下彈正」と刻んだ古碑が発見されたという。また、ここは「東福寺跡」とも伝えている。これ以外にこの館跡にかかわる史料もないため、ここを館跡と断定はできないが、その可能性は高いと思われる。なお、この上真下地区の南部に位置する通称「前真下」の西側に隣接する神川町大字八日市には、「八荒神(やこうじ)」の小字名がある。この「八荒神」の南側約100mに位置する神川町の反り町遺跡では、直線的な第1号溝跡から13世紀後半～14世紀前半頃の上向剣頭文軒平瓦と三巴文軒丸瓦や丸瓦・平瓦が出土しており、寺院の存在が予想されている(金子1995)。「八荒神」は、八日市の金鑑神社との関連もあり、注目される場所といえよう。

高岡地区は、特別に館跡と伝える場所は無いが、現在の小字に東廓・西廓が残り、館跡の可能性もあるが特別に遺構も見られない。かすかに東廓内に土塁上の高まりがある場所が見られるが、付近には女堀川が流れており、その堤防遺構の可能性もあり明瞭ではない。

吉田林地区では、「埼玉の館城跡」では掲載されていないが、近年の発掘調査で字毛無しより館跡の堀の一部が検出された(恋河内1995)。調査自体は館跡の北西隅の調査で、条里坪界線の交点に一致して直角に曲がる幅約5m・深さ1.7mの堀跡のコーナー一部が確認されている。地割りも、明治9年作成の地籍図によると、東西南北とも約60m程度の方形区画を明瞭に見ることができる。遺物は、部分的な調査であるためほとんどないが、堀跡の覆土中から15世紀前半頃の在産片口鉢が出土している。ここは「毛無し屋敷跡」と呼んでいるが、この名の由来は「吉田林地誌」によれば、「毛無しに毛無し屋敷あり。里人の説に昔時小菅氏の後室剃髪して寓居す。よってこの名ありという。その説分明ならず」としている。小菅氏とは、小菅又八郎という徳川氏家臣であるが、近世初期の段階で吉田林村・下真下村の地頭であつたらしい。しかし、わずかに吉田林と下真下の旧家に伝わる由緒書などに記載されているのみで、詳細は不明である。

この外、館跡とは推定できないが、字西組に旧地頭の蔵屋敷があり、明治初頭の絵図(吉田林峯岸家文書)には毛無し屋敷は方形の区画が描かれ、郷蔵屋敷も方形の敷地に描かれている。この他吉田林地区には、児玉駅の北側の現農協付近に「堀の内」の小字名も残されている。この東側に隣接する女池遺跡では、12世紀後半～13世紀後半頃の屋敷跡の一部が検出されており(注6)、中世館跡が今後確認される可能性も残されている。(野口泰宜)

注

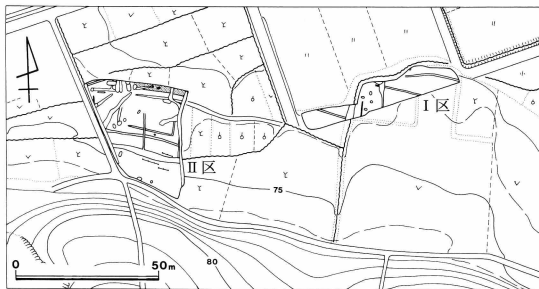
- (注1) 「実康軍忠状」(竹内氏所蔵文書)
- (注2) 「鎌倉円覚寺毎月四日大斎番文」(円覚寺文書)、鎌倉の円覚寺で行われた北条時宗の忌日の行事で、北条貞時が行事に参加する家人の結番を定めたもので、その6番に経河四郎左衛門尉の名が見える。
- (注3) 「元弘日記裏書」・「桜雲記」
- (注4) 「伝書之事」(下真下坂本家所蔵)、「下浅見村誌」・「下真下村誌」共和村役場編ほか。
- (注5) 延元2年(建武4年・1337年)に起きた蕨山合戦の時に、この館は鎌倉勢の防御陣地となっていたが、奥州勢のため鎌倉勢が負けた際に、館にあった奥女中のおおぢやは、最後まで館にとどまり自刃して果てたと云う伝承がある(柳1976)。
- (注6) 児玉町遺跡調査会が平成7年に発掘調査を実施し、縄文時代後期と古墳時代後期の集落跡及び中世の屋敷跡(掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡)を検出している。

第Ⅲ章 向田A遺跡の発掘調査

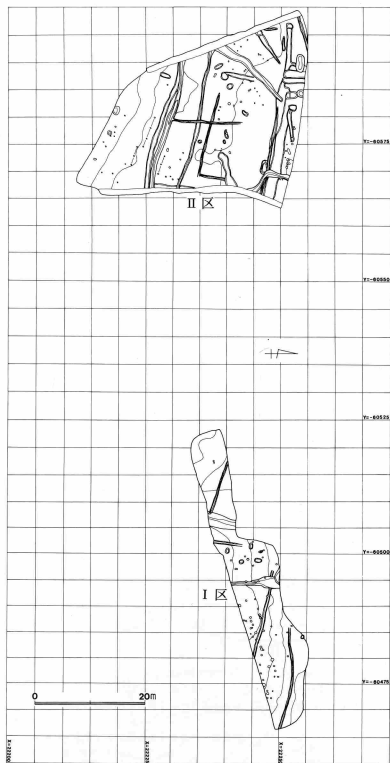
第1節 遺跡の概要

本遺跡は、生野山残丘内の比較的規模の大きな谷に面した、残丘北側斜面下の標高74mを測る低台地上に立地している。本遺跡は、この東西方向に延びる谷のほぼ中位に位置し、谷を挟んだ反対側の支丘上にある5世紀の大形円墳(金鑽神社古墳)上に作られた金鑽神社と対面している。

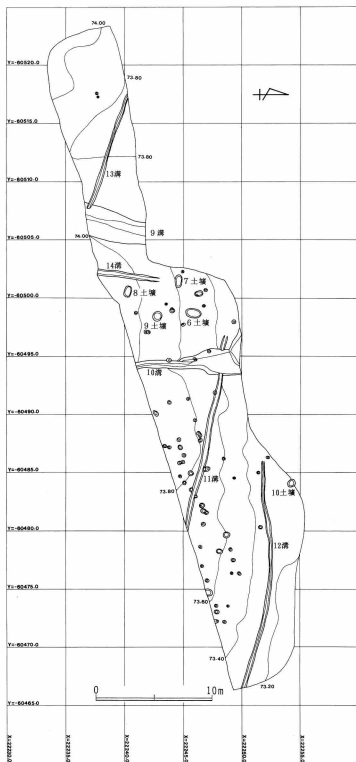
発掘調査は、水田化のために削平される東側のⅠ区と西側のⅡ区に別れて行われている。両調査区内で検出された遺構は、水田跡・井戸跡2基・柵跡3基・土塋10基・溝跡18条であるが、Ⅱ区で検出された遺構番号を付けていない溝跡と第3号溝跡と第8号溝跡の5条は、残丘斜面下の湧水が表流した跡と考えられ、厳密には人為的なものではない。これらの時期は、縄文時代～近現代にわたるものであるが、その主体は中世以降である。縄文時代の遺構は、出土遺物がないため明確ではないが、Ⅱ区南端の第3号土塋がその可能性の高いものである。この他、Ⅰ区の調査区中央部には縄文時代の包含層があり、少量ではあるが前期～後期の土器の破片と石器が出土している。古代の遺構は、Ⅱ区で土塋墓の可能性が高い平安時代の第2号土塋が検出されただけであるが、遺物は土器片・土製紡錘車・鉄鎌などが後世の遺構の覆土中からいくつか出土している。中世の遺構は、水田跡・井戸跡1基・土塋7基・溝跡3条で、Ⅰ区とⅡ区の両方から検出されている。これらの時間的な関係は明確ではないが、遺物は室町時代後半の15世紀代のものが主体であり、瀬戸窯系の花瓶や在地産の鉢と土師器皿などの破片や古銭(元豊通寶)が出土している。近世後半以降の遺構は、井戸跡1基・柵跡3基・土塋1基・溝跡10条である。溝跡はその多くが現在の地境に一致するもので、土塋(第10号土塋)は墓と考えられるものである。遺物は、18世紀～19世紀の染付碗・搦鉢・焙烙・瓦・釘などがある。



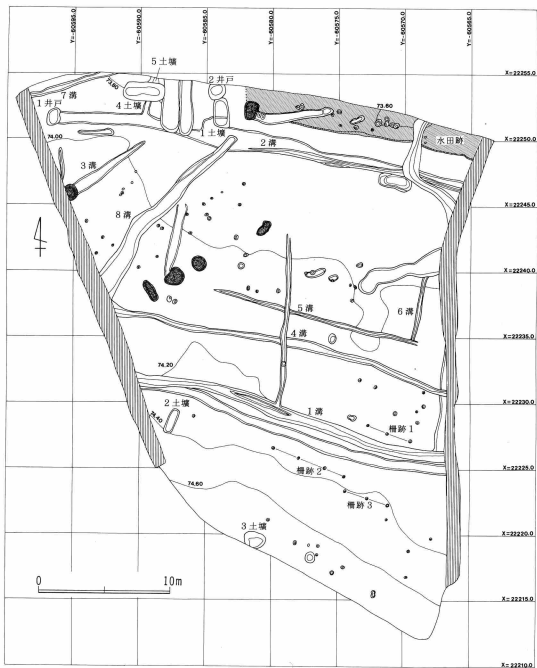
第6図 向田A遺跡調査位置図



第7図 向田A遺跡全体図



第8図 向田A遺跡 I 区全体図

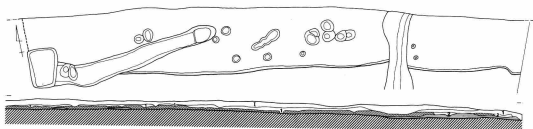


第9図 向田A遺跡Ⅱ区全体図

第2節 検出された遺構と遺物

1. 水田跡(第10図)

水田跡は、Ⅱ区の調査区北側でその南端の一部が検出されているが、後世の耕作による削平が強く及んでおり、遺存状態はあまり良くない。形態は、西側約200mに位置する向田B遺跡の水田跡のように、地形の等高線に沿って東西方向に長い帯状か長方形を呈するようであり、その南側の区画は現地表面の畑の区画とほぼ一致している。確認面からの深さは10cm程度で、底面は二次堆積ローム土を掘り込んでほぼ平坦に作られており、全体に細かな凹凸が顕著である。遺物は比較的少ないが、古代と中世のものがある。古代のものは平安時代の須恵器(No1)や土師器の破片と土製紡錘車(No3)があり、中世のものは在地産の鉢の破片(No2)と古銭(No4)が出土している。本水田跡の時期は、覆土の状態や出土遺物から中世の所産と考えられる。



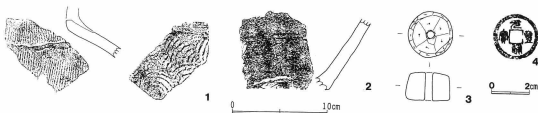
第10図 水田跡

水田跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。

第1層：黒灰色粘土層(鉄斑を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第2層：黒灰褐色土層(ロームブロックを均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)



第11図 水田跡出土遺物

水田跡出土遺物観察表

1	須恵器	B.粘土粗積み上げ。C.頸部内面ヨコナデ。胴部外面細い平行叩き、内面青海波文。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.破片。G.覆土中。
2	鉢	B.粘土粗積み上げ。C.体部外面ナデの後下端ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡灰褐色、内一暗灰色、肉一明茶褐色。F.破片。G.覆土中。H.在地産。
3	土製紡錘車	A.直径4.8、高さ3.0、重さ72g。C.表裏面ケズリ、側面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一茶褐色。F.完形。G.覆土中。
4	古銭	A.直径2.4。C.「元豊通寶」(初铸1078年)。D.銅製。F.完形。G.覆土中。

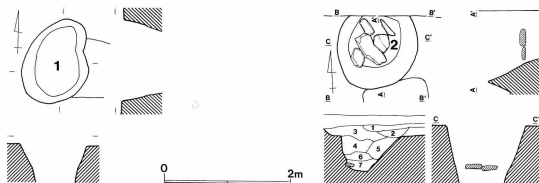
2. 井戸跡 (第12図)

第1号井戸跡 (第12図)

Ⅱ区の調査区北西端に位置する。平面形は、 $1.40\text{m} \times 1.02\text{m}$ の楕円形ぎみの形態を呈している。断面の形態は、上半がやや直線的に傾斜し、下半は垂直ぎみに掘られている。深さは完掘できなかったため不明であるが、おそらく2m近くはあるものと思われる。覆土は、上半がA軽石を多量に含む淡褐色土を主体にしている。石組や木枠等の痕跡が見られないため、素掘りの井戸であったものと思われる。遺物は、覆土中より近世後半～近代の染付碗や櫛鉢と瓦の破片が出土している。本井戸跡は、その東側に同時期と思われる第2号溝跡が、ほぼ現在の地割りに沿って延びていることから見て、家屋敷に伴う井戸ではなく、残丘下の湧水点を掘削して水田等の灌漑を目的とした溜井と考えられる。

第2号井戸跡 (第12図)

Ⅱ区の調査区北端に位置し、重複する第1号土壌に切られている。平面形は、直径1.30m程度の円形に近い形態を呈している。断面の形態は、上半がやや直線的に傾斜し、下半は垂直ぎみに深くなるようである。深さは完掘できなかったため不明であるが、おそらく1.50m位はあるものと思われる。石組や木枠等の痕跡が見られないため、素掘りの井戸であったと思われる。覆土中位からは、比較的大きな片岩が5個同じ高さに並べたような状態で出土しているが、その性格は不明である。本井戸跡の時期は、遺物がなため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。



第12図 井戸跡

第2号井戸跡土層説明

第1層：現耕作土。

第2層：黒灰色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰色砂層（細砂を主体に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰色砂層（細砂を多量に、鉄斑・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色砂層（細砂を主体に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗灰色粘土層（淡灰褐色粘土ブロックを多量に、B軽石・細砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

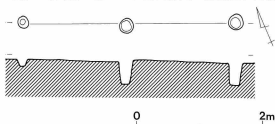
第7層：黒褐色粘土層（細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

3. 柵 跡 (第13～15図)

第1号柵跡(第13図)

Ⅱ区の調査区南側に位置する。本柵跡は、ほぼ地形の等高線に沿って、東西方向の直線上に間隔を揃えて3個のピット並んでいる。長さ約3.40mの小規模なもので、柱真間は1.70mのほぼ等間隔である。ピットは、直径18cm～25cmの円形を呈し、確認面からの深さは15cm～36cmある。

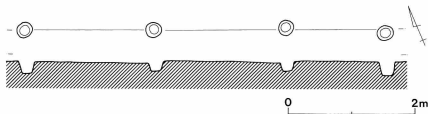
覆土は、A軽石を含む暗褐色土である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から近世後半以降のものと思われる。



第13図 第1号柵跡

第2号柵跡(第14図)

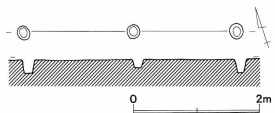
Ⅱ区の調査区南側に位置する。本柵跡は、ほぼ地形の等高線に沿って、東西方向の直線上に同規模のピットが4個並んだもので、北側の第1号柵跡や南東側の第3号柵跡と平行している。長さ約5.60mの小規模なもので、柱真間は西側と真ん中がほぼ2.00mあり、東側は1.60mで他に比べて間隔が短くなっている。ピットは、いずれも直径22cmの円形を呈し、確認面からの深さは20cm程度で浅い。覆土は、A軽石を含む暗褐色土である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から近世後半以降のものと思われる。



第14図 第2号柵跡

第3号柵跡(第15図)

Ⅱ区の調査区南側に位置する。本柵跡は、ほぼ地形の等高線に沿って、東西方向の直線上に同規模のピットが3個ほぼ距離を揃えて並んでいるもので、第1号柵跡や第2号柵跡と平行している。長さは約3.40mあり、柱真間は1.70mの等間隔で、第1号柵跡と同規模である。ピットは、いずれも直径20cm程度の円形を呈し、確認面からの深さは両端が22cm・真ん中が15cmである。覆土は、A軽石を含む暗褐色土である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から近世後半以降のものと思われる。



第15図 第3号柵跡

4. 土 墳 (第19図)

第1号土墳(第19図)

Ⅱ区北側に位置し、重複する第2号井戸跡を切っている。形態は、2.30m×1.20mのコーナー部がやや丸みをもつ南北方向に長い長方形を呈している。壁は、東西両側の壁は垂直直みであるが、南北両側の壁はやや傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦であるが、南側がテラス状に一段高くなっている。確認面からの深さは60cmを測る。土壌中央部の覆土中からは自然石が4個出土しているが、遺物は覆土中より瀬戸窯系花瓶の破片(No 1)と古代の須恵器杯の小破片が出土しただけである。



第16図 第1号土墳
出土遺物

第1号土墳出土遺物観察表

1	瀬戸窯系花瓶	B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後、鉄軸を施す。D. 白色粒。E. 内外-黒褐色、肉-淡白褐色。F. 破片。G. 覆土中。
---	--------	---

第2号土墳(第19図)

Ⅱ区南西端に位置する。形態は、1.96m×60cmのコーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦であるが、南北方向に向かって若干丸みをもつ。確認面からの深さは20cmを測る。土壌北側寄りの底面直上からは、完形の須恵器高台付椀(No 1)が伏せた状態で出土している。本土墳は、出土遺物から9世紀後半頃の所産と考えられ、その形態や遺物の出土状態から見て土壌墓の可能性が高いと思われる。



第17図 第2号土墳
出土遺物

第2号土墳出土遺物観察表

1	須恵器高台付椀	A. 口縁径14.4、器高5.8、高台部径6.3。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 内外-淡灰色。F. 完形。G. 底面。
---	---------	---

第3号土墳(第19図)

Ⅱ区南端に位置する。形態は、1.54m×1.30mのやや不整の楕円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、底面はやや凹凸が見られ若干傾斜している。確認面からの深さは、最高で46cmを測る。覆土は、非常に硬質でしまっている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは縄文時代の可能性が高いと思われる。

第4号土墳(第19図)

Ⅱ区北端に位置し、重複する第5号土墳を切っている。形態は、3.14m×1.46mの比較的規模の大きなコーナー部が丸みをもつ東西方向に長い長方形を呈している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底



第18図 第4号土墳出土遺物

面はやや狭く平坦であるが、東側に向かって若干傾斜している。確認面からの深さは、52cmを測る。遺物は、古代の土師器や須恵器の小破片と、中世の土師器皿の破片が覆土中から少量出土している。この他では、覆土中に長さ15cm程度の片岩がいくつか見られるだけである。時期は、覆土の状態や出土遺物から、中世の15世紀後半頃と考えられる。

第4号土壌出土遺物観察表

1	土師器皿	A.口縁部径(12.4)、器高3.0、底径(7.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
2	土師器皿	A.口縁部径(11.4)、器高3.1、底径(6.4)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一茶褐色。F.1/4。G.覆土中。

第5号土壌(第19図)

Ⅱ区北端に位置し、重複する第4号土壌に切られている。調査区内では遺構の一部しか検出されていないため、厳密には土壌かどうか明確ではない。形態や規模も不明であるが、南北方向に長い形態のようで、幅は1.10m程度のものである。遺物が何も出土していないため、性格等は不明であるが、時期は覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第6号土壌(第19図)

I区の中央部に位置し、南側には第7～9号土壌が近接している。形態は、1.33m×77cmの南北方向に長い楕円形を呈している。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。確認面からの深さは27cmを測る。本土壌は、各壁面が良く焼けて赤色化しており、また底面上を炭化粒子を均一に含む暗褐色土(第3層)が被覆していることから、土壌内での火の使用が窺えるが、火葬墓かどうかは明らかではない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。

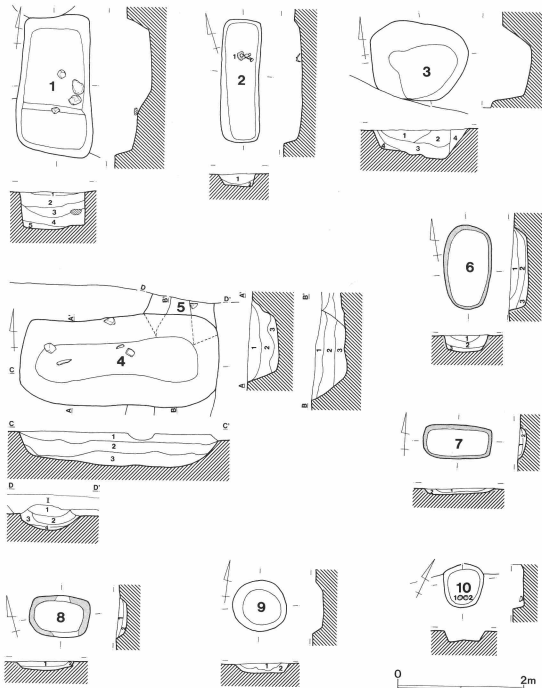
第7号土壌(第19図)

I区の中央部に位置し、東側には第6・8・9号土壌が近接している。形態は、1.10m×55cmの東西方向に長いコーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。確認面からの深さは10cmを測る。本土壌も、壁面の一部が焼けて赤色化しており、また底面上を焼土粒子や炭化粒子を均一に含む暗褐色土(第2層)が被覆していることから、土壌内での火の使用が窺えるが、第6号土壌と同様に火葬墓かどうかは明らかではない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。

第8号土壌(第19図)

I区の中央部に位置し、北側には第6・7・9号土壌が近接している。形態は、95cm×66cmの東西方向に長いコーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広くやや丸みをもっている。確認面からの深さは15cmを測る。本土壌も、壁面や底面の一部が焼けて赤色化しており、底面上を焼土粒子や炭化粒子を均一に含む暗褐色土(第2層)が被覆して

いることから、土壌内での火の使用が窺えるが、第6号土壌や第7号土壌と同様に、火葬墓かどうかは明らかではない。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。



第19図 土 壙

土壌土層説明

〈第1号土壌〉

- 第1層：暗灰色土層（B軽石を均一に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを多量に、鉄斑・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰色土層（鉄斑・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色土層（黄白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第2号土壌〉

- 第1層：暗灰色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：黒灰色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

〈第3号土壌〉

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・白色粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子・白色粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第4号土壌〉

- 第1層：暗灰褐色土層（B軽石・鉄斑を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第5号土壌〉

- 第1層：淡灰褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：明灰色土層（鉄斑・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：明灰色土層（鉄斑・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：明灰色土層（鉄斑・細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第6号土壌〉

- 第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：暗褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

〈第7号土壌〉

- 第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

〈第8号土壌〉

- 第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

〈第9号土壌〉

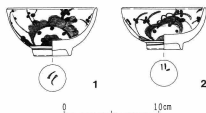
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第9号土壌(第19図)

I区の中央部に位置し、西側には第7・8・9号土壌が近接している。形態は、85cm×80cmの円形を呈している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。確認面からの深さは14cmを測る。覆土は、B軽石やローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。

第10号土壌(第19図)

I区の東側の北端に位置する。形態は、70cm×64cmのコーナー部の丸みが強い方形さみである。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、3cm～5cm程度のロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で埋め戻されている。遺物は、土壌南側の底面上に完形の伊万里系染付碗が2個体正位に並んだ状態で出土しており、また近くの床面上には中央に四角の孔をもつ腐食の激しい古銭が2枚以上重なっていた痕跡が認められた。時期は、出土遺物から18世紀以降と考えられ、その性格は覆土の状態や出土遺物から墓の可能性が高いものと思われる。



第20図 第10号土壌出土遺物

第10号土壌出土遺物観察表

1	伊万里系 染付碗	A.口縁部9.6、器高5.1、高台部径4.0。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後、畳付以外に釉を施す。D.白色粒。E.内外一淡灰白色。F.完形。G.底面。H.コバルトの発色は薄く、やや灰色がかかる。畳付に砂付着。
2	伊万里系 染付碗	A.口縁部9.1、器高4.4、高台部径3.8。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後、畳付以外に釉を施す。D.白色粒。E.内外一淡灰白色。F.ほぼ完形。G.底面。H.コバルトの発色は薄く、灰色がかかる。畳付に砂付着。

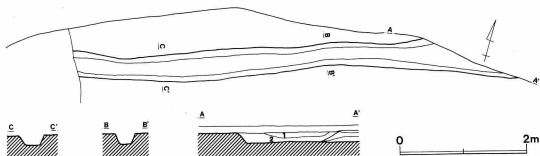
5. 溝 跡

溝跡は、I区で6条とII区で12条の合わせて18条が検出されている。これらの多くは、現地表面に見られた排水溝や畑の地境の溝に一致するもので、何回かの掘り返しが見られるものもあるが、覆土中にはA軽石を多量に含んでおり、近世後半以降から現代の新しいものである。また、II区で遺構番号を付けていない溝跡や第3号溝跡と第8号溝跡は、調査区南側の残丘斜面下の湧水が流れ出した跡と考えられるもので、覆土には細砂が充填している。これらの流水跡は、調査区北側の浅い幅広の溝跡は近世後半以降に形成されたものであるが、調査区中央部の等高線に対してほぼ直交する第3号溝跡や第8号溝跡と第6号溝跡北側に接する溝跡などの規模が大きくやや深い溝跡は、北端の中世水田跡の様相から見て、中世(15世紀)以前に形成された可能性が高い。

I区とII区で検出された溝跡の中で、中世以前に溯る可能性が高いものは、前述の湧水が流れ出した流水跡の3条以外では、I区の第11号溝跡や第13号溝跡とII区の第7号溝跡(第21図)の3条がある。いずれも地形の等高線に沿ってほぼ東西方向に流路をとるもので、幅40cm前後・深さ15cm前後の比較的小規模で均一な形態を呈している。覆土は、II区の第7号溝跡がB軽石や鉄斑を含む暗

灰色土で、I 区の第11号溝跡と第13号溝跡はロームブロックを含む黒褐色土である。

遺物は各溝跡とも非常に少ない。近世後半以降の溝跡では、第1号溝跡から焙烙と鉢の破片が、第2号溝跡から染付碗・平瓦・鉄釘などの破片が出土している。中世以前の第7号溝跡からは中世土師器皿の小破片が、第11号溝跡からは古代の土師器の破片が少量出土している。この他、近世後半以降の溝跡からも中世以前の遺物が少量混入して出土している(第22図)。

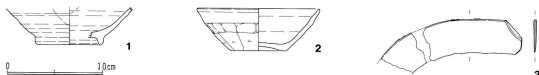


第21図 第7号溝跡

第7号溝跡土層説明

第1層：暗灰色土層(B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第2層：暗灰色土層(B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)



第22図 溝跡出土遺物

溝跡出土遺物観察表

1	灰釉陶器 椀	A. 高台部径(6.8)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後、上半に灰釉を施す。D. 白色粒。E. 内外一淡灰色、肉一淡灰褐色。F. 体部1/5。G. 覆土中。H. 第1号溝跡出土。
2	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高4.5、底径(5.8)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 第10号溝跡出土。
3	鉄 鉢	A. 残存長(14.9)、幅3.6、厚さ0.3。C. 身は湾曲し、端部は上半が折れる。F. 約3/4。G. 覆土中。H. 第10号溝跡出土。

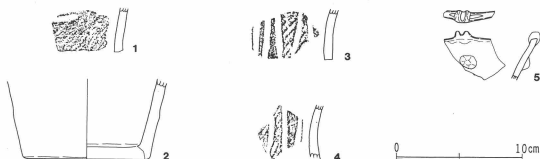
6. 縄文時代の遺物

向田A遺跡の調査では、東側のI区から縄文時代の土器の破片と石器が少量出土している。これらは、調査区中央部の包含層やそれを切る第11号溝跡の覆土中から出土している。

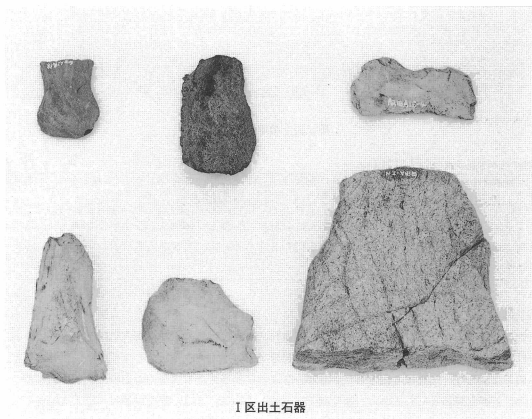
土器は、全部で20片ほど出土しているが、ほとんどが小破片で器形や時期の分かるものは少ない。1は、器内に繊維を含むもので、無節縄文(6)を施している。2は、無文で繊維の混入も明確ではないが、1に近い時期のものと思われる。3と4は、同一個体の胴部破片で、縦位沈線によって無文

部と縄文(RL縦転がし)施文部を交互に配し、それぞれの内部にさらに蛇行ぎみの沈線を1条施すものと思われる。5は、器肉が薄く無文の口縁部破片で、口唇部と口縁部外面に小突起をもっている。時期は、1と2が前期黒浜式段階に、3と4が中期加曽利EⅡ～Ⅲ式段階に、5が後期堀の内式段階にほぼ比定される。

石器は、打製石斧2・スタンプ型石器1・横刃型石器2・石皿1及び剥片が出土している。これらの石器は、包含層中から出土したものが大半であるが、時期は特定できない。



第23図 I区出土縄文土器



I区出土石器

第Ⅳ章 向田B遺跡の発掘調査

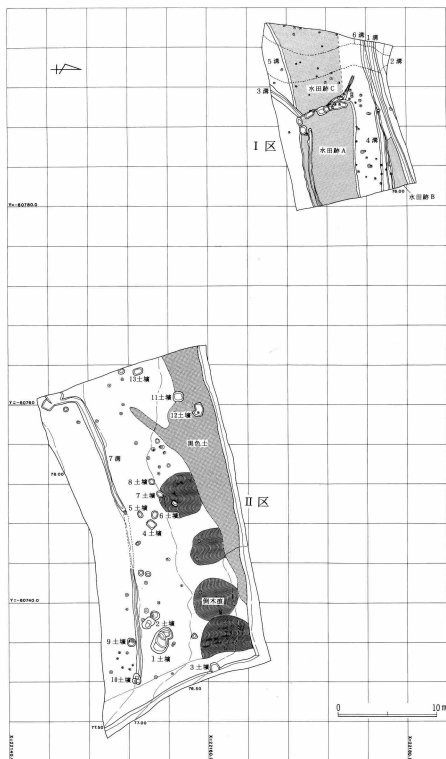
第1節 遺跡の概要

本遺跡は、向田A遺跡の西側約200mに位置し、残丘北側斜面下の標高77mを測る低台地上に立地している。遺跡の包蔵地範囲は、東側の向田A遺跡と同じであるが、A遺跡との間には小支谷の伊勢谷があり、それによって地形的には分離されている。

調査区内から検出された遺構は、水田跡・溝跡7条・土壌13基である。水田跡は、いずれも中世のもので、地形の等高線に沿って幅の狭い小規模な帯状の形態を呈し、台地緩斜面を段々に造成していたようである。これらの低台地緩斜面部の水田は、長期間継続して営まれていたような様相は見られず、比較的短期間に廃絶されたようである。おそらくは、残丘から湧き出る湧水処理の困難さと、残丘からの崩壊土の流入により、その経営維持が難しかったものと思われる。溝跡は、すべて中世以降のもので、その大半は標高の低い北側のⅠ区から検出されている。この中で規模の大きな第2号溝跡や第5号溝跡は、谷水田灌溉のための幹線水路の一つと考えられる。土壌は、標高の高い南側のⅡ区に集中している。遺物がほとんど出土していないため、その明確な時期や性格のわかるものは少ないが、第1・2・5号土壌の3基が縄文時代の可能性が高い他は、すべて中世以降のものであろう。この中で第13号土壌は、古銭が4枚出土しており、土壌墓の可能性が考えられる。



第24図 向田B遺跡調査位置図



第25図 向田B遺跡全体図

第2節 検出された遺構と遺物

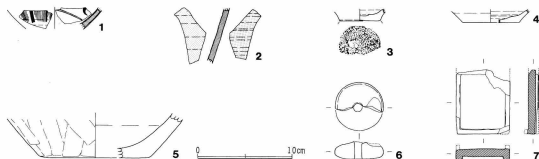
1. 水田跡(第27図)

水田跡は、I区ではほぼ同時期と考えられるA～Cの3枚と、その下の二次堆積ローム層(第12層)下から水田層の可能性が考えられるDの1面(第13層)が検出されており、いずれも中世の所産と考えられるものである。上層のA～Cは第1～4号溝跡に切られ、下層のDは第5号溝跡と第6号溝跡の埋没後に形成されている。

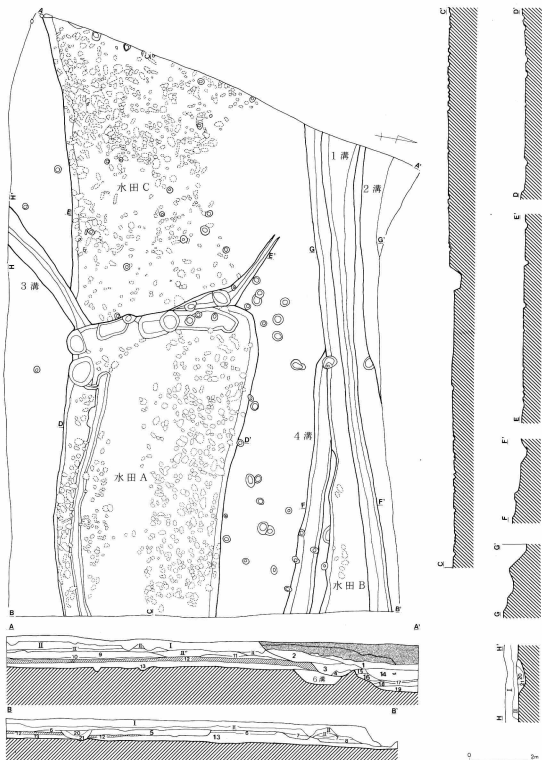
上層のA～Cの水田跡は、いずれもその形態や規模は不明であるが、地形の等高線に沿った東西方向に長い長方形か帯状の形態を呈するものと思われる。AとCは、東西方向に連続する一連のもので、Aは南北方向の幅が約5.5m前後あり、Cは北側が削平されて不明であるが、おそらくAと同規模と思われる。底面はいずれも起伏がなく水平に近い状態で、全体に足跡状の小ピットが多数見られる。AはCよりも一段低くその比高差は約20cmあり、CからAへの田越し灌漑が窺える。Bは、その南側の一部が検出されただけであるため明細は不明であるが、南側のAと幅3.2m～3.4mの畦道を挟んで平行するようである。底面は、Aよりも一段低くその比高差は約15cmある。底面の壁際には、AやCと同様の足跡状の小ピットが多く見られる。Dは、土層断面によって確認したもので、全容は不明であるが、上層のA～Cの区画や形態と異なり、調査区のはほぼ全域に広がっている。足跡状の小ピットはあまり見られないようである。

遺物は、A・B・Dからはほとんど出土していないが、Cからは少量ながら龍泉窯系青磁碗(No 1)や白磁壺(No 2)と国産陶器(常滑窯)及び在地産の火鉢・片口鉢(No 5)・内耳鍋・土師器皿(No 3・4)の破片と、硯(No 7)の破片が出土している。この他では、おそらく古代のものと思われる土製紡錘車の破片(No 6)や縄文時代中期後半の土器片と古墳時代の土師器の破片も少量出土している。

出土した中世遺物の時期は、12世紀後半～15世紀後半にわたるが、主体は15世紀後半のものである。A～Cの水田跡は、水田どうしの明確な重複や耕作土と田床が互層をなすような同一場所での長期間にわたる耕作の痕跡が認められないことから、比較的短期間の間に廃絶された可能性が高いと考えられる。また、これらの小水田は、その位置や標高から見て、調査区のすぐ西側にある小支谷からの湧水かそれを土堤によって堰止めた溜池(現うさぎ池)によって灌漑されていたものと思われる。



第26図 水田跡C出土遺物



第27図 水田跡・第1～4号溝跡

水田跡・第1～4号溝跡土層説明

- 第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）
- 第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）
- 第Ⅱ'層：淡褐色土層（第Ⅱ層に細砂を含む。）
- 第Ⅱ''層：淡灰色土層（第Ⅱ層を基本とし、粘性が強い。）
- 第1層：淡褐色土層（A軽石を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：淡灰褐色土層（A軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）

〈第1号溝跡〉

- 第3層：淡灰褐色土層（A軽石・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：淡灰褐色土層（A軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

〈水田跡A〉

- 第5層：暗灰色粘土層（B軽石・鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰色粘土層（鉄斑・B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第4号溝跡〉

- 第7層：暗灰色粘土層（B軽石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈水田跡B〉

- 第8層：黒灰色粘土層（B軽石・鉄斑・マンガン塊・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈水田跡C〉

- 第9層：暗灰色粘土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：暗灰色粘土層（砂を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第11層：暗灰色粘土層（鉄斑・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈二次流入土〉

- 第12層：淡黄褐色粘土層（ロームを主体とし、鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈水田跡D〉

- 第13層：淡灰褐色粘土層（白色粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第2号溝跡〉

- 第14層：灰褐色粘土層（鉄斑を均一に、マンガン塊・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第15層：黒灰色粘土層（白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第16層：黒灰色粘土層（マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第17層：灰色粘土層（鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第18層：灰色粘土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第19層：暗灰色粘土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第3号溝跡〉

- 第20層：黒灰色粘土層（鉄斑を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第21層：黒灰色粘土層（鉄斑・B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

水田跡C出土遺物観察表

1	龍泉窯系 青磁碗	B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後、外面ハケ。外面に蓮弁文、内面に草花文を施す。D.白色粒、黒色粒。E.内外-淡緑色。肉-淡灰色。F.破片。G.覆土中。H.内外面とも淡緑色釉。
2	白磁 壺	B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後、淡緑色釉を施す。D.白色粒。E.内外-淡緑色。F.破片。G.覆土中。
3	土師器皿	A.底径4.4。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り。D.白色粒、黒色粒。E.内外-黒褐色。F.底部1/2。G.覆土中。
4	土師器皿	A.底径(6.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外-暗褐色。F.底部1/3。G.覆土中。
5	鉢	A.底径(11.6)。B.粘土紐積み上げ。C.体部外面篋ナデ、内面ナデ。底部外面回転糸切り後、周辺部ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外面-淡灰褐色、肉-明茶褐色。F.底部1/6。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。
6	土製紡錘車	A.直径5.1、高さ1.9。C.外面ナデ。D.白色粒。E.外-淡褐色。F.1/2。G.覆土中。H.破損後二次焼成を受けている。
7	硯	A.残存長(6.9)、幅5.7、残存高(1.1)。C.表裏面及び側面丁寧な研磨。D.粘板岩。F.約1/2。G.覆土中。

2. 溝 跡(第27~29図)

第1号溝跡(第27図)

I区の北側に位置し、重複する水田跡Cや第5号溝跡と第6号溝跡を切っている。流路は、地形の等高線に沿ってほぼ東西方向に直線的に向いており、現在の地表面に見られる畑の地境にほぼ一致している。規模は、上幅が最高で1.40m、確認面からの深さは約30cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は、近世以降のものが主体で、染付碗・灯明皿・播鉢・焙烙等の破片が出土している。時期は、出土遺物から19世紀頃と考えられる。

第2号溝跡(第28図)

I区の北端に位置し、重複する第5号溝跡を切っている。調査区内では溝跡の南側の一部が検出されただけであるため、明細は不明である。流路は、地形の等高線に沿ってほぼ東西方向にとっているようである。形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦な逆台形の箱堀のようで、比較的規模の大きな溝のようである。遺物は、覆土上層(第14層)より在地産の播鉢(第28図No1)が、下層より常滑甕の胴部破片が1片出土しただけである。時期は、出土遺物が少ないため掘削時期は明確ではないが、15世紀末頃には埋没したようである。なお、本溝跡は、本遺跡の西側約200mに位置する荅丁田遺跡(本報告)の第8号溝跡(第70図)と形態が類似し、また流路方向も一致していることから、あるいはそれと関連する溝の可能性もあろう。



第28図 第2号溝跡
出土遺物

第2号溝跡出土遺物観察表

1	播鉢	A.底径(11.8)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。内面に5本歯の放射状の播目。D.白色粒。E.外-暗灰色、内-黒色。F.底部2/3。G.覆土中。H.在地産。
---	----	--

第3号溝跡(第27図)

I区の南側に位置し、重複する水田跡AとCを切っている。流路は、地形の等高線にほぼ沿うように蛇行しながら東西方向にとっているようである。形態は、底面が丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、上幅が最高で75cmあり、確認面からの深さは西端で約25cm、東端で約35cmある。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世末～近世頃のものと思われる。

第4号溝跡(第27図)

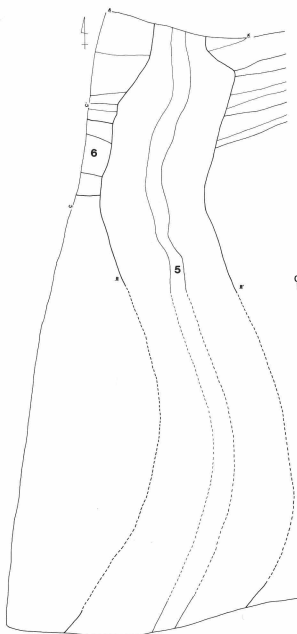
I区の南側に位置し、溝の西側はすでに削平されている。調査区内で検出された部分は、ほぼ東西方向を向いて直線的な流路をとっており、あるいはその延長上に位置する規模の大きな第2号溝跡から分水された枝溝の可能性もある。形態は、底面が平坦で広く、壁が緩やかに立ち上がっている。規模は、上幅が最高で78cmあり、確認面からの深さは10cm程度である。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土は第2号溝跡と類似しており、それと同時期の可能性が高いと思われる。

第5号溝跡(第29図)

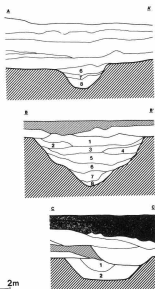
I区の西側に位置し、重複する第1号溝跡と第2号溝跡に切られ、第6号溝跡を切っている。上面には、水田跡Dが造営されている。遺構の北側半分しか調査できなかったが、流路はやや蛇行しながら地形の等高線に直交して南北方向にとっている。断面の形態は、壁が直線的に立ち上がり底面の狭い薬研堀に類似している。規模は、上幅が2.40m前後あり、確認面からの深さは1.05mで、比較的規模の大きな溝である。本溝跡は、覆土の状態から水路であったことが窺え、その流路から見てI区西側の小支谷の湧水を利用した灌排水路か、溜池(現うさぎ池)からの幹線的な灌漑水路であった可能性が高い。調査した範囲内では掘り返し等によって長期に水路を維持管理していたような痕跡が見られないことから、比較的短期間に調査区西側の現水路の方に、流路が変更されたものと思われる。覆土中には木の小枝や葉がいくらか見られたが、遺物は縄文時代中期後半の土器片が1片出土しただけで、本溝跡に伴う遺物はまったく出土しなかった。時期は、覆土の状態や重複関係から15世紀前半以前の所産と考えられる。

第6号溝跡(第29図)

I区の西端に位置し、重複する第1号溝跡と第5号溝跡に切られ、上面に水田跡Dが造営されている。断面の形態は、壁が緩やかで直線的に立ち上がり、底面は広く平坦な逆台形の箱堀に似ており、規模は上幅が1.80m、確認面からの深さは50cmを測る。流路は、調査区内では地形の等高線に沿ってほぼ東西方向にとっているが、第5号溝跡の東側に本溝跡の延長が見られないことからすると、当初は第5号溝跡に合流していたのか、あるいは第5号溝跡の流路に一致して北側に屈曲した流路をとっていた可能性も考えられる。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態や重複関係から、15世紀前半以前の所産と考えられ、第5号溝跡と近い時期と思われる。



第29図 第5・6号溝跡



第5号溝跡土層説明

- 第1層：暗黄灰色粘土層（ローム粒子を多量、細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗黄灰色粘土層（ローム粒子・細砂粒を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色粘土層（B軽石・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰褐色粘土層（ローム粒子・B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色粘土層（緑色粘土粒子・細砂粒を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：黒灰色粘土層（B軽石・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：黒灰色粘土層（B軽石・炭化粒子を均一に、細砂粒を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：黒灰色粘土層（B軽石・細砂粒子・緑色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6号溝跡土層説明

第1層：灰褐色粘土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色粘土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7号溝跡(第25図)

Ⅱ区の南側に位置し、地形の等高線に沿ってほぼ東西方向に向いている。水が流れていた痕跡はなく、区画を目的としたものと考えられる。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面は広くやや凹凸が見られる。規模は、上幅が最高で44cmあり、確認面からの深さは10cm前後である。覆土は、A軽石やローム粒子を均一に含む暗褐色土である。遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から見て、近現代に近いものと考えられる。

3. 土 壙

第1号土壙(第30図)

Ⅱ区の東側に位置する。おそらく2～3基の土壙が重複しているものと思われるが、切り合い関係は明確にできなかった。規模は、東西方向2.90m・南北方向1.76mあり、深さは中央部が40cm・東側が20cm・西側が32cmを測る。形態は、中央部のものが楕円形で、東西両側のものは不正円形を呈し底面はやや角張っている。これらの覆土は、いずれもローム粒子や炭化粒子を含んだ非常に硬質な暗褐色土である。遺物は何も出土しなかったが、覆土の状態からは縄文時代の可能性が高いと思われる。

第2号土壙(第30図)

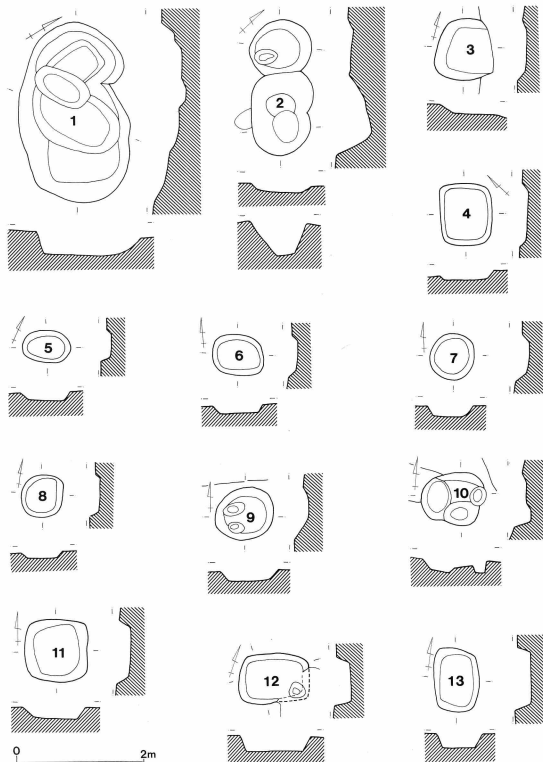
Ⅱ区の東側に位置する。平面形は楕円形に近い形態を呈し、規模は東西方向1.32m・南北方向98cmあり、深さは最高で55cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は東側に向かって傾斜している。遺物は何も出土しなかったが、覆土は第1号土壙と同一であり、時期は縄文時代の可能性が高いと思われる。

第3号土壙(第30図)

Ⅱ区の東端に位置し、東側を現在の地境の溝に切られている。平面形は、コーナー部の丸み強い長方形ぎみの形態を呈していたようである。規模は、南北方向が1.00m・東西方向は96cmまで測れ、深さは15cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦で東側に向かってやや傾斜している。覆土は、B軽石と白色粘土ブロックを含む暗灰色粘土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世～近世前半頃のものと思われる。

第4号土壙(第30図)

Ⅱ区の中央部に位置する。平面形は、コーナー部の丸み強い長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が98cm・北西～南東方向が83cmあり、深さは10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、第3号土壙と類似している。遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世～近世前半頃のものと思われる。



第30図 土 坑

第5号土壌(第30図)

Ⅱ区の中央部に位置する。平面形は、楕円形に近い形態を呈している。規模は、東西方向が76cm・南北方向が51cmあり、深さは14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、第1号土壌や第2号土壌に類似した硬質の暗褐色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は覆土の状態から縄文時代の可能性が高いと思われる。

第6号土壌(第30図)

Ⅱ区の中央部に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強いやや不整の長方形を呈している。規模は、東西方向が80cm・南北方向が65cmあり、深さは13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、B軽石と白色粘土ブロックを含む暗灰色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世～近世前半頃のものと思われる。

第7号土壌(第30図)

Ⅱ区の中央部に位置する。平面形は、やや不整の円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が75cm・東西方向が70cmあり、深さは18cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、第6号土壌と類似しており、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世～近世前半頃のものと思われる。

第8号土壌(第30図)

Ⅱ区の中央部に位置する。平面形は、やや不整円形を形態を呈している。規模は、南北方向が66cm・東西方向が65cmあり、深さは12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、第6号土壌や第7号土壌と類似している。遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世～近世前半頃のものと思われる。

第9号土壌(第30図)

Ⅱ区の東側に位置し、第7号溝跡と接している。平面形は、やや東西方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が95cm・南北方向が82cmあり、深さは18cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦で小ピットを2箇所伴っている。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第10号土壌(第30図)

Ⅱ区の南東側に位置し、第7号溝跡に切られている。また、土壌の大半を3つのピットに切られているため形態は不明である。確認面からの深さは、最高で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦であったようである。覆土は、ローム粒子を微量含む暗茶褐色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世以前と思われる。

第11号土墳(第30図)

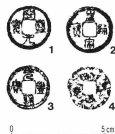
Ⅱ区の北西側に位置する。平面形は、方形に近い形態を呈している。規模は、東西・南北両方向とも約1.00mあり、深さは20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、A軽石や白色粘土粒子を含む暗灰褐色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第12号土墳(第30図)

Ⅱ区の北西側に位置する。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈している。規模は、東西方向が1.10m・南北方向が80cmあり、深さは27cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、A軽石を含む暗灰褐色土で、遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第13号土墳(第30図)

Ⅱ区の西端に位置する。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形に近い形態を呈している。規模は、南北方向が1.02m・東西方向が72cmあり、深さは26cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、B軽石やローム粒子及びロームブロックを含む暗灰色土である。本土墳は、北側の底面付近より古銭が4枚重なって出土しており、土壌墓の可能性も考えられる。時期は、覆土の状態や出土遺物から、中世の所産と考えられる。



第31図 第13号土墳
出土遺物

第13号土墳出土遺物観察表

1	古 銭	A. 2.35。C. 「開元通寶」(初鑄621年)。D. 銅製。F. 完形。G. 底面。
2	古 銭	A. 2.50。C. 「皇宋通寶」(初鑄1039年)。D. 銅製。F. 完形。G. 底面。
3	古 銭	A. 2.30。C. 「元豊通寶」(初鑄1078年)。D. 銅製。F. 完形。G. 底面。
4	古 銭	A. 2.35。C. 摩滅がひどく判読不能。D. 銅製。F. 完形。G. 底面。



第V章 壹丁田遺跡の発掘調査

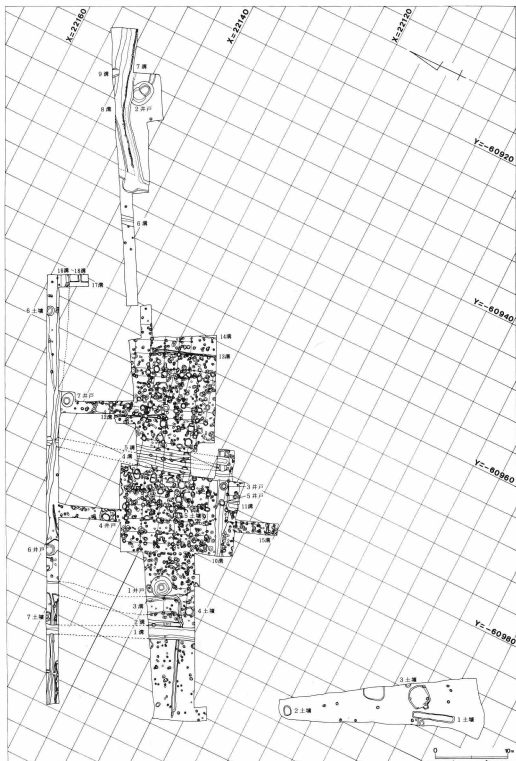
第1節 遺跡の概要

本遺跡は、向田B遺跡の西側約150mの谷奥に位置する。残丘北側斜面下の標高78m～80mを測る狭い低台地上に立地する中世の屋敷跡で、西側には溜池の「弁天池」と「上の池」が近在している。

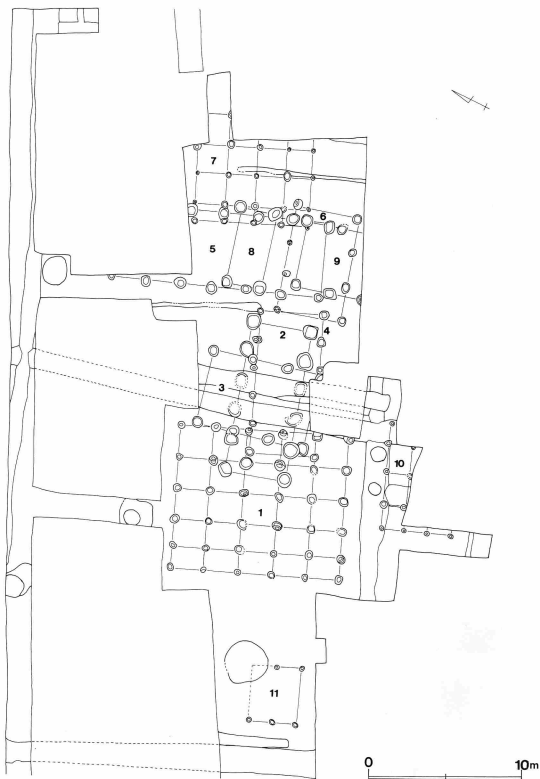
調査区内で検出された遺構は、掘立柱建物跡11棟・井戸跡7基・土壇9基・溝跡20条・ピット多数である。これらはすべて中世以降のものであるが、この中で第6号土壇と第3・7・13・14号溝跡や、遺構番号の付けていないものは、浅間山系A軽石降下後の近世後半以降に属するものである。中世の屋敷跡は、調査範囲が狭いため具体的な様相は明確ではないが、調査した範囲は現在地表面に見られる谷内の地割りの中では不自然な約100m四方の地割りの中に位置しており、この地割りが屋敷地の範囲であった可能性も推測される。また、小字名の「壹丁田」との関係も興味深い。時期は、概ね13世紀から16世紀前半頃にかけて、おそらく継続的に営まれたものと思われる。屋敷地は、その内外を堀や溝によって区画していることが予想されるが、屋敷内部の敷地割りは時期によって変化しており、特に中世後半の溝跡は、現地表面の畑の区画溝と一致しているものが多い。出土遺物は比較的豊富で、中国製陶磁器(白磁・青磁・青白磁・陶器)、国産陶器(猿投・渥美・常滑・瀬戸・珠洲)、在地土器(土師器皿・片口鉢・播鉢・火鉢・土釜・内耳鍋)、木製品(漆塗椀・横枕・杭等)、石製品(硯・砥石・粉挽臼・茶臼・窪み石・温石)、鉄製品(刀子・釘等)、銅製品(切羽・古銭)などが出土している。



第32図 壹丁田遺跡調査位置図



第33図 壺丁田遺跡全体図



第34図 掘立柱建物跡配置図

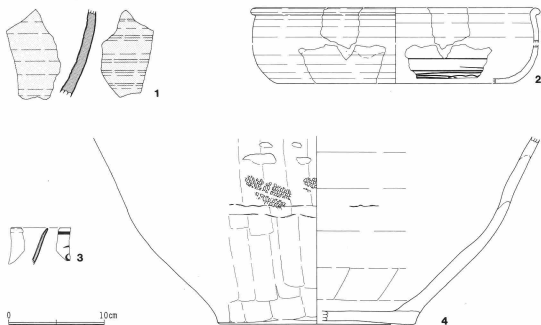
第2節 検出された遺構と遺物

1. 掘立柱建物跡

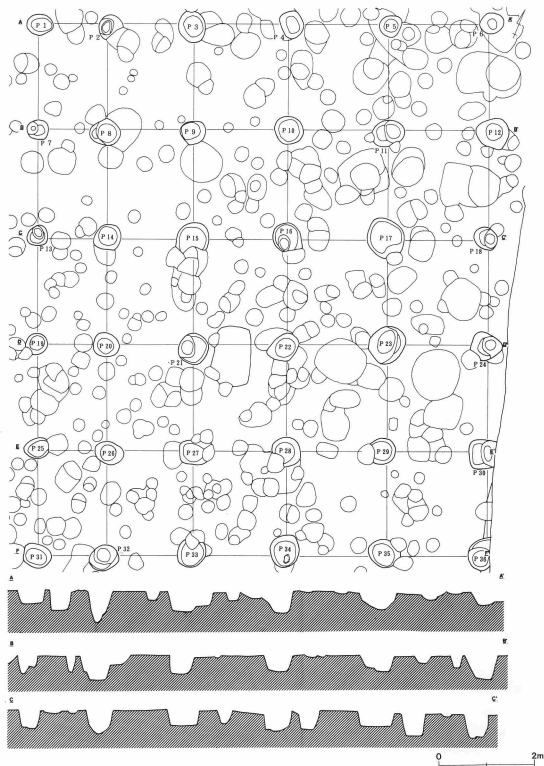
第1号掘立柱建物跡(第36・37図)

西側調査区の中央部に位置し、第2～4号掘立柱建物跡及び第5号土壌と重複し、西側側柱穴の一部を第4号溝跡に切られている。建物跡の形態は、南北方向5間・東西方向4間の長方形を呈し、建物内部に東柱をもつ総柱式で、西側に庇を伴っている。規模は、身舎部分の梁行方向がほぼ8m・桁行方向がほぼ11.20mで、庇の幅は1.40mを測る。建物跡の桁行方向は、N-22°-Wを向いている。柱通りは良く、いずれの柱穴列とも直線上に比較的整然と配列されている。柱心間は、桁行側は北から南へ2間目が2.28mと若干広くなっているが、他の4間はいずれも2.23mでほぼ揃っている。梁行側の柱心間はやや不揃いで、東から2.10m・2.10m・2.00m・1.80mを測り、西側半分の1間幅が東側に比べてやや狭くなっている。柱穴掘り方は、その多くが新しい時期のビットに多数切られているため、遺存状態はあまり良くない。平面形は、長さ55cm～84cmの円形や楕円形に近い形態を呈している。確認面からの深さは、35cm～68cmあるが、40cm～50cmのものが主体である。庇部分の柱穴は、身舎部分に比べて若干規模が小さく、深さも若干浅いものが多い。柱穴掘り方の覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土で、礎石を伴うものはない。

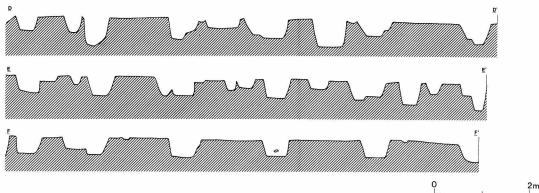
遺物は、白磁壺(Na1)・緑釉盤(Na2)・龍泉窯系青磁碗(Na3)・常滑窯系甕(Na4)の破片が柱穴P14の覆土中から出土し、その南側のP20よりNa2の口縁部破片が出土している。この他では、P4付近から体部が内湾形態でロクロ成形の土師器皿の小破片や、P15付近から15世紀後半の内耳鍋の破片が出土しているが、これらは本建物跡に直接伴うものではなく、重複する新しい時期のビットから混入した可能性が高いと考えられる。



第35図 第1号掘立柱建物跡出土遺物



第36図 第1号掘立柱建物跡(1)



第37図 第1号掘立柱建物跡②

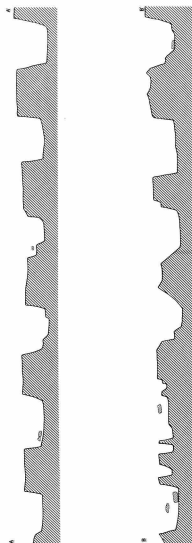
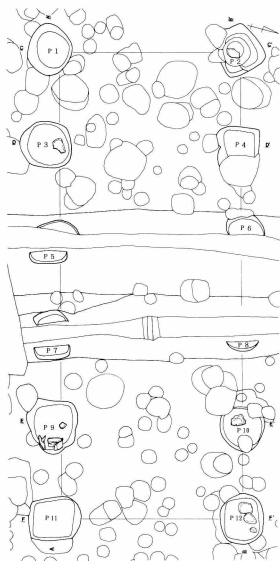
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	白磁壺	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後、無色の釉を施す。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一暗白色。F. 破片。G. 柱穴P14覆土中。
2	緑釉盤	A. 口縁径(30.6)、器高(8.0)、底径(25.0)。C. 内外面とも回転ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一緑色、肉一暗灰褐色。F. 破片。G. 柱穴P14・P20覆土中。H. 内外面とも緑色釉、外面下半暗茶褐色の化粧釉、底部外面露胎。
3	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。内面に文様を施す。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一緑灰色、肉一淡灰色。F. 破片。G. 柱穴P14覆土中。H. 内外面に緑灰色釉。
4	常滑窯系甕	A. 底径(20.8)。B. 粘土粗積み上げ。C. 内外面とも簀ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 底部1/8。G. 柱穴P14覆土中。H. 胴部外面の格子目の押印文は間隔が狭い。底部外面砂付着。第3号井戸跡の覆土中より、同一個体の破片が出土。

第2号掘立柱建物跡(第38図)

西側調査区の中央部に位置し、重複する第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡を切り、第4号溝跡と第5号溝跡に切られている。建物跡の形態は、東西方向5間・南北方向2間の長方形を呈する側柱式であるが、南北方向の梁行側は真ん中の棟持柱の柱穴は見られない。規模は、桁行方向がほぼ9.80m・梁行方向がほぼ3.92mで、桁行・梁行とも1間の柱心間がほぼ1.96mの等間隔である。建物跡の桁行方向は、 $N-75^{\circ}-E$ を向いている。柱通りは比較的良く、いずれの桁行側の柱穴列とも直線上に配列されており、相互に対応している。柱穴掘り方は、本遺跡で検出された建物跡の中では最も規模が大きく、長さ幅とも1m前後の楕円形から方形に近い形態を呈している。ほとんどの柱穴に柱痕が見られ、比較的大きな自然石を礎石や根回しに使用しているものが多い。確認面からの深さは、24cm～62cmあるが、40cm～50cm程度のものが主体である。柱穴掘り方の埋土は、礎石を置いて柱を立てた後、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色粘土(第3層)と暗茶褐色粘土(第4・5層)の互層により版築状に埋め戻されている。

遺物は、柱穴P3の掘り方埋土中からNo1～4の白磁壺・青白磁・青磁碗・土師器皿と瀬戸窯系製品の破片が出土し、P9とP11の掘り方埋土中からNo5の土釜の破片が出土している。この他では、No6の砥石の破片がP11から出土している。



0 2m



第38図 第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

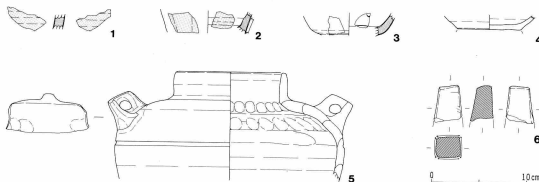
第1'層：暗灰褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗黄褐色粘土層（ロームブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗茶灰褐色粘土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶褐色粘土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



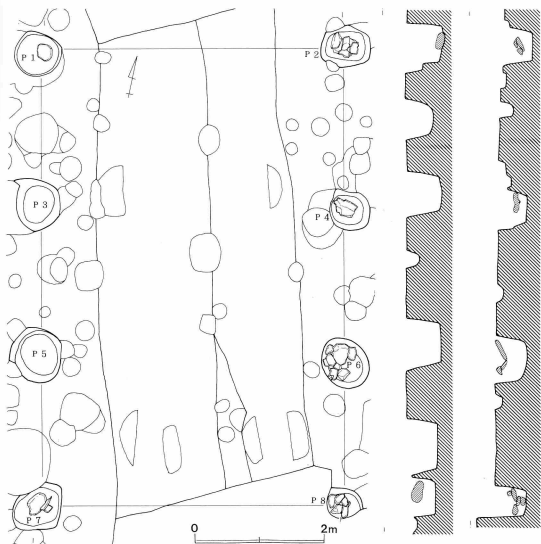
第39図 第2号掘立柱建物跡出土遺物

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	白磁壺	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後、無色の釉を施す。D. 黒色粒。E. 内外一暗白色。F. 破片。G. 柱穴P 3掘り方埋土中。
2	青白磁	B. ロクロ成形の後外面貼り付け。C. 外面ナデ、内面回転ナデ。D. 黒色粒。E. 内外一淡緑白色。F. 破片。G. 柱穴P 3掘り方埋土中。H. 外面及び内面下半に淡緑白色釉。
3	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後、暗緑色の釉を施す。D. 白色粒、黒色粒。F. 破片。G. 柱穴P 3掘り方埋土中。H. 内面に文様を施す。
4	土師器甕	A. 底径(6.8)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一淡橙褐色。F. 底部のみ。G. 柱穴P 3掘り方埋土中。
5	土釜	A. 口縁部径(11.6)。B. 粘土紐積み上げ。耳貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヨコナデの後上半指ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 1/5。G. 柱穴P 9・P 11掘り方埋土中。H. 外面煤付着。
6	砥石	A. 残存長(4.0)、残存幅(3.0)、厚さ(2.4)、重さ(33g)。C. 表裏両側面とも良く磨かれている。D. 凝灰岩。F. 破片。G. 柱穴P 11掘り方埋土中。

第3号掘立柱建物跡(第40図)

西側調査区の中央部に位置し、重複する第4号掘立柱建物跡を切り、第2号掘立柱建物跡と第4号溝跡及び第5号溝跡に切られている。建物跡の形態は、南北方向3間・東西方向2間の長方形を呈する側柱式であるが、南北方向の梁行側は真ん中の棟持柱の柱穴は見られない。規模は、桁行方向がほぼ7.20m・梁行方向がほぼ4.80mで、桁行・梁行とも1間の柱心間がほぼ2.40mの等間隔である。建物跡の桁行方向は、N-12°-Wを向いている。柱通りは比較的良く、いずれの桁行側の



第40図 第3号掘立柱建物跡

柱穴列とも直線上に配列されており、相互に対応している。柱穴は、長さ80cm前後の円形や楕円形を呈するものが多いが、やや長方形ぎみのものも見られる。確認面からの深さは、50cm前後で比較的揃っている。底面は比較的広く平坦で、礎石や根回しの石を伴うものが多い。

遺物は、柱穴P2とP4の覆土中からロクロ成形の土師器皿の小破片が数片出土しただけである。



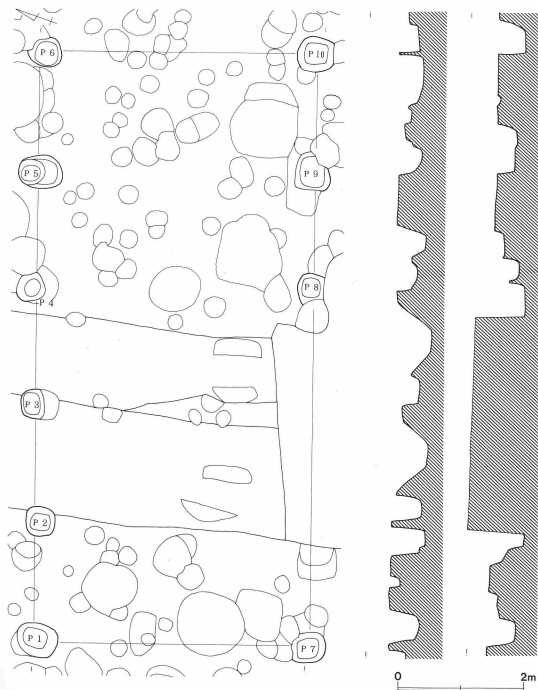
第41図 第3号掘立柱建物跡出土遺物

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	土師器皿	A. 口縁部径(11.6)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外淡橙褐色。F. 口縁部1/4。G. 柱穴P2覆土中。
---	------	---

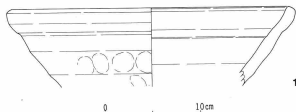
第4号掘立柱建物跡(第42図)

西側調査区の中央部に位置し、重複する第2号掘立柱建物跡や第3号掘立柱建物跡と第4号溝跡や第5号溝跡に切られている。建物跡の形態は、東西方向5間・南北方向2間の長方形を呈する側



第42図 第4号掘立柱建物跡

柱式であるが、南北方向の梁行側は真ん中の棟持柱の柱穴は見られない。規模は、桁行方向がほぼ9.50m、梁行方向がほぼ4.40mある。建物跡の桁行方向は、N-72°-Eを向いている。柱通りは比較的良く、いずれの桁行側の柱穴列とも直線上に配列されており、相互に対応している。柱心間は、



第43図 第4号掘立柱建物跡出土遺物

桁行側は1間ほぼ1.90mの等間隔で、梁行側は中心の棟持柱がないため明確ではないが、おそらく1間2.20mくらいと思われる。柱穴は、長さ45cm~70cmのややコーナー部の丸みが強い方形もしくは長方形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは、30cm~45cmで、底面は平坦である。覆土は、ロームブロックを均一に含む暗茶褐色土で、柱痕は見られない。

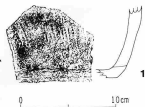
遺物は、P1から在地産の鉢(Na1)と土師器皿の破片が、P6から瀬戸窯系大皿類の小破片が出土している。なお、このNa1の鉢の破片は、第5号土塋から出土した破片と接合している。

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	鉢	A.口縁部径(30.4)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-暗灰色。F.口縁部1/6。G.柱穴P1覆土中。H.内面は良く擦れている。第5号土塋出土の破片と接合。H.在地産。
---	---	---

第5号掘立柱建物跡(第45図)

西側調査区の中央部の東側寄りに位置し、重複する第7号掘立柱建物跡を切っている。また、第6・8・9号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。建物跡の形態は、東西方向が2間、南北方向は6間以上の非常に細長い長方形を呈した側柱式であるが、東西方向の梁行側は真ん中の棟持柱の柱穴は見られない。規模は、東西方向がほぼ4.90m、南北方向は13.80m以上ある。建物跡の桁行方向は、N-22°-Wを向いている。柱通りは比較的良く、いずれの桁行側の柱穴列とも直線上に配列されており、相互に対応している。柱心間は、桁行側は1間ほぼ2.30mの等間隔で、梁行側は中心の棟持柱がないため明確ではないが、おそらく1間2.45mくらいと思われる。柱穴掘り方は比較的規模が大きく、長さ70cm~1mの円形もしくは楕円形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは55cm~90cmあるが、60cm~70cmくらいのものが主体である。ほとんどの柱穴に柱痕が見られ、P6には15cm程度の小さな礎石が据えてある。掘り方埋土は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第6層)と暗灰色土(第7層)の互層によって、版築状に埋め戻されている。

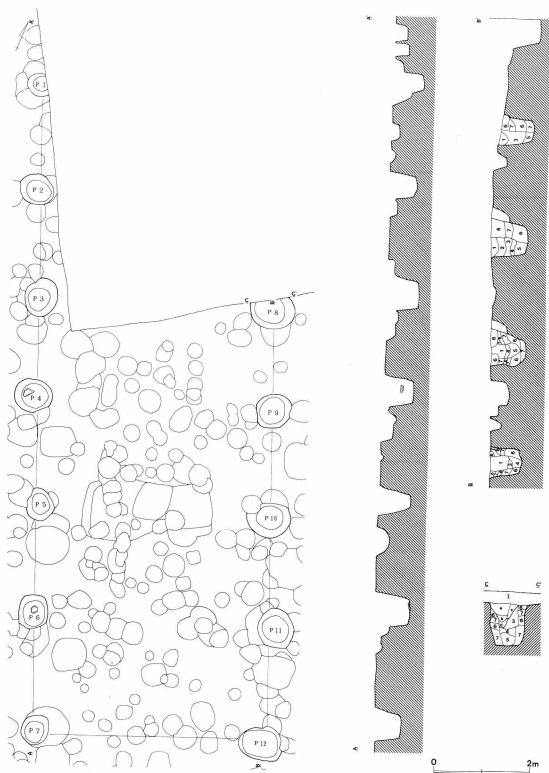


第44図 第5号掘立柱建物跡出土遺物

遺物は、P12の掘り方埋土中からNa1の火鉢の破片が出土し、P2・P10・P12から土師器皿や在地産鉢の小破片が少量出土している。

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	火鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ。体部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡褐色、内-淡灰褐色。F.破片。G.柱穴P12覆土中。H.外面煤付着。
---	----	---



第45図 第5号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡土層説明

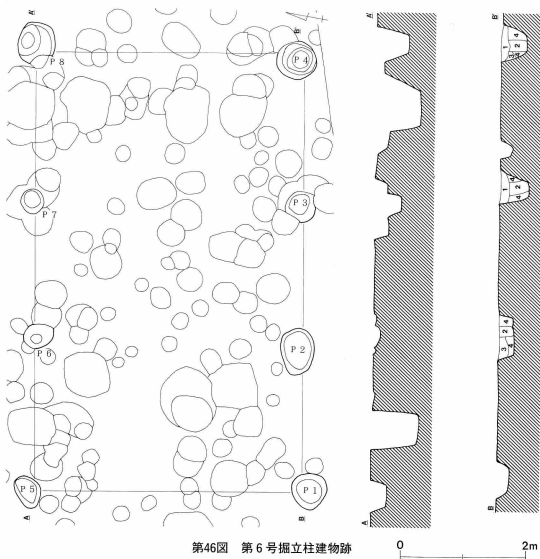
- 第a層：淡茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
 第b層：淡茶褐色土層（ローム粒子・B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
 第c層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第d層：暗灰褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第1層：淡灰褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第7層：暗灰色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第6号掘立柱建物跡(第46図)

西側調査区の中央部の東側寄りに位置し、第4・5・9号掘立柱建物跡と重複している。建物跡の形態は、東西方向3間、南北方向2間の長方形を呈する側柱式であるが、南北方向の梁行側は真ん中の棟持柱の柱穴は見られない。規模は、東西方向がほぼ36.90m、南北方向がほぼ4.20mある。建物跡の桁行方向は、N-69°-Eを向いている。柱通りは比較的良好く、いずれの桁行側の柱穴列とも直線上に配列されており、相互に対応している。柱心間は、桁行側が1間2.30mの等間隔で、梁行側は中心の棟持柱がないため明確ではないが、おそらく1間2.10mくらいと思われる。柱穴掘り方は、長さ50cm～70cmの円形か楕円形に近い形態を呈している。確認面からの深さは13cm～50cmとややばらつきがある。ほとんどの柱穴に柱痕(第2層)が見られ、掘り方はロームブロックを均一に含む暗黄褐色土(第4層)で埋められている。遺物は、柱穴P2の覆土中から、西側調査区中央部のP20から出土した山茶碗系鉢(第81図No17)と同一個体の小破片が1片出土している。

第7号掘立柱建物跡(第47図)

西側調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第5号掘立柱建物跡と第8号掘立柱建物跡及び第13号溝跡に切られている。建物跡の形態は、建物の北側と東側が調査区外にさらに延びる可能性があるため明確ではないが、調査区内では南北方向は4間まで、東西方向は3間と西側に幅の狭い庇を伴っている。建物内部にも柱穴をもつ総柱式であるが、建物の中心部の2間×3間を構成する柱穴は、周囲の柱穴に比べて規模がやや大きく、比較的大きな礎石を伴っている。そのため、中心部の2間×3間が身舎で、南北両側の1間は下屋であった可能性もある。規模は、南北方向が7.60mまで、東西方向が6mまで測れ、庇部分の幅は1.20mある。建物跡の南北方向は、N-23°-Wを向いている。柱心間は、両方向とも不揃いで、南北方向が南から1.70m・1.95m・1.95m・2.00m、東西方向が東から2.10m・1.90m・2.00mで、両方向とも1間幅が不揃いである。柱穴は、長さ25cm～68cmの円形か楕円形ぎみの形態を呈し、確認面からの深さは20cm前後とやや浅い。覆土は、ローム粒子を微量含む暗褐色土である。遺物は、比較的大きなP15の柱穴覆土中より、No1の在地産鉢とNo2の火鉢の小破片が出土しているが、これらは本建物跡の時期を示すものではなく、混入の可能性が高い。この他では、P2の底面より礎石に転用されたNo4の温石の破片が出土している。



第46図 第6号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

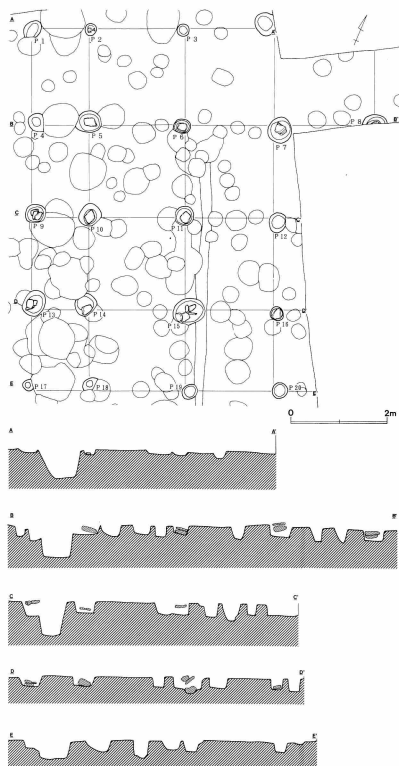
第2層：黒灰色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

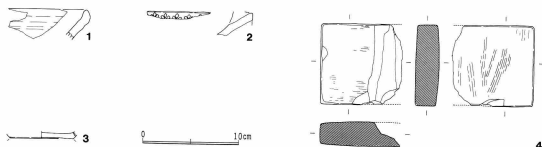
第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	鉢	B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡灰褐色、肉—淡橙褐色。F. 破片。G. 柱穴P15覆土中。H. 在地産。
2	火鉢	B. 粘土経積み上げ。C. 柱穴内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 破片。G. 柱穴P15覆土中。H. 外面に押印文。
3	土師器皿	A. 底径(6.7)。B. ロクロ成形。C. 体部外面回転ナデ。底部内面ナデ、外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—暗褐色、内—暗茶褐色。F. 底部のみ。G. 柱穴P12覆土中。



第47図 第7号掘立柱建物跡

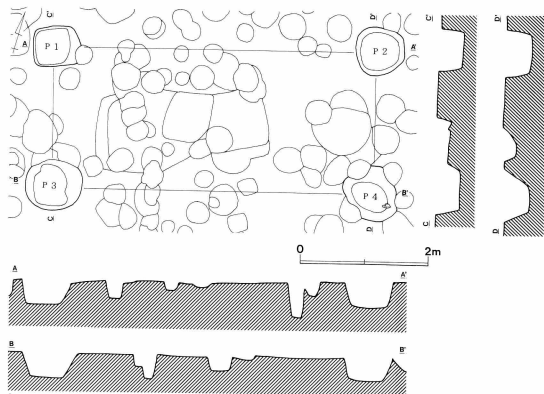


第48図 第7号掘立柱建物跡出土遺物

4	温石	A. 長さ8.6、残存幅(8.6)、厚さ2.6。C. 表裏各側面とも丁寧な研磨。E. 滑石。G. 柱穴P2底面。H. 礎石に転用。
---	----	---

第8号掘立柱建物跡(第49図)

西側調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第7号掘立柱建物跡を切っている。また、第5号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。建物跡の形態は、南北方向が1間で東西方向が2間の非常に規模の小さな長方形を呈している。規模は、南北方向が2.25m、東西方向が5.90mを測る。建物跡の東西方向は、N-75°-Eを向いている。柱穴掘り方は、長さ80cm

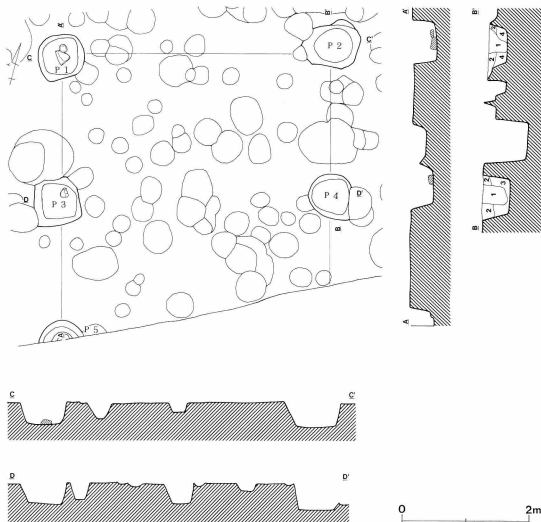


第49図 第8号掘立柱建物跡

前後のやや丸みの強い方形ぎみの形態を呈し、確認面からの深さはいずれも38cmで、底面は広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第9号掘立柱建物跡(第50図)

西側調査区中央部の東側寄りに位置する。重複する第7号掘立柱建物跡を切っている。また、第5号掘立柱建物跡や第6号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。建物跡の形態は、調査区内では建物の一部しか検出されていないため全容は不明であるが、調査区内で



第50図 第9号掘立柱建物跡

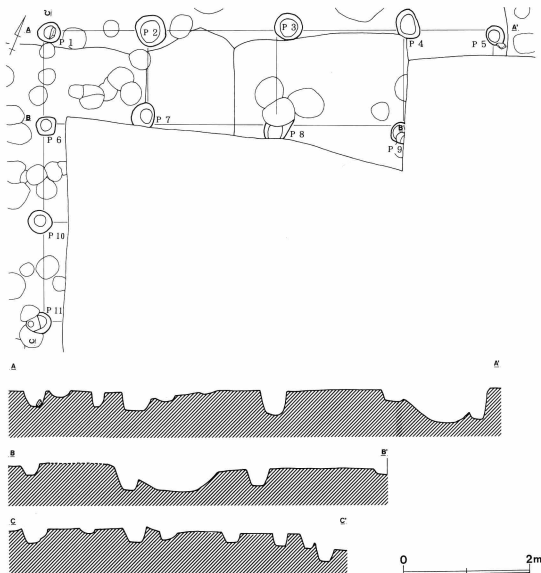
第9号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層(焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)
- 第2層：淡灰褐色土層(ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第3層：暗黄褐色土層(ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第4層：暗茶褐色土層(ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

は東西方向が2間で、南北方向は2間以上の長方形を呈する側柱式のようなものである。規模は、東西方向がほぼ4.20m、南北方向は4.58mまで測れる。建物跡の南北方向は、N-15°-Wを向いている。柱通りは、比較的良い。柱穴掘り方は、長さ70cm~90cmのやや丸みの強い方形や長方形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは40cm前後あり、底面は広く平坦である。いずれの柱穴にも柱痕が見られ、掘り方は版築状に埋め戻された可能性がある。遺物は、何も出土しなかった。

第10号掘立柱建物跡(第51図)

西側調査区中央部の南端に位置し、重複する第4号溝跡と第10号溝跡に切られている。建物跡の

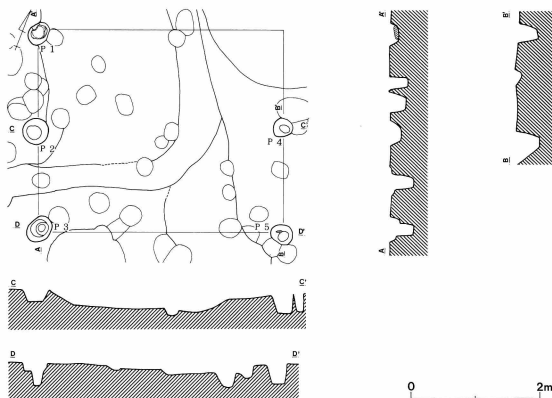


第51図 第10号掘立柱建物跡

形態は、大半が調査区外であるため明確ではないが、東西方向2間・南北方向3間の身舎部分の東西両側に底か下屋が付く構造の可能性が考えられる。規模は、身舎部分の東西方向がほぼ4m、南北方向がほぼ4.70mあり、西側の底部分の幅は1.60m、西側の底部分の幅は1.40mある。建物跡の南北方向は、N-21°-Wを向いている。柱心間は、身舎部分の東西方向は1間2mの等間隔であるが、南北方向は南側から1.60m・1.60m・1.50mで、北側の1間が他に比べて若干狭くなっている。柱穴は、長さ30cm～50cmの円形を呈し、確認面からの深さは20cm～50cmでややばらつきが見られる。覆土はローム粒子を含む暗褐色土で、遺物は何も出土していない。

第11号掘立柱建物跡(第52図)

西側調査区の西側に位置し、重複する第1号井戸跡や第3号溝跡に切られている。建物跡の形態は、建物の南側が調査区外に延びる可能性があるため明確ではないが、東西方向が2間・南北方向は2間以上の長方形を呈する側柱式と思われる。規模は、東西方向が3.80m・南北方向は3.20m以上ある。建物跡の南北方向は、N-20°-Wを向いている。柱心間は、南北方向が1間1.60mの等間隔で、東西方向は1間はほぼ1.90mと思われる。柱穴は、長さ30cm～40cmの円形を呈し、確認面からの深さは14cm～36cmある。この中のP1は、比較的大きな礎石を伴っている。覆土はローム粒子を含む暗褐色土で、遺物は何も出土していない。



第52図 第11号掘立柱建物跡

2. 井戸跡(第55・56図)

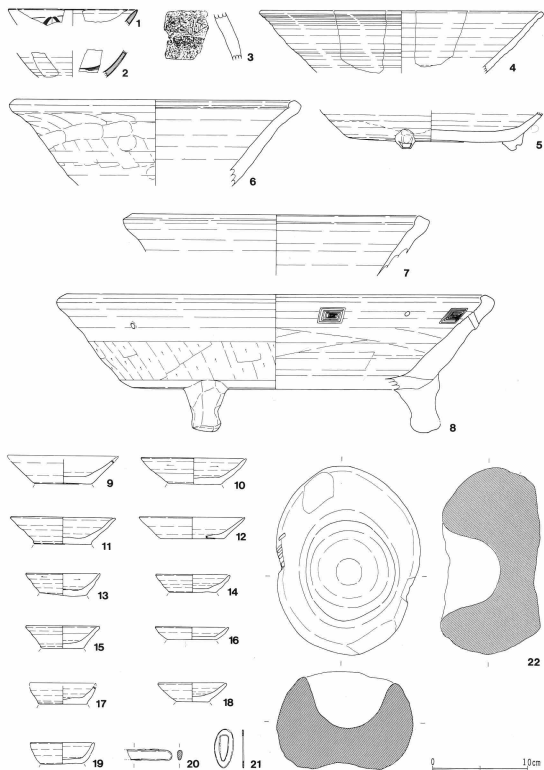
第1号井戸跡(第55図)

西側調査区の西側寄りに位置し、重複する第11号掘立柱建物跡を切っている。井戸掘り方の平面形は、2.86m×2.84mの不整形円形を呈している。断面の形態は、深さ96cmまでの上半部が緩やかに内湾しながら傾斜し、そこから下半部は直径80cmの円形を呈する筒状に直線的に深くなっている。確認面からの深さは、比較的深く2.92mを測る。上半部の覆土中からは比較的多くの自然石が出土しており、上半部には石組の井筒が存在した可能性もある。

遺物は、覆土中から土器や陶器の破片が比較的多く出土しており、龍泉窯系青磁碗・常滑窯系壺・瀬戸窯系直縁大皿・瀬戸窯系深皿・在地産鉢・火鉢・土師器皿などがある。この他では、鉄製品の破片や銅製切羽と安山岩製の窪み石などが出土している。

第1号井戸跡出土遺物観察表

1	龍泉窯系青磁碗	A. 口縁部径(13.6)。B. ロクロ成形。C. 外面鎗蓮弁文、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡緑色、肉一淡灰白色。F. 口縁部1/6。G. 覆土中。H. 内外面に淡緑色釉。第8号溝跡No4と同一個体の可能性あり。
2	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。内面草花文。D. 白色粒。E. 内外一淡緑灰色、肉一暗灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外面に淡緑灰色釉。
3	常滑窯系壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ナデ、内面匏ナデ。D. 白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一明茶褐色、肉一淡灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文。
4	瀬戸窯系直縁大皿	A. 口縁部径(30.0)。B. ロクロ成形。C. 外面回転ナデの後暗緑色釉を施す。D. 白色粒。E. 内外一暗緑色、肉一淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外面とも黒色のタール状付着物あり。
5	瀬戸窯系深皿	A. 底径(17.6)。B. ロクロ成形。足貼り付け。C. 体部・底部外面回転篋ケズリ、内面回転ナデ。D. 褐色粒、白色粒。E. 内外一淡白褐色、肉一淡橙白色。F. 1/6。G. 覆土中。H. 内外面淡緑色釉。
6	鉢	A. 口縁部径(30.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面匏ナデの後上半指ナデ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/4。G. 覆土中。H. 在地産。
7	火鉢	A. 口縁部径(32.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一黒灰色、肉一淡褐色。F. 口縁部1/6。G. 覆土中。
8	火鉢	A. 口縁部径(46.0)、器高14.5、底径(30.0)。B. 粘土紐積み上げ。足貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後雑なナデ、下端ヨコナデ。内面匏ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一黒灰色、肉一淡褐色。F. 1/3。G. 覆土中。H. 体部中位に穿孔あり。内面に押印文あり。
9	土師器皿	A. 残存高2.6、底径6.0。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
10	土師器皿	A. 口縁部径11.1、器高2.8、底径5.7。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
11	土師器皿	A. 口縁部径(11.0)、器高2.9、底径6.1。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
12	土師器皿	A. 口縁部径(11.2)、器高2.3、底径(6.6)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面摩滅。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
13	土師器皿	A. 口縁部径7.8、器高2.4、底径5.0。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。H. 口縁部内面に油煙付着。底部外面板状の圧痕あり。



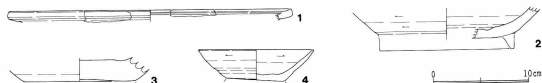
第53図 第1号井戸跡出土遺物

14	土師器皿	A. 口縁部径(7.8)、器高1.9、底径5.0。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面中央一定方向のナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 底部外面板状の圧痕あり。
15	土師器皿	A. 口縁部径(7.8)、器高2.4、底径(4.4)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。体部内外面ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。H. 口縁部内外面油煙付着。
16	土師器皿	A. 口縁部径(7.8)、器高1.4、底径(5.2)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。H. 口縁部内外面油煙付着。
17	土師器皿	A. 残存高1.9、底径5.2。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面中央一定方向のナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。H. 底部外面に板状圧痕あり。
18	土師器皿	A. 口縁部径7.3、器高2.0、底径3.5。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
19	土師器皿	A. 口縁部径6.8、器高2.3、底径4.5。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 底部外面に板状圧痕あり。
20	鉄製品	A. 残存長(4.6)、幅1.0、厚さ0.5。C. 端部に向かって厚さが徐々に薄くなる。D. 鉄製。F. 破片。G. 覆土中。H. 刀子等の柄と思われる。
21	切羽	A. 長さ4.0、幅2.0、厚さ0.1、重さ2g。D. 銅製。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
22	窪み石	A. 長さ19.8、幅15.1、高さ10.4、重さ2030g。B. 自然石を利用し、側面を一部鑿により形状調整。C. 底面未調整。窪み内は良く擦れて磨滅している。D. 安山岩。F. 完形。G. 覆土中。H. 表裏面に二次焼成を受けている。

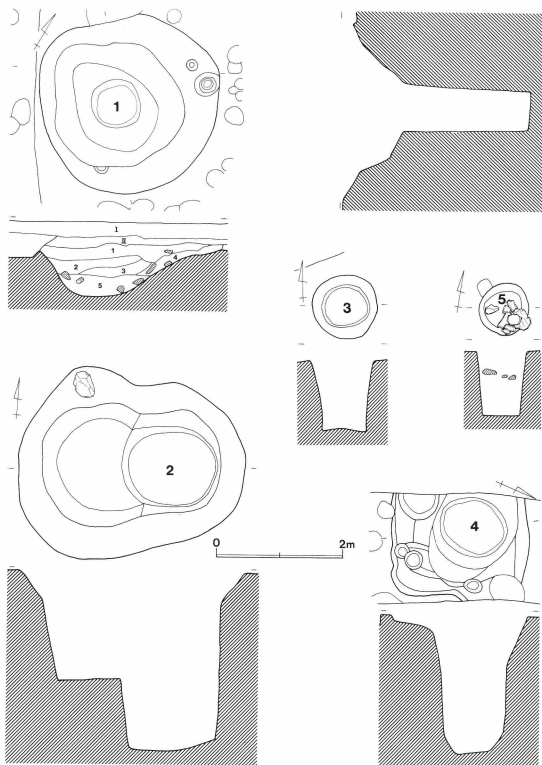
第2号井戸跡(第55図)

東側調査区の東側寄りに位置し、重複する第7号溝跡に切られている。井戸掘り方の平面形は、2基が重複したような中頃に若干の括れをもつ楕円形に近い形態を呈している。規模は、東西方向が3.58m・南北方向が3.06mある。断面の形態は、上位が緩やかに傾斜した後、壁は垂直ぎみに掘られ、深さ1.70mの中位西側に円形で広い平坦な段をもつ。東側は直径1.30m前後の楕円形を呈した筒状にさらに深くなっている。確認面からの深さは2.84mで、ローム層下の白色粘土層や暗灰色粘土層を掘り込んでいる。底面は、広く比較的平坦である。覆土は、下半が暗灰色粘土や黒褐色粘土を主体とするが、上半は長さ5cm以下の玉砂利を主体にしており、本井戸跡の近くに玉砂利を敷くような施設が存在が推測される。

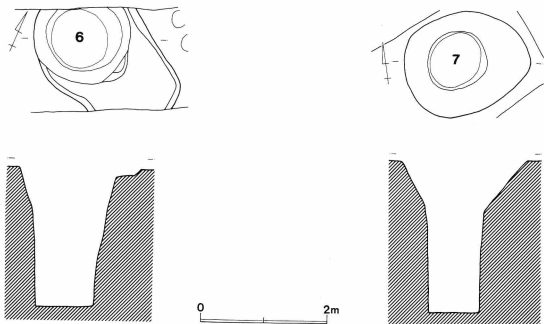
遺物は、覆土上半の玉砂利内から瀬戸窯系折縁深皿(No1)・山茶碗系鉢(No2)・在地産鉢(No3)・土師器皿(No4)などが少量出土している。また、下半からは竹の小片や樹皮片が比較的多く出土しているが、井筒構造物に関係するものかは不明である。



第54図 第2号井戸跡出土遺物



第55図 井戸跡1)



第56図 井戸跡2

第1号井戸跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）

第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

第1層：淡灰褐色粘土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色粘土層（鉄斑・小石・B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：淡灰褐色粘土層（鉄斑・砂利を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰褐色粘土層（B軽石・鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色粘土層（鉄斑・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2号井戸跡出土遺物観察表

1	瀬戸窯系 折縁深皿	A. 口縁部径(30.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデの後淡緑色釉を施す。D. 白色粒。E. 内外一淡緑色、肉一淡白褐色。F. 破片。G. 覆土中。
2	山茶碗系 鉢	B. 粘土紐積み上げ。高台部貼り付け。C. 体部外面匏ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 底部1/4。G. 覆土中。
3	鉢	A. 底径(11.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 底部1/4。G. 覆土中。H. 在地産。
4	土師器皿	A. 口縁部径12.2、器高3.4、底径6.1。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 口縁部内外面に煤の付着あり。

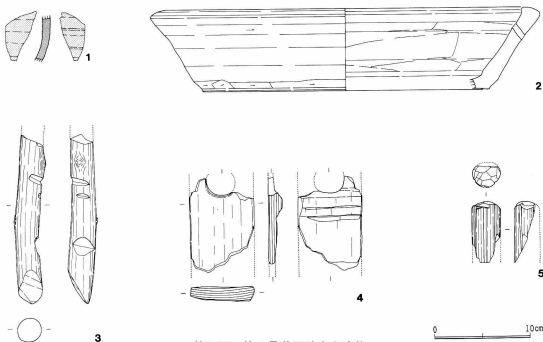
第3号井戸跡(第55図)

西側調査区の南側寄りに位置し、第10号溝跡に切られている。井戸掘り方は、直径1mの規模の小さな円形を呈している。断面の形態は、直線的に若干傾斜し、中位からは垂直ぎみに掘り込んでいる。重複する第10号溝跡底面からの深さは、比較的浅く1.12mを測る。覆土は、暗灰色粘土層を主体としている。遺物は、第1号掘立柱建物跡出土の常滑甕と同一個体の破片が出土している。

第4号井戸跡(第55図)

西側調査区の北側に位置する。遺構の西側は調査区外にあるため、井戸の全容は明確ではないが、本井戸跡は上面に規模が南北方向2.20m・東西方向が1.60m以上のコーナー部の丸みが強い方形か長方形を呈する深さ15cm程度の浅い掘り込みを伴うようで、そのやや北側寄りに長さ1.26mの楕円形を呈する井筒をもっている。上面の浅い掘り込みは、多くの柱穴状ビットや小ビットに切られているが、壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや窪み軟弱である。井筒は、上半が若干傾斜するが、下半はほぼ垂直に深くなっている。確認面からの深さは2.20mで、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。底面は、やや丸みをもっている。

遺物は比較的少ないが、覆土中より白磁壺(No 1)・在地産火鉢(No 2)・常滑窯系甕・土師器皿の破片や、木杭(No 3)・下駄に類似した木製品(No 4)・木製の柄(No 5)などの破片も出土している。この他では、覆土中より長さ3.1cmと2.7cmのモモの核が2個出土している。



第57図 第4号井戸跡出土遺物

第4号井戸跡出土遺物観察表

1	白磁壺	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後施釉。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一淡白色。F. 破片。G. 覆土中。
2	火鉢	A. 口縁部径(41.0)、器高8.6、底径(30.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ下端ケズリ、内面荒ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 1/5。G. 覆土中。H. 体部上半に穿孔あり。
3	木杭	A. 残存長(18.0)、幅2.5。B. 先端部鑿削り。C. 先端部以外は未調整で、側面の一部に鑿による切り込みが見られる。F. 破片。G. 覆土中。

4	木製品	A. 残存長(10.0)、幅6.8、厚さ1.5。B. 鑿削り。C. 破片上端部に大きな孔をもち、裏面は下駄状に一部突出する。F. 破片。G. 覆土中。
5	木製品	A. 残存長(6.5)、幅3.0。B. 端部鑿削り。C. 側面は丁寧に調整され、浅い溝が片側に3本掘られている。F. 破片。G. 覆土中。

第5号井戸跡(第55図)

西側調査区の南側寄りに位置し、重複する第10号溝跡を切っている。井戸掘り方は、直径80cmの比較的規模の小さな円形を呈している。断面の形態は、若干傾斜して直線的に深くなっている。重複する第10号溝跡底面からの深さは、比較的浅く1.02mを測り、確認面からでもおそらく1.30m程度と推測される。

遺物は、覆土の中位上半から比較的大きな片岩が上から落ち込んだような状態でまとまって出土しているが、井戸の石組等に使用されていたものかどうかは不明である。この他では、覆土中より土師器皿と炭化材の小破片が出土しただけである。

第6号井戸跡(第56図)

北側調査区の中央やや西側寄りに位置する。遺構の全体を調査することができなかったため明確ではないが、井戸の上面に長さ2.60m・幅1.60m前後の長方形ぎみの形態を呈する深さ10cm程度の浅い掘り込みを伴うようである。井筒は、直径1.50m程度の円形を呈し、この掘り込みの西端に位置している。断面の形態は、上半が直線的に若干傾斜して掘られているが、下半はほぼ垂直に深くなっている。確認面からの深さは2.22mで、底面は平坦である。

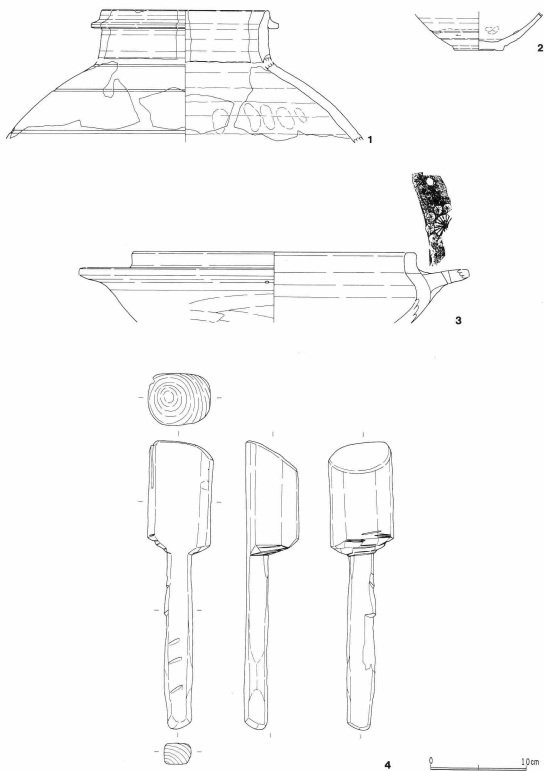
遺物は、覆土中より常滑窯系広口壺(No1)と甕(7片)・瀬戸窯系平碗(No2)・鋳付火鉢(No3)などの破片や、木製の横植(No4)が出土している。

第6号井戸跡出土遺物観察表

1	常滑窯系 広口壺	A. 口縁部径(17.5)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部及び胴部内外面ヨコナデ。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 外一淡灰色、内一茶褐色、肉一黒灰色。F. 口縁部1/4、胴部1/5。G. 覆土中。H. 口縁部内外面及び胴部外面に降灰による自然釉付着。第1号溝跡と第3号溝跡から同一個体の破片が出土。
2	瀬戸窯系 平碗	A. 高台部径5.1。B. ロック成形。高台部削り出し。C. 体部外面上半回転ナデ、下半回転施ケズリ。内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡緑色、肉一淡白色。F. 体部下半のみ。G. 覆土中。H. 内面に重ね焼き痕あり。
3	鉢	A. 口縁部径(30.0)。B. 粘土紐積み上げ。鋳貼り付け。C. 口縁部及び鉢内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一暗灰色、肉一淡灰白色。F. 口縁部1/6。G. 覆土中。H. 鉢部に穿孔あり。鉢部上面に押印文。外面に二次焼成を受けている。
4	横植	A. 長さ30.6、幅6.7、厚さ5.5。B. 鑿削り。C. 頭部は片側が肥厚し、断面は柄とともに隅丸長方形を呈する。F. 完形。G. 覆土中。

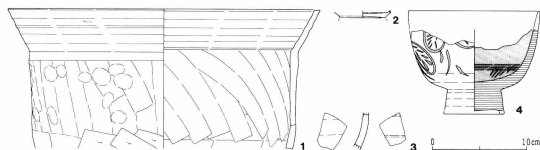
第7号井戸跡(第56図)

北側調査区の中央付近に位置し、第16号溝跡に隣接している。井戸掘り方は、2.00m×1.60mの楕円形を呈している。断面の形態は、上半が緩やかに傾斜し、中位から直径80cm前後の円筒状に深くなっている。確認面からの深さは2.40mあり、底面は平坦である。



第58図 第6号井戸跡出土遺物

遺物は、覆土中より緑釉盤(No 3)・瀬戸窯系小皿・常滑窯系甕・内耳鍋(No 1)・土師器皿(No 2)や木製漆塗碗(No 4)の破片が出土している。



第59図 第7号井戸跡出土遺物

第7号井戸跡出土遺物観察表

1	内 耳 鍋	A. 口縁部径33.8。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面雑なナデの後下半ケズリ、内面簾ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—暗灰褐色、内—淡褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 胴部外面煤付着顕著。
2	土師器皿	A. 底径4.8。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、黒色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 底部1/2。G. 覆土中。
3	緑 釉 盤	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後緑色釉を施す。D. 褐色粒、黒色粒。E. 内外—緑色、肉—淡白褐色。F. 破片。G. 覆土中。
4	木製漆塗碗	A. 残存高(8.7)。B. ロクロ。C. 外面黒色漆、内面赤色漆。F. 2/3。G. 覆土中。H. 外面に赤色漆による文様を施す。

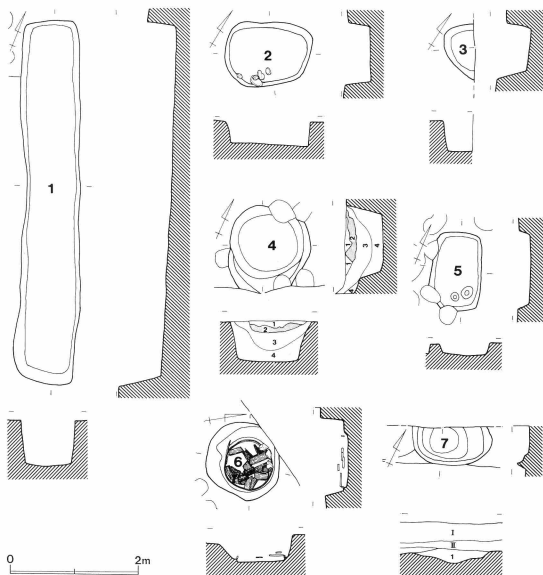
3. 土 壇(第60図)

第1号土壇(第60図)

南側調査区の南側に位置する。形態は、長さ5.80m・幅96cmの非常に長細い長方形を呈している。壁は直線的に若干傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦で確認面からの深さは72cmある。覆土は、B軽石やローム粒子を微量含む黒色土を主体にしている。遺物は、覆土中より古代の土師器片が3片出土しただけである。時期は、覆土の状態から中世以降のものと思われる。

第2号土壇(第60図)

南側調査区の北端に位置する。形態は、1.34m×1.30mのコーナー部の丸みが強いやや不整の長方形さみである。壁はほぼ垂直ぎみに立ち上がり、底面は広く平坦である。確認面からの深さは、40cmある。覆土は、B軽石・ロームブロック・焼土粒子を微量含む暗灰褐色土を主体にしている。遺物は、南側の壁際から自然石が5個まとまって出土しただけである。時期は、覆土の状態より中世以降のものと思われる。



第60図 土 坑

第4号土坑土層説明

第1層：暗灰褐色土層（マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：暗灰褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗黄灰色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7号土坑土層説明

第I層：淡褐色土層（現耕作土。）

第II層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

第1層：黒灰色粘土層（B軽石・黄白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3号土壙(第60図)

南側調査区の南側に位置する。調査区内で検出されたのは土壙の西側半分だけであるため、遺構の全容は不明であるが、おそらく楕円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が84cm・東西方向は48cmまで測れる。壁は若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は広く平坦である。確認面からの深さは、50cmを測る。覆土は、第2号土壙と類似した暗灰褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかったが、時期は覆土の状態より中世以降のものと思われる。

第4号土壙(第60図)

西側調査区の西寄りに位置し、第11号掘立柱建物跡と重複している。形態は、1.28m×1.38m以上の不整形円形を呈し、南側にやや傾斜する段をもっている。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、部分的に複数の小ピットによって切られている。底面は広く平坦で、確認面からの深さは65cmを測る。覆土上半には多量の焼土を含んでいるが、おそらく掘り返しによって火を焚いたものと考えられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

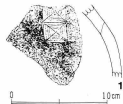
第5号土壙(第60図)

西側調査区の中央部に位置し、第1号掘立柱建物跡と重複している。形態は、南北方向1.26m・東西方向80cmのコーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、一部を小ピットによって切られている。底面は広く平坦で、確認面からの深さは20cmを測る。覆土は、B軽石やロームブロックを含む暗灰褐色土を主体としている。遺物は、覆土中より常滑窯系甕・ロクロ成形の土師器皿・鉢(第4号掘立柱建物跡出土の鉢と接合)の破片が、それぞれ1片ずつ出土している。時期は、覆土の状態や出土遺物から15世紀後半頃と考えられる。

第6号土壙(第60図)

北側調査区の東側に位置する。本土壙は、1.24m×1.16mの不整形円形を呈している。壁は、直線的に若干傾斜しているが、南側壁だけはかなり緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦で、確認面からの深さは45cmある。底面中央には、直径80cm程度の円形を呈する底抜けの桶を水平に置いて、その周りをロームブロックを均一に含む暗黄灰褐色土で埋めている。桶は、側板が内側に倒れ、すでに形は崩れていたが、桶の底部付近を巻いていた竹が底面にそのまま密着している。桶の底板が見られないことから、最初から桶の底は抜けていたものと考えられる。

また、桶の北側では側板の位置に沿って長さ10cm程度の自然石が3個並んで出土しており、あるいは側板の上面を石によって押えていたのかもしれない。桶の内部は、A軽石やローム粒子を含む暗灰色土で埋まっており、埋設当初は埋まっていなかったことが窺える。遺物は、覆土中より常滑窯系甕の破片(No1)とロクロ成形の土師器皿の小破片が1片ずつ出土しているが、いずれも本土壙に直接伴うものではなく、周囲から混入したものであろう。時期は、覆土の状態から近世後半以降のものと考えられる。



第61図 第6号土壙
出土遺物

第6号土坑出土遺物観察表

1	常滑窯系 甕	B.粘土粗積み上げ。C.外面ハケの後ナデ、内面笥ナデ。D.白色粒、淡褐色粒。E.外一暗茶褐色、内一明茶褐色、肉一淡灰褐色。F.破片。G.覆土中。H.外面に押印文。
---	-----------	---

第7号土坑(第60図)

北側調査区の西側に位置し、南側の一部をA軽石を含む小溝に切られている。土坑の北側半分は調査区外に位置するため、遺構の全容は不明である。平面形は、楕円形に近い形態を呈するようで、規模は東西方向が1.26mある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みをもっている。確認面からの深さは、22cmを測る。覆土は、黄白色粘土ブロックを均一に含む黒灰色粘土を主体にしている。遺物は何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から中世のものと思われる。

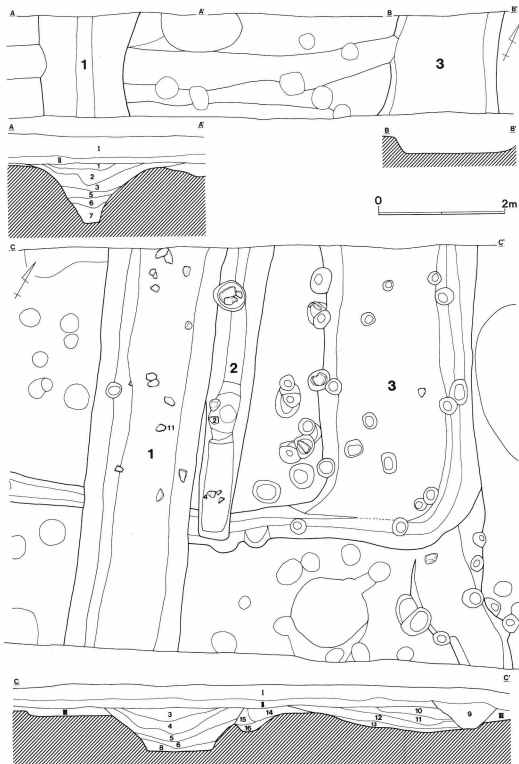
4. 溝 跡

第1号溝跡(第62図)

西側調査区の西側に位置し、北側調査区の西側でもその延長が検出されている。重複する第2号溝跡を切り、A軽石を含む第3号溝跡や小溝に切られている。流路は、南東から北西方向に向かってほぼ直線的に延びており、屋敷地の区画と南側残丘下からの豊富な湧水の排水を目的とするものと考えられるが、西側調査区と北側調査区では、溝の断面の形態や規模が異なっている。西側調査区で検出された部分は、溝の上幅が1.70m～1.80mの比較的均一な幅で、確認面からの深さは70cmを測る。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦な逆台形を呈する箱堀状である。北側調査区で検出された部分は、溝の上幅が1.40m～1.60mで、確認面からの深さは西側調査区よりも若干深く90cmを測る。断面の形態は、壁が傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦な葉形堀状である。このような途中から形状や規模が異なる形態は、屋敷地の北側を画する溝の可能性もある第16号溝跡でも見られる。遺物は比較的多く、覆土中より龍泉窯系青磁碗(Na1～4)・瀬戸窯系尊式花瓶(Na5)・渥美窯系甕(Na6)・珠洲窯系叩き文壺(Na7)・常滑窯系壺(Na8)の破片や、在地産の鉢(Na10～12)・土師器皿(Na9)等の破片が出土している。この中で特に珠洲窯系の製品は、第8号溝跡出土の広口壺(第71図Na6)と同一個体と思われるもので、関東地方での出土はあまり例がなく注目される。この他では、長さ20cm前後の片岩を主体とする自然石が、覆土中に投げ込まれた状態でいくつか出土している。

第1号溝跡出土遺物観察表

1	龍泉窯系 青 磁 碗	A.口縁部径(15.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後内面に文様を施す。D.白色粒。E.内外一淡緑灰色、肉一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.内外面に淡緑灰色釉。
2	龍泉窯系 青 磁 碗	A.口縁部径(12.4)。B.ロクロ成形。C.外面回転ナデの後ハケ、内面回転ナデ。内外面とも篋描の文様を施す。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡緑灰色、肉一淡灰白色。F.破片。G.覆土中。H.内外面に淡緑灰色釉。
3	龍泉窯系 青 磁 碗	B.ロクロ成形。C.外面鑄連弁文、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡緑色、肉一淡灰色。F.破片。G.覆土中。H.内外面に淡緑色釉。
4	龍泉窯系 青 磁 碗	B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後内面に文様を施す。D.白色粒。E.内外一淡緑褐色、肉一淡褐色。F.破片。G.覆土中。H.内外面とも淡緑褐色釉。



第62図 第1～3号溝跡

第1～3号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）

第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

第Ⅲ層：黒色土層

＜第1号溝跡＞

第1層：黒灰色粘土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒灰色粘土層（B軽石・ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰褐色粘土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：黄灰褐色粘土層（ロームブロック・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色粘土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗灰色粘土層（鉄斑・白色粘土ブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7層：黒灰色粘土層（ローム粒子・緑色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗黄灰色粘土層（ローム粒子・鉄斑を多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）

＜第3号溝跡＞

第9層：淡褐色土層（A軽石を多量に、鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）

第10層：淡褐色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第11層：淡灰褐色粘土層（鉄斑を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12層：淡灰褐色粘土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第13層：暗灰褐色粘土層（ローム粒子・焼土粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

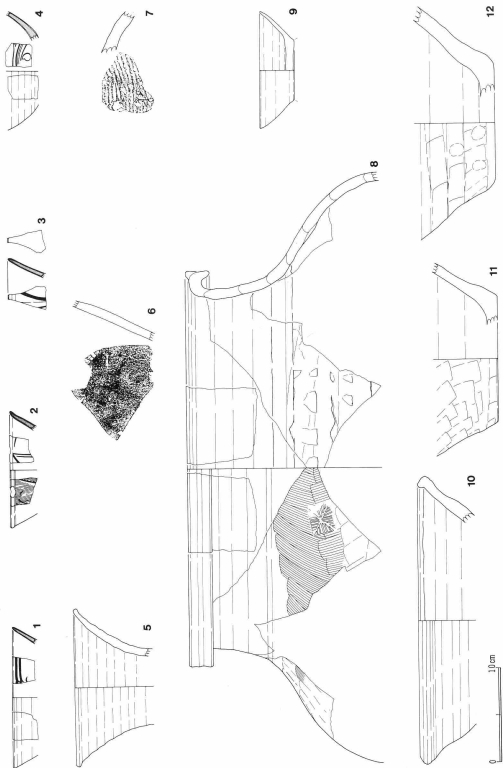
＜第2号溝跡＞

第14層：暗灰褐色粘土層（マンガン塊を均一に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第15層：淡灰褐色粘土層（鉄斑を多量に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第16層：淡茶灰色粘土層（鉄斑・マンガン塊を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

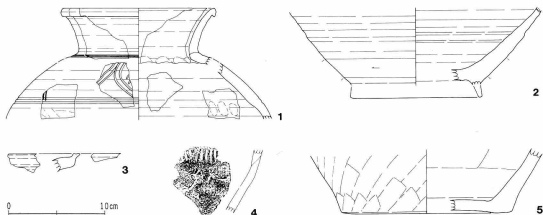
5	瀬戸窯系 尊式花瓶	A.口縁部径(16.8)。B.口縁部成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一淡緑色。F.口縁部1/3。G.覆土中。H.内外面に淡緑色釉。内面に重ね焼き痕あり。
6	渥美窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面に押印文を施す。
7	珠洲窯系 壺	B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面粗い平行叩き、内面は当道具痕を残す。D.褐色粒、白色針状物質。E.内外一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面に降灰による淡黄白の自然釉がかかる。
8	常滑窯系 甕	A.口縁部径(42.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後曳ナデ、内面匏ナデ。D.白色粒、淡橙褐色粒。E.内外一茶褐色、肉一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面は肩部に押印文を施し、降灰による釉がかかる。
9	土師器皿	A.口縁部径(12.4)。器高3.6、底径6.2。B.口縁部成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、黒色粒。E.内外一淡橙白色。F.1/2。G.覆土中。H.底部外面に下駄状圧痕。
10	鉢	A.口縁部径(30.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.内外一暗灰褐色。F.口縁部1/2破片。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。
11	鉢	A.底径(13.4)。B.粘土紐積み上げ。C.外面匏ナデ、内面ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒、黒色粒。E.外一暗灰色、内一淡灰褐色。F.底部1/4。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。
12	鉢	A.底径(12.6)。B.粘土紐積み上げ。C.外面匏ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.底部1/3。G.覆土中。H.内面は良く擦れている。在地産。



第63図 第1号溝跡出土遺物

第2号溝跡(第62図)

西側調査区の西側に位置し、重複する第1号溝跡と第3号溝跡に切られている。溝の方向は、第1号溝跡と同じく、南東から北西方向に向かってほぼ直線的に延びている。溝の南側は途切れており、またその延長にあたる北側調査区では検出されていないことから、区画を目的とした溝と考えられる。規模は、上幅が60cm～80cmのほぼ均一な幅で、確認面からの深さは35cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや狭く丸みをもっている。遺物は比較的少ないが、覆土中より渥美窯系の蓮弁文壺(No1)や甕(No4)・常滑窯系甕(No3・5)・山茶碗系鉢(No2)の破片や土師器皿の小破片が極少量出土している。



第64図 第2号溝跡出土遺物

第2号溝跡出土遺物観察表

1	渥美窯系 蓮弁文壺	A. 口縁部径(16.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外-黒灰色、内-暗灰色。F. 口縁部1/6、胴部小破片。G. 覆土中。H. 胴部外面に施描蓮弁文。
2	山茶碗系 鉢	B. 粘土紐積み上げ。高台部貼り付け。C. 外面回転ナデの後下半回転施ケズリ、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外-灰色。F. 1/4。G. 覆土中。
3	常滑窯系 甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗茶褐色、肉-淡灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外面とも淡緑色釉がかかる。
4	渥美窯系 甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、淡橙褐色粒。E. 内外-暗灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文を密に施す。
5	常滑窯系 甕	A. 底径(18.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面施ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外-明茶褐色、肉-淡褐色。F. 底部1/6。G. 覆土中。H. 底部外縁砂付着。

第3号溝跡(第62図)

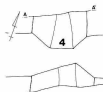
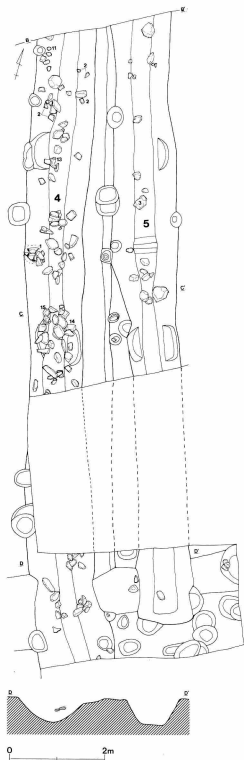
西側調査区の西側に位置し、重複する第2号溝跡を切っている。流路は、ほぼ南東から北西方向に向かって延びている。規模は、溝の上幅が西側調査区で2.40m・北側調査区で1.70m前後で、確認面からの深さはいずれも30cm前後と比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。時期は、覆土の状態から近世以降のものと考えられる。なお、本溝跡が埋没した後は、上幅1m程度の小規模な溝(第9層)が、東西方向から本溝跡の西端に沿って掘り返されている。

第4号溝跡(第65図)

西側調査区の中央部に位置し、重複する第1～4号掘立柱建物跡と第10号溝跡を切っている。北側調査区でも溝の延長が検出されており、重複する第16号溝跡を切っている。流路は、南東から北西方向に向かって直線的に延びており、東側の第5溝跡と併走している。屋敷地の区画と南側残丘下からの豊富な湧水の排水を目的とした溝と考えられるが、現地表面に見られる溝とその位置や方向がほぼ一致していることは注目される。規模は、上幅が1.30m前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは60cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面がやや狭く平坦な逆台形状を呈している。覆土は、下半が暗灰褐色土を主体にし、上半はロームブロックを多く含む淡黄褐色土を主体にしており、多くの石が投げ込まれている。おそらく東側に隣接する第5号溝跡よりも先に埋め戻されたか埋没したものと推測される。遺物は、覆土中から在地産の内耳鍋(№1・2)・火鉢(№3)・風炉(№4・5)・土師器皿(№6～12)及び常滑窯系・瀬戸窯系皿類の破片や、粉挽白(№13・14)や茶臼(№15)の破片も出土している。この他では、モモの核も1個見られる。

第4号溝跡出土遺物観察表

1	内 耳 鍋	A.口縁部径(37.4)、残存高(16.2)。B.粘土紐積み上げ。内耳貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面匏ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一黒灰褐色、内一暗灰褐色。F.1/2。G.覆土中。H.外面煤の付着顕著。
2	内 耳 鍋	A.口縁部径(32.2)、器高17.7、底径(22.4)。B.粘土紐積み上げ。内耳貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ヨコナデ。底部内外面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡灰褐色。F.3/4。G.覆土中。H.外面煤の付着顕著。
3	火 鉢	A.口縁部径(36.0)。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ヨコナデ。D.白色針状物質、黒色粒。E.内外一黒灰色。F.口縁部1/8。G.覆土中。H.外面に3種類の押印文。
4	風 炉	A.底径(21.8)。B.粘土紐積み上げ。C.外面ミガキ、内面匏ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一黒灰色、肉一淡灰褐色。F.1/8。G.覆土中。H.外面に押印文。
5	風 炉	B.粘土紐積み上げ。C.外面ミガキ、内面ナデ。D.赤色粒。E.内外一黒灰色、肉一淡白色。F.破片。G.覆土中。H.破片左端に火窓と思われる孔をもつ。外面凸帯下に円形の押印文を部分的に施す。第8号溝跡から同一個体の破片が出土。
6	土師器皿	A.底径(10.8)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデあるいはケズリ、内面一定方向の指ナデ。D.赤色粒、白色粒。F.底部1/3。G.覆土中。
7	土師器皿	A.口縁部径(11.2)、器高2.5、底径6.2。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面ケズリ、内面指ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
8	土師器皿	A.口縁部径(11.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一灰褐色。F.口縁部1/4。G.覆土中。
9	土師器皿	A.口縁部径(11.0)、器高2.7、底径(6.6)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面中央指ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4。G.覆土中。H.底部外面板状圧痕。
10	土師器皿	A.口縁部径(10.2)、器高2.7、底径(5.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4。G.覆土中。
11	土師器皿	A.底径(6.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.底部4/5。G.覆土中。H.内面に黒色付着物あり。
12	土師器皿	A.口縁部径(8.0)、器高1.6、底径(5.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒、黒色粒。E.内外一黒褐色。F.1/4。G.覆土中。
13	粉 挽 白 (上 白)	A.直径(28.4)、高さ8.4、くぼみ2.1、ふくみ(0.5)。C.上面及び側面は荒い研磨。下面は良く擦れて、摺目は見られない。D.安山岩。F.1/4強。G.覆土中。H.二次焼成を受けている。



第4・5号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）

第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

〈第4号溝跡〉

第1層：淡黄灰褐色粘土層（ロームブロックを均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：淡黄褐色粘土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

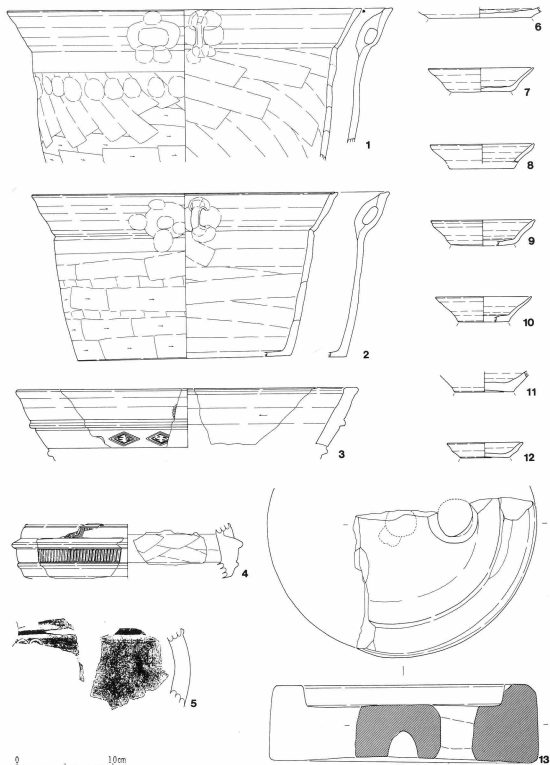
第3層：暗灰褐色土層（マンガン塊を均一に、ロームブロック・炭化粒子・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第5号溝跡〉

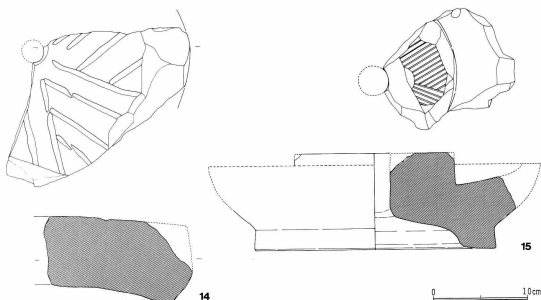
第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、ロームブロック・炭化粒子・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶灰褐色粘土層（マンガン塊を均一に、炭化粒子・焼土粒子・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第65図 第4・5号溝跡



第66図 第4号溝跡出土遺物(1)



第67図 第4号溝跡出土遺物2)

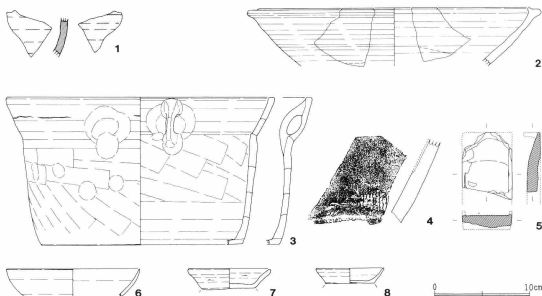
14	粉挽白 (下白)	A. 直径(33.2)、高さ9.1。C. 下面及び側面は荒い研磨。上面は良く擦れており、摺目は六角と思われる。D. 安山岩。F. 約1/4。G. 覆土中。H. 二次焼成を受けている。
15	茶白 (下白)	A. 高さ10.2、台端部径(25.4)。C. 全面丁寧な研磨。上面は良く擦れており、細かな摺目が見られる。D. 安山岩。F. 約1/6。G. 覆土中。

第5号溝跡(第65図)

西側調査区の中央部に位置し、重複する第1～4号掘立柱建物跡と第10号溝跡を切っている。溝の南端は途切れており、北側調査区でもその延長が検出されていないことから、本溝跡は区画を目的とした溝と考えられる。流路は、西側に隣接する第4号溝跡と同じく南東から北西方向に向かって直線的に延びている。規模は、上幅が1.30m前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは55cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面がやや狭く平坦な逆台形状を呈している。溝中程の底面には、高さ10cm・幅34cmの掘り残しによる土堤状の高まりが見られる。遺物は、白磁(No1)・瀬戸窯系大皿(No2)・渥美窯系甕(No3)・常滑窯系甕・内耳鍋(No3)・土師器皿(No6～8)などが出土し、この他には硯の破片(No5)も見られる。

第5号溝跡出土遺物観察表

1	白磁	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後軸を施す。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一暗灰色。F. 破片。G. 覆土中。
2	瀬戸窯系 大皿	A. 口縁部径(31.0)。B. ロクロ成形。C. 外面上半回転ナデ、下半回転軸ケズリ。内面ナデ。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外一暗緑色、肉一暗灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外面暗緑色釉。
3	内耳鍋	A. 口縁部径28.2、器高15.8、底径21.0。B. 粘土紐積み上げ。内耳貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面裏ナデ。底部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 底部3/4。G. 覆土中。H. 外面煤の付着顕著。底部は円形に抜けている。



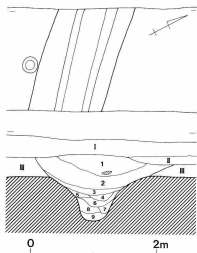
第68図 第5号溝跡出土遺物

4	渥美窯系 甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ともナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文を施す。
5	硯	A. 残存長(7.1)、幅5.3、厚さ1.4。C. 全面丁寧な研磨。D. 粘板岩。F. 1/2。G. 覆土中。
6	土師器皿	A. 口縁部径(14.0)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/5。G. 覆土中。
7	土師器皿	A. 口縁部径8.8、器高2.2、底径5.6。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 口縁部内外面煤付着。
8	土師器皿	A. 口縁部径(7.2)、器高1.6、底径5.2。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 1/2。G. 覆土中。

第6号溝跡(第69図)

東側調査区の西側寄りに位置する。流路は、第4号溝跡や第5号溝跡と同じく、ほぼ南東から北西方向に向かって延びており、屋敷地の区画と南側残丘下からの豊富な湧水の排水を目的とした溝と考えられる。規模は、調査区北側断面上で上幅が2.20mあり、確認面からの深さは約1mを測る。断面の形態は、壁の上半部が内湾しながら緩やかに開き、下半部は直線的に急傾斜している。底面は幅約40cmと狭く、やや丸みをもっている。遺物は、覆土中から口縁部が外反ぎみに開くロクロ成形の土師器皿と播鉢の小片が、それぞれ1片ずつ出土しただけである。





第69図 第6号溝跡

第6号溝跡土層説明

- 第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）
 第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）
 第Ⅲ層：黒色土層
 第1層：暗茶褐色土層（B軽石・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：淡灰褐色粘土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗灰褐色粘土層（B軽石・ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗黄灰色粘土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗灰褐色粘土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：淡灰褐色粘土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第7層：淡灰褐色粘土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第8層：淡黄灰色粘土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第9層：暗灰色粘土層（淡緑色粘土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7号溝跡(第70図)

東側調査区の中央から東側寄りに位置し、重複する第8号溝跡や第2号井戸跡を切っている。流路は、調査区中央部のほぼ南北方向に向く溝から枝分かれして、弓状に湾曲しながら南西から北東方向に向かって延びており、現地表面に見られる溝とほぼ一致している。規模は、溝の上幅が50cm～70cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは15cm程度である。壁は、南側の壁は緩やかに立ち上がるが、北側の壁は長さ15cm前後の扁平な石を並べ、溝東側の外側には小さな礫を敷き詰めている。底面は広く平坦である。遺物は、覆土中より近世後半以降の染付碗などの破片が少量出土しており、時期もその頃のものと考えられる。

第8号溝跡(第70図)

東側調査区の中央から東側寄りに位置し、重複する第7号溝跡に切られ、第9号溝跡を切っている。流路は、第7号溝跡や現地表面に見られる溝とほぼ一致しているが、調査区中央部では南北方向に向く溝から枝分かれせずに「L」字状に屈曲している。規模は、調査区中央部の南北方向に向く部分は、溝の上幅70cm・深さ40cmで規模が小さいが、屈曲して南西から北東方向に延びる部分は、上幅1.10m～1.50m・深さ50cmで規模が大きくなっており、南西から北東方向に延びる部分は、新たに改修された可能性もあろう。南北方向に向く溝と連結する西端部は、四角に掘られ、不整形円形を呈する深さ30cmの掘り込みがある。断面の形態は、南西から北東方向に延びる部分の西側半分と東側半分では若干異なっている。西側は、壁の上半は緩やかに傾斜し、下半は直線的で垂直さみに



第70図 第7・8号溝跡

立ち上がり、底面は広く平坦な箱堀状を呈している。東側は、壁は内湾きみで緩やかに立ち上がり、底面は西側に比べてやや狭く若干丸みをもっている。遺物は比較的多く、龍泉窯系青磁碗(Na4)・瀬戸窯系小皿(Na5)・常滑窯系の甕(Na1・3)と片口鉢(Na2)・珠洲窯系壺(Na6)・渥美窯系甕や、在地産の播鉢(Na7・8)・内耳鍋(Na11)・鉢・土釜・土師器皿(Na9・10)などの破片がある。この他では、砥石(Na12)・粉挽臼(Na13~15)などの石製品の破片や、モモの核が1個覆土中から出土している。

第8号溝跡出土遺物観察表

1	常滑窯系 甕	A.口縁部径(38.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面匚ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一暗茶褐色、肉一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面に押印文。外面上半に緑色釉。第16号溝跡やP34からも同一個体の破片が出土している。
2	常滑窯系 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。D.白色粒。E.外一暗灰褐色、内一淡茶褐色、肉一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.内面に降灰による釉がかかる。
3	常滑窯系 甕	A.底径(16.0)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ハケの後ナデ、内面匚ナデ。底部外面ナデ。D.白色粒、褐色粒。E.内外一暗茶褐色。F.底部1/6。G.覆土中。H.底部外縁砂付着。
4	龍泉窯系 青磁碗	B.ロクロ成形。高台部削り出し。C.外面竊蓮弁文、内面回転ナデ。底部外面回転匚ケズリ。D.白色粒、黒色粒。F.内外一淡緑色、肉一灰白色。F.底部1/2。G.覆土中。H.内外面とも淡緑色釉、底部外面無釉。高台部は意図的に打ち欠いている。
5	瀬戸窯系 小皿	A.口縁部径(10.6)、残存高1.9、高台径(5.6)。B.ロクロ成形。高台削り出し。C.外面回転匚ケズリ、内面回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡灰色。F.口縁部1/4。G.覆土中。H.内面及び外面上半に淡緑色の薄い灰釉を施す。
6	珠洲窯系 壺	A.口縁部径(23.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面下端に叩き目。D.白色粒、白色針状物質、黒色粒。E.内外一暗灰色。F.口縁部1/6。G.覆土中。H.外面に降灰による淡黄白色の自然釉がかかる。第1号溝跡のNo7と同一個体。
7	播鉢	A.底径(13.0)。B.粘土紐積み上げ。C.体部外面匚ナデ、内面ナデの後4本歯の播目を放射状に施す。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.底部1/4。G.覆土中。H.在地産。

第7・8号溝跡土層説明

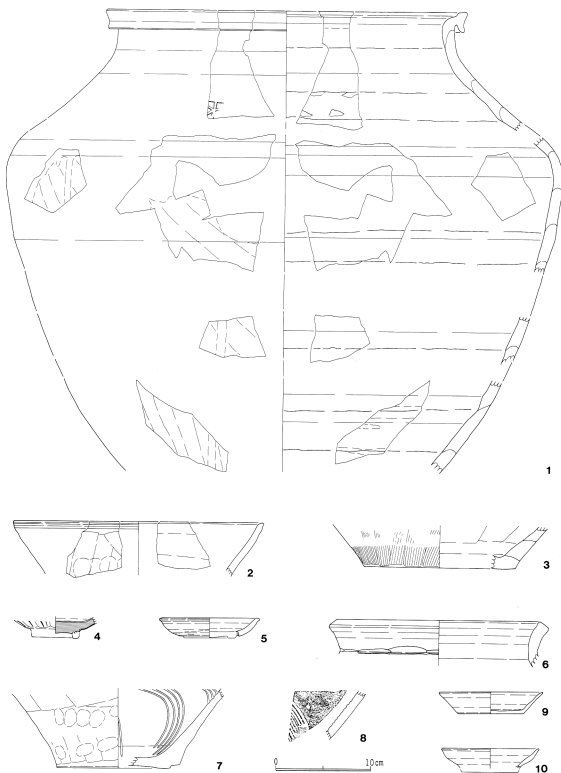
- 第Ⅰ層：淡褐色土層（現耕作土。）
- 第Ⅱ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）
- 第Ⅲ層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）
- 第Ⅳ層：黒色粘土層（B軽石を多量含む。）
- 第Ⅴ層：暗灰色粘土層（B軽石を均一に含む。）

<第7号溝跡>

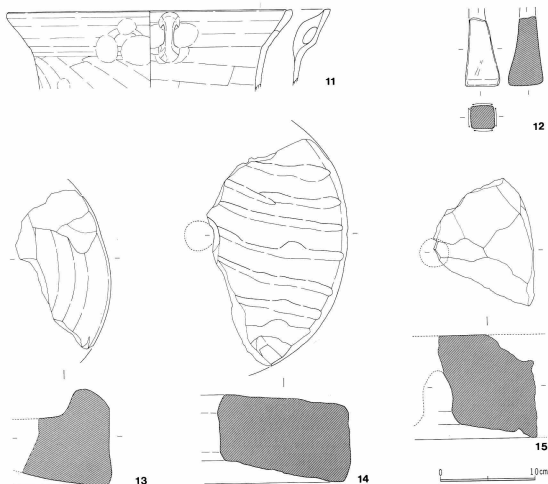
- 第1層：暗茶褐色砂層（ローム粒子・細砂を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色粘土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色粘土層（B軽石・鉄斑・細砂を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：明茶灰褐色粘土層（鉄分凝集層。）
- 第4層：暗灰褐色粘土層（鉄斑を多量に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰褐色粘土層（A軽石・鉄斑・細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗茶褐色粘土層（鉄分凝集層。）

<第8号溝跡>

- 第7層：暗灰色粘土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗灰色粘土層（鉄斑・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第9層：暗灰色粘土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：黒灰色粘土層（緑白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第11層：暗灰色粘土層（B軽石・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第71図 第8号溝跡出土遺物(1)

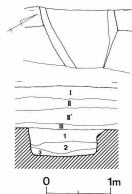


第72図 第8号溝跡出土遺物(2)

8	掃 鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 体部外面ヨコナデ、内面ナデの後擋目を施す。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-淡灰褐色、内-黒灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 在地産。
9	土師器皿	A. 口縁部径(11.0)、器高2.3、底径(6.8)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
10	土師器皿	A. 口縁部径(10.4)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 口縁部1/2。G. 覆土中。
11	内 耳 鍋	A. 口縁部径(30.0)。B. 粘土紐積み上げ。内耳貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面篋ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗灰褐色。F. 口縁部1/4。G. 覆土中。
12	砥 石	A. 残存長(7.3)、最大幅3.6、重さ(130g)。C. 全面良く擦れている。D. 凝灰岩。F. 上端部欠失。G. 覆土中。
13	粉 挽 臼 (上 白)	A. 残存長(9.0)、高さ10.2、ふくみ(1.4)。C. 上面及び側面荒い研磨。下面は良く擦れており、搗目は見られない。D. 砂岩。F. 約1/4。G. 覆土中。H. 二次焼成を受けている。
14	粉 挽 臼 (下 白)	A. 直径(31.4)、高さ9.5、ふくみ1.4。C. 下面及び側面難な研磨。上面は良く擦れており、搗目はやや不明瞭。D. 安山岩。F. 約1/4。G. 覆土中。
15	粉 挽 臼 (下 白)	A. 残存長(10.5)、高さ11.0。C. 下面難な研磨。上面は良く擦れており、搗目は見られない。D. 安山岩。F. 破片。G. 覆土中。

第9号溝跡(第73図)

東側調査区の東側に位置し、重複する第8号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは、溝跡の一部であるため明確なことは不明であるが、流路は北西から南東方向に向いているようである。重複する第8号溝跡の南側に本溝跡の延長が見られないことから、当初はこの第8号溝跡に合流していたものと思われ、第8号溝跡の改修に伴って廃棄された可能性が高い。規模は、溝の上幅が1.12mで、確認面からの深さは44cmを測る。断面の形態は、壁が直線的で垂直ぎみに立ち上がり、底面は広く平坦な箱堀状を呈している。覆土は、上半が暗灰褐色土で、下半は黒灰色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。



第73図 第9号溝跡

第9号溝跡土層説明

第I層：淡褐色土層（現耕作土。）

第II層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

第III層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

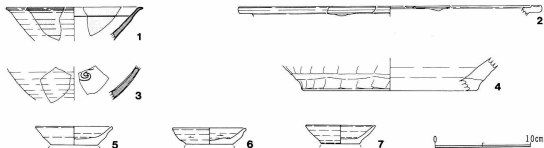
第1層：暗灰褐色粘土層（鉄斑を多量に、B軽石・ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒灰色粘土層（B軽石を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

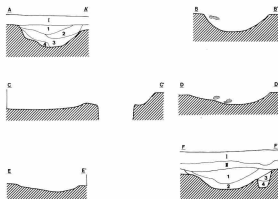
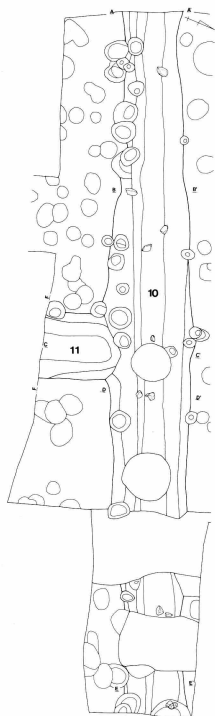
第3層：黒灰色粘土層（緑色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、非常にしまりを有する。）

第10号溝跡(第75図)

西側調査区の中央部南側に位置し、重複する5号井戸跡・第4号溝跡・第5号溝跡に切られ、第3号井戸跡と第10号掘立柱建物跡を切っている。流路は、南西から北東方向に向かって直線的に伸びており、溝中央の南側には第11号溝跡が分岐している。規模は、溝の上幅が1.35m～1.70mあり、確認面からの深さは調査区西側断面で46cmを測る。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面はやや広く若干丸みをもっている。遺物は、白磁碗(No1)・龍泉窯系青磁碗(No3)・瀬戸窯系折縁深皿(No2)・常滑窯系甕(No4)・土師器皿(No5～7)などが覆土中より出土している。



第74図 第10号溝跡出土遺物



第10号溝跡土層説明(A-A')

第I層：淡褐色土層（現耕作土。）

第1層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第2層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗茶褐色粘土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第11号溝跡土層説明(F-F')

第I層：淡褐色土層（現耕作土。）

第II層：淡褐色土層（A軽石降下後の旧耕作土。）

第1層：暗黄褐色粘土層（ロームブロック・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色粘土層（B軽石・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗灰色粘土層（ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰色粘土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

0 2m

第75図 第10・11号溝跡

第10号溝跡出土遺物観察表

1	白磁碗	A.口縁部径(14.4)。B.ロクロ成形。C.内外面とも回転ナデ。口縁部内面に1条の細い沈線を施す。D.白色粒。E.内外一暗白色。F.口縁部1/8。G.覆土中。H.内外面とも釉を施す。
2	瀬戸窯系折縁深皿	A.口縁部径(32.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面とも回転ナデ。D.白色粒。E.内外一淡緑色、肉一淡白褐色。F.破片。G.覆土中。H.内外面とも淡緑色釉。
3	龍泉窯系青磁碗	B.ロクロ成形。C.体部内外面とも回転ナデ。内面に文様を施す。D.白色粒。E.内外一淡緑褐色、肉一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.内外面とも淡緑褐色釉。
4	常滑窯系甕	A.底径(18.6)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面篋ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.白色粒。E.外一暗褐色、内一暗灰褐色、肉一暗灰色。F.底部1/4。G.覆土中。
5	土師器皿	A.口縁部径8.1、器高2.0、底径4.9。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.完形。G.覆土中。
6	土師器皿	A.口縁部径7.7、器高1.7、底径4.9。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.完形。G.覆土中。H.口縁部内外面に煤の付着あり。
7	土師器皿	A.口縁部径(7.4)、器高2.0、底径(4.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/6。G.覆土中。

第11号溝跡(第75図)

西側調査区の中央部南側に位置し、重複する第10号掘立柱建物跡を切っている。流路は、南東から北西方向に直線的に延びているようで、北端は第10号溝跡に接続している。規模は、溝の上幅が調査区南側断面で1.82mあり、確認面からの深さは40cmを測る。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面はやや広く丸みをもっているが、第10号溝跡と接続する付近はやや底面が高くなっている。遺物は、何も出土しなかった。

第12号溝跡(第33図)

西側調査区の中央部東側寄りに位置し、重複する第4号掘立柱建物跡に切られている。流路は、南東から北西方向にほぼ直線的に延びている。溝の南端は途切れており、また北側調査区に本溝跡の延長が見られないことから、区画を目的とした溝と考えられる。規模は、溝の上幅が18cm～62cmあり、確認面からの深さは18cmを測る。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面は広くやや凹凸が見られる。覆土は、黒灰色土を主体にしている。遺物は、底面付近より常滑窯系甕の破片が1片出土しただけである。

第13号溝跡(第33図)

西側調査区の東側に位置し、重複する第7号掘立柱建物跡を切っている。流路は、南東から北西方向にほぼ直線的に延びており、東側の第14号溝跡と併走している。規模は、溝の上幅が16cm～26cmあり、確認面からの深さは7cmを測る。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、A軽石を含む暗灰色土を主体にしており、覆土中からは近世後半以降の染付碗や描鉢などの破片が比較的多く出土している。

第14号溝跡(第33図)

西側調査区の東端に位置する。流路は、南東から北西方向に向いているようで、現地表面に見られる畑の畦道にはほぼ一致している。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦のようで、確認面からの深さは15cmを測る。覆土は、A軽石を含む淡灰色土を主体にしている。遺物は何も出土しなかったが、時期は覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第15号溝跡(第33図)

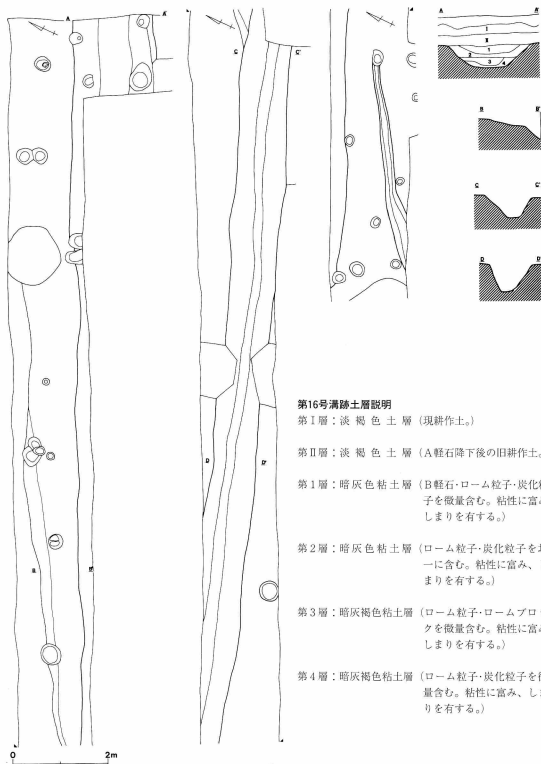
西側調査区中央部の南端に位置する。流路は、南西から北東方向に向いて延びているようであり、その規模から見て、区画を目的とした溝と思われる。規模は、溝の上幅が28cm～34cmあり、確認面からの深さは7cmを測る。断面の形態は、壁が緩やかに立ち上がり、底面はやや丸みをもっている。遺物は、何も出土しなかった。

第16号溝跡(第76図)

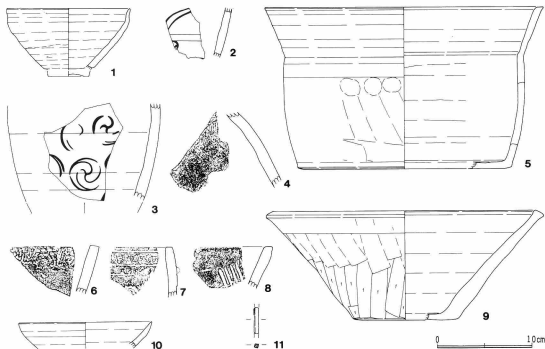
北側調査区に位置し、重複する第4号溝跡に切られ、第17号溝跡を切っている。流路は、南西から北東方向に向かってほぼ直線的に延びているようである。本溝跡は、屋敷地の北側を画する溝の可能性もあり、南側残丘下からの豊富な湧水を集めて、東側の谷田に灌漑する役割も考えられる。規模は、溝の上幅が1m～1.76mあり、確認面からの深さは50cmを測る。断面の形態は、溝の西側と東側では異なっており、西側は壁が直線的で緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦な逆台形を呈する箱状であるのに対して、東側は壁の傾斜がやや急で、底面は狭く平坦をなしている。遺物は、瀬戸窯系の天目茶碗(No1)・瓶子(No2・3)・常滑窯系(No4)・渥美窯系(No6)の破片や、在地産の内耳鍋(No5)・火鉢(No7)・搥鉢(No8)・鉢(No9)・土師器皿(No10)などの破片も覆土中から出土している。

第16号溝跡出土遺物観察表

1	瀬戸窯系 天目茶碗	A.口縁部径(13.0)、残存高6.7。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデの後、外面下半回転施ケズリ。D.白色粒。E.内外一黒茶褐色、肉一淡黄白色。F.2/3。G.覆土中。H.内面及び外面上半に鉄釉を施す。
2	瀬戸窯系 瓶 子	B.粘土紐積み上げ。C.外面ナデの後施すによる蒔花文と暗褐色釉を施す。内面ヨコナデの後部分的に縦方向のナデ。D.白色粒。E.外一暗褐色、内一淡灰白色。F.破片。G.覆土中。
3	瀬戸窯系 瓶 子	B.粘土紐積み上げ。C.外面ナデの後三巴文の押印文と淡緑色釉を施す。内面ヨコナデの後部分的に縦方向のナデ。D.白色粒。E.外一淡緑色、内肉一淡灰白色。F.破片。G.覆土中。
4	常滑窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ナデ、内面施ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.外一淡緑色、内一淡褐色、肉一淡灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面に押印文。
5	内 耳 鍋	A.口縁部径(29.4)、器高17.2、底径(22.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一黒褐色。F.1/6。G.覆土中。H.外面煤の付着顕著。
6	渥美窯系 甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.破片。G.覆土中。H.外面に押印文を密に施す。
7	火 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。外面に押印文や珠文を施す。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡灰色、肉一淡橙褐色。F.破片。G.覆土中。



第76図 第16号溝跡

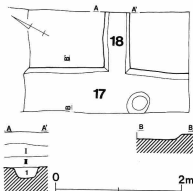


第77図 第16号溝跡出土遺物

8	鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。内面に描目をもつ。D. 白色粒。E. 内外一淡灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 在地産。
9	鉢	A. 口縁部径(29.2)、器高11.6、底径(11.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後半半匳ナデ。内面及び底部外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒、黑色粒。E. 内外一淡灰色。F. 1/4。G. 覆土中。H. 内面は良く擦れている。在地産。
10	土師器皿	A. 口縁部径(14.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。体部外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 口縁部1/4。G. 覆土中。
11	鉄製品	A. 残存長(2.8)、幅0.4。C. 断面は方形を呈する。F. 両端部欠失。G. 覆土中。

第17号溝跡(第78図)

北側調査区の東端に位置し、重複する第16号溝跡に切られている。遺構の東側の一部しか検出されていないため、厳密には溝であるか明確ではない。規模は、上幅が73cm以上・確認面からの深さが8cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦なようである。覆土は、ローム粒子を含む暗茶褐色土を主体にしている。遺物は、ロクロ成形の土師器皿の破片が2片出土しただけである。



第78図 第17・18号溝跡

第18号溝跡土層説明

第Ⅰ層：淡褐色土層

(現耕作土。)

第Ⅱ層：淡褐色土層

(A 軽石降下後の旧耕作土。)

第Ⅲ層：暗茶褐色土層

(B 軽石・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。)

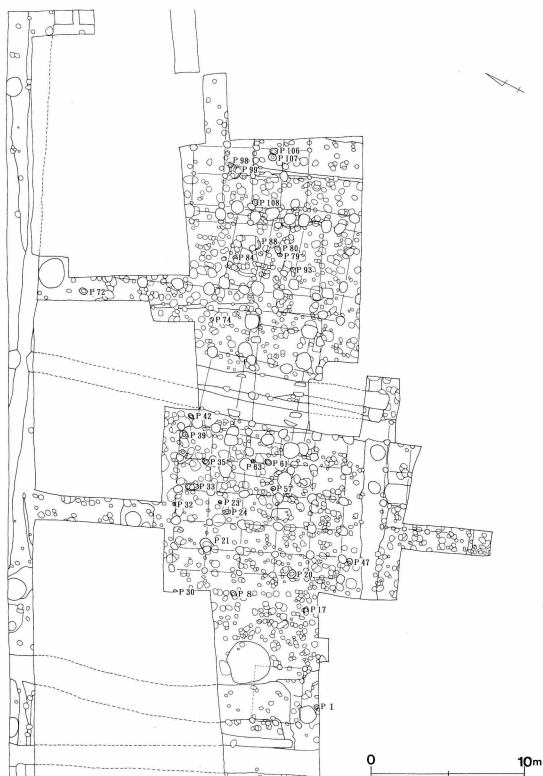
第18号溝跡(第78図)

北側調査区の東端に位置する。第17号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。流路は、南西から北東方向に向いて延びているようである。規模は、溝の上幅が40cmあり、確認面からの深さは18cmを測る。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、第17号溝跡と類似した暗茶褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中に混入して7世紀後半頃の内屈口縁部の小破片が2片出土しただけである。

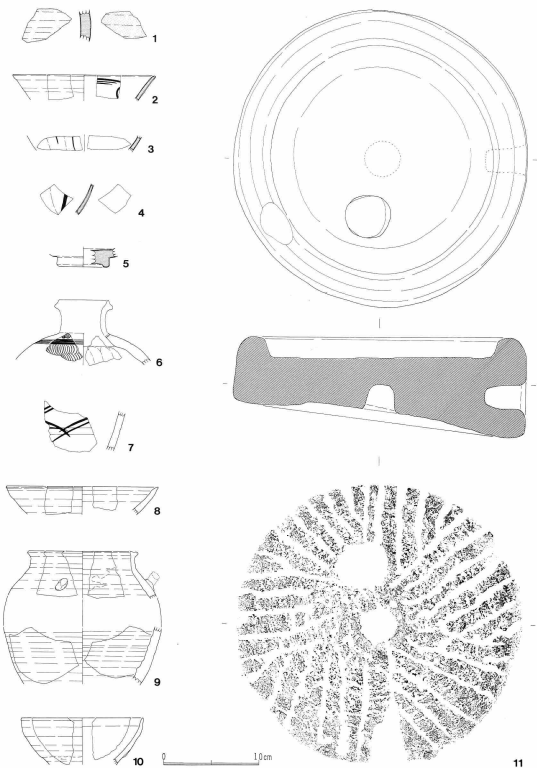
5. ピット出土・表採の中世遺物

ピット出土・表採遺物観察表

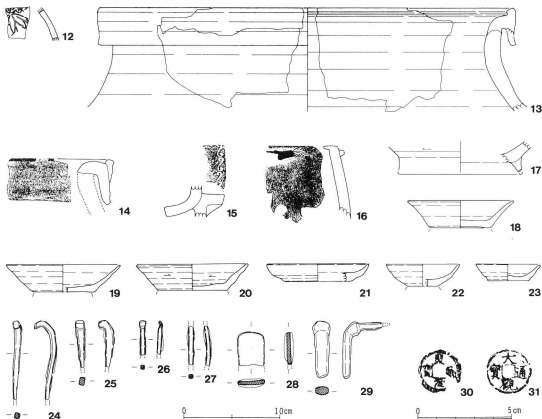
1	白磁壺	B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデの後、釉を施す。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-淡灰白色。F. 破片。G. P108。
2	龍泉窯系青磁碗	A. 口縁部径(15.0)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。内面に文様を施す。D. 白色粒。E. 内外-淡緑褐色、肉-淡灰褐色。F. 破片。G. P8。H. 内外面とも淡緑褐色釉。
3	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 外面鎗蓮弁文、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡緑灰色、肉-暗灰色。F. 破片。G. P74。H. 内外面とも淡緑灰色釉。
4	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 外面鎗蓮弁文、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡緑青色、肉-灰白色。F. 破片。G. P35。H. 内外面に淡緑青色釉。
5	龍泉窯系青磁碗	A. 高台部径(5.6)。B. ロクロ成形。高台部削り出し。C. 内外面回転ナデの後、暗緑色釉を施す。D. 白色粒。E. 内外-暗緑色、肉-淡灰色。F. 破片。G. P47。
6	瀬戸窯系瓶	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ナデの後押印による施文、内面指ナデ。D. 白色粒。E. 外-暗褐色、内肉-淡灰褐色。F. 破片。G. 表採。H. 外面暗褐色釉。
7	瀬戸窯系瓶	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ナデの後篋描による画花文を施す。内面ヨコナデの後部分的に縦方向のナデ。D. 白色粒。E. 外-暗褐色、肉-淡灰白色。F. 破片。G. P32。H. 外面暗褐色釉。
8	瀬戸窯系平碗	A. 口縁部径(16.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面とも回転ナデの後、淡緑色釉を施す。D. 白色粒。E. 内外-淡緑色、肉-淡褐色。F. 破片。G. 表採。
9	瀬戸窯系口広有耳壺	A. 口縁部径(11.6)。B. ロクロ成形。耳貼り付け。C. 内外面とも回転ナデの後、外面及び口縁部内面に鉄釉を施す。D. 白色粒、黒色粒。E. 外-黒褐色、肉-暗灰色。F. 口縁部破片、胴部1/4。G. 口縁部-P79、胴部-P80。
10	瀬戸窯系天目茶碗	A. 口縁部径(13.0)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後、外面下半回転篋ケズリ。D. 白色粒。E. 口唇部内外-茶褐色、体部内外-黒褐色、肉-淡灰白色。F. 口縁部1/6。G. 表採。H. 外面上半及び内面に鉄釉を施す。外面下半は露胎。
11	粉挽白(上白)	A. 直径31.0、高さ10.5、くほみ2.2、ふくみ1.0。C. 供給口・竺椿受け・粉出口は直線上に並び、上面及び側面は雑な研磨。下面は良く磨かれており、描目は六角。D. 安山岩。F. 完形。G. P88。
12	猿投窯系壺	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナデの後、外面に篋描による花文。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-淡灰色。F. 破片。G. P42。H. 外面に灰釉を施す。
13	常滑窯系甕	A. 口縁部径(44.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色、肉-暗灰褐色。F. 口縁部1/8。G. P30。
14	常滑窯系甕	A. 縁帯幅4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 外-淡灰褐色、内-暗褐色。F. 破片。G. P33。
15	風炉	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ヨコナデ、内面ナデ。突帯部上面に蕨手文の押印。D. 赤色粒、白色粒。F. 破片。G. P72。
16	火鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外-淡白褐色、内-明茶褐色、肉-黒灰色。F. 破片。G. P99。
17	山茶碗系鉢	B. 粘土紐積み上げ。高台部貼り付け。C. 体部外面ケズリ、内面ナデ。高台部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 1/5。G. P20。H. 第6号掘立柱建物跡から同一個体の破片出土。



第79図 ピット位置図



第80図 ビット出土・表採の中世遺物(1)



第81図 ビット出土・表採の中世遺物②

18	土師器皿	A.口縁部径(11.2)、器高(2.9)、底径(6.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り。D.片岩粒、黒色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.2/3。G.P21。H.口縁部内面の一部に油煙付着。
19	土師器皿	A.口縁部径(12.0)、器高2.9、底径(6.8)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。G.P39。
20	土師器皿	A.口縁部径11.8、器高2.3、底径7.3。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。G.P63。
21	土師器皿	A.口縁部径(10.8)、器高1.8、底径(7.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面摩擦のため不明瞭。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/4。G.南側調査区攪乱(イモ穴)内。
22	土師器皿	A.口縁部径(7.8)、器高2.3、底径(3.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.外一黒褐色、内一暗橙褐色。F.1/4。G.P17。
23	土師器皿	A.口縁部径6.8、器高1.8、底径4.2。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。G.P24。
24	鉄 釘	A.残存長8.4、幅0.5。C.頭部は緩やかに曲がり、断面は方形を呈する。F.先端部欠失。G.P61。
25	鉄 釘	A.残存長5.0、幅0.6、厚さ0.8。C.断面は長方形を呈する。F.先端部欠失。G.P84。
26	鉄 釘	A.残存長3.7、幅0.4。C.頭部は薄く、断面は方形を呈する。F.下半欠失。G.P93。
27	鉄 釘	A.残存長4.2、幅0.45。C.断面は方形を呈する。F.両端欠失。G.P98。
28	鉄 製品	A.残存長3.5、幅2.9、厚さ0.4。C.断面は板状を呈する。F.下半欠失。G.P1。
29	鉄製把手	A.長さ6.0、幅1.5、厚さ0.9。C.断面は長方形を呈する。F.先端部欠失。G.P57。
30	古 銭	A.直径2.3。C.「聖宋元寶」(初鑄1101年)。D.銅製。F.7/8。G.P106。
31	古 銭	A.直径2.4。C.「大観通寶」(初鑄1107年)。D.銅製。F.完形。G.P107。

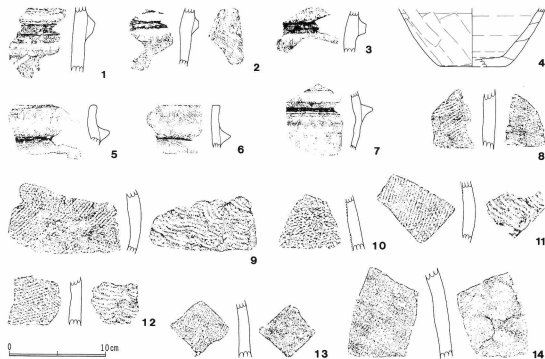
6. その他の遺物

調査区域内からは、主に中世の遺構の覆土中に混じって、中世以前の遺物も少量ながら出土している(第82図)。No1～3は、古墳時代の円筒埴輪の破片で、第1号溝跡・第8号溝跡・第16号溝跡からそれぞれ出土している。外面は縦ハケ調整で内面はナデであるが、No2は内面に部分的にハケを加えている。凸帯は、断面の形態が台形で、ヨコナデ調整されている。これらの埴輪片は、本遺跡南側残丘上の生野山古墳群から流れ込んだものであろう。

No4～7は、平安時代の羽釜の破片で、No4は第4号溝跡から、No5は第8号溝跡から、No6とNo7はピットからそれぞれ出土している。No4は、底部破片で内外面ともナデ調整されている。No5～No7は、口縁部～胴部の破片で、いずれも口縁部はやや内傾し、鈔は断面三角形の形態である。内外面ともヨコナデ調整されている。

No8～14は、須恵器甕の胴部破片である。No8～No12は、同一個体の破片で、外面は斜格子状に見えるやや条線の幅が狭い平行叩き目で、内面は青海波文の当道具痕を残している。No13は、外面が条線の幅が狭い平行叩き目の後にナデを加え、内面はナデである。これらNo8～No13の破片は、内外面が暗灰色で、器肉は暗茶褐色である。No14は、外面がやや条の幅が広い平行叩き目の後に丁寧なナデを施し、内面はナデの下に円形の当道具の痕跡が見られる。

その他では、古墳時代～平安時代の土師器の甕と坏や、須恵器高台付碗の小破片も少量出土している。これらの破片は、本遺跡の周辺に古代の小規模な遺跡が形成されていた可能性や、また本遺跡が所在する谷の開発が、古代に溯ることも窺わせる資料である。



第82図 その他の遺物

第Ⅵ章 ま と め — 壺丁田遺跡の遺構と遺物 —

今回報告した生野山残丘の比較的規模の大きな谷内にある3遺跡は、いずれも中世を主体とする遺跡である。谷の中央部に位置する向田A遺跡と向田B遺跡は、15世紀を中心とする水田跡や水路等が検出された生産関係の遺跡で、谷奥に位置する壺丁田遺跡は、約100m四方の敷地を有する在地領主層に関連した屋敷跡と考えられる生活遺跡である。いずれも調査面積が狭く遺跡の一部に限定されているため、遺跡全体の具体的な様相については明確ではないが、壺丁田遺跡はその狭い調査範囲内から、建物跡や井戸跡等の多くの遺構が重複して検出され、陶磁器・土器・金属製品(切羽・刀子・古銭・釘等)・木製品(漆塗椀・横植・杭等)・石製品(硯・温石・砥石・茶臼・粉挽臼・窪み石)など、比較的豊富な種類の遺物が出土している。ここでは、この壺丁田遺跡の土器の様相と遺構の変遷について述べてまとめとしたい。

第1節 中世の陶磁器と土器

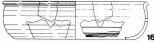
壺丁田遺跡から出土した中世の陶磁器と土器には、中国陶磁器・国産陶器・在地産土器があり、概ね12世紀～16世紀前半頃までの長期にわたるものが見られる。12世紀～13世紀頃では、中国陶磁器と国産陶器(渥美・常滑窯系)の搬入品が大半を占め、在地産土器は土師器皿がごくわずか見られるだけであり、14世紀は陶磁器や在地産土器とも出土量が少ないため様相が明確ではないが、15世紀になると前半に瀬戸窯製品に増加の傾向が見られるものの、国産陶器はかなり少なくなり、比較的豊富な器種構成による在地産土器群が主体を占めている。この本遺跡における土器組成の様相は、本遺跡の北東側約500mの残丘北側斜面下に位置する城の内遺跡(恋河内1997)とも概ね類似しており、近距離に位置する両遺跡の有機的な関係が推測されるが、これらの土器組成の時期的な様相は、北関東地方の生活遺跡で一般的に認められる傾向でもある(浅野1991・1995)。

1. 貿易陶磁器(第83図、図版15～17)

中国陶磁器は、図示できなかったものも含めると、27片が出土している。種類は、白磁7片・青白磁1片・青磁15片・陶器4片(うち2片は同一個体)で、青磁が過半数を占めている。これらの陶磁器は、12世紀後半～13世紀前半頃を中心とする時期のものに限られるようである。破片の大半は、別個体と考えられるものばかりで、同一個体の破片が見られるのは陶器の緑釉盤(№16)だけである。これらは、新しい時期の溝や井戸の覆土に混入して出土したものが多く、第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡では、複数の破片が特定の柱穴だけから出土しており、建物建造に際しての地鎮等を目的として意図的に入れた可能性も窺え注目される。

〈白 磁〉

白磁は、四耳壺と思われる壺6片と碗1片が出土している。壺は、いずれも胴部の小破片であるため、器形や明確な時期は不明である。第10号溝跡出土の碗(№1)は、体部がやや直線的で、口縁部を外反させて端部を短く水平につまみ出すもので、内面の上位に浅く細い沈線を1本施している。底部が不明であるため明確ではないが、体部が直線的であることから、Ⅷ類(横田・森田1978)に近

12	白磁	青磁	陶器
	 1	龍泉窯系碗  2  3  4  5  6  7  8  9  10	緑釉盤  16  17
13		 11  12  13  14  15	

第83図 貿易陶磁器

いものと思われ、時期は12世紀後半頃と考えられる(山本1995)。

〈青白磁〉

第2号掘立柱建物跡の柱穴内から、破片が1片(第39図No2)出土している。小破片であるため形態や法量など明確ではないが、器肉が厚く怪もやや大きいと思われることから、壺や鉢の可能性も考えられる。

〈青磁〉

青磁は、15片が出土しているが、すべて小破片のため全体の器形が分かるものはない。これらはすべて龍泉窯系の碗の破片で、同安窯系のもは出土していない。碗は、外面が無文で内面に劃花文を施すⅠ-4類(No2～9)、外面に鎗蓮弁文を施すⅠ-5b類(No11～15)、外面に蓮弁文と縦方向のハケを施し、内面に文様を施すⅠ-6b類(No10)があるが(横田・森田1978)、量的にはⅠ-4類が多い。時期は、Ⅰ-4類とⅠ-6b類が12世紀後半、Ⅰ-5b類が13世紀前半を中心とする年代とされている(山本1995)。

〈陶器〉

陶器は、緑釉盤の破片が第1号掘立柱建物跡の柱穴埋土中から2片(No16)、第7号井戸跡から1片(No17)、ピット12から1片の計4片が出土している。形態は、いずれも口唇部が若干肥厚して外側に折れ、あまり角張らないもので、時期は12世紀末～13世紀前半頃と思われる。当地域周辺の遺跡では、中国陶器の出土例は少なく、本庄市大久保山遺跡(注1)・児玉町城の内遺跡(忍河内1997)・神川町安保氏館跡(篠崎1995)で、緑釉盤や壺の破片がごく少数出土しているだけであるが、これらの遺跡が在地領主層の館やそれに関連する遺跡であることは注目される。

2. 国産陶器(第84・85図、図版18～22)

国産陶器は、東海諸窯の猿投窯・山茶碗窯・渥美窯・常滑窯・瀬戸窯と、能登の珠洲窯の製品が出土

しており、概ね12世紀～15世紀中葉頃までのものが見られる。猿投窯の壺の破片は、本遺跡の屋敷跡と直接関係するものか不明であり、また珠洲窯の製品は、単発的なものと考えられるが、山茶碗窯・渥美窯・常滑窯の製品は、12世紀末～13世紀の間にそれぞれの特定器種が継続的に見られ、本遺跡に搬入された国産陶器の土器組成の中で一定の地位を占めていると言える。14世紀には常滑窯製品とともに瀬戸窯の瓶子類が少量搬入されはじめ、15世紀になると常滑窯製品は減少して瀬戸窯製品が主体を占めるようになるが、大窯製品の搬入は明確ではなく、15世紀後葉以降になると、本遺跡では国産陶器はほとんど見られなくなるようである。

〈猿 投〉

猿投窯の製品は、P42から壺の小破片が1片出土している(Na18)。外面に細い篋による草花風の文様を描き、薄く灰釉を施している。12世紀頃のものと思われ、本遺跡出土の搬入品の中では最も古く位置付けられるものである。

〈常 滑〉

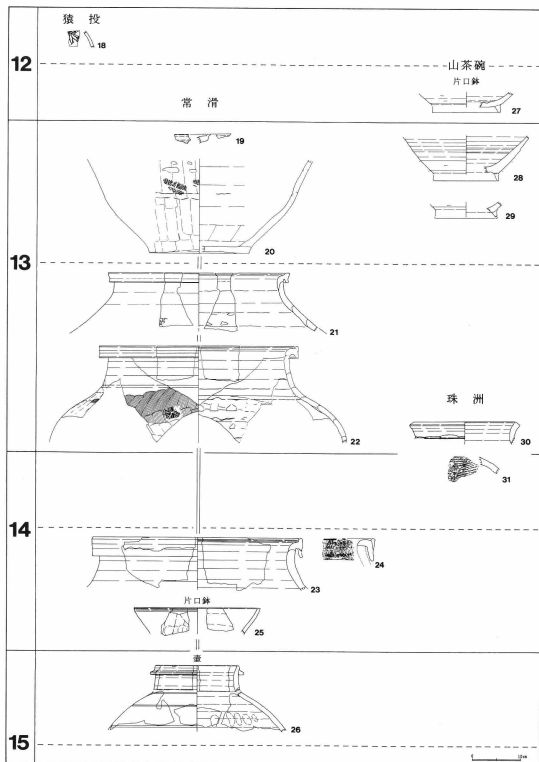
搬入陶器の中では最も多く、全部で161片が出土している。大半は甕の胴部破片であるため、器形や時期の分かるものは少ないが、同一個体の破片も多く見られる。甕は、時期が分かるものでは、口縁部がL字状を呈する13世紀前半の5型式(Na19・20)から、縁帯幅が5cm以下で頸部との間にすきまをもつ14世紀後半の8型式頃(Na23・24)までのものが見られる(中野1995)。壺は、器形が推測できるものは第6号井戸跡から出土したNa26だけである。口縁部が直立して外側に下半が強く開く縁帯を形成するもので、口縁部の形態からは15世紀前半の9型式(中野1995)のものに似ているが、同一個体の胴部破片には太く浅い1本描きの沈線を等間隔に3条施しており、あるいは9型式よりも古い可能性もある。片口鉢は、第8号溝跡とP13からⅡ類(青木1993)の口縁部破片が2片出土しているだけである。いずれも器肉は薄手で、口唇部に水平かやや内傾ぎみのやや狭い平坦面をもっており、おそらく14世紀後半の8型式頃のものではないかと思われる。この常滑窯製品の搬入の様相は、北関東における常滑窯製品の流通の状況(浅野1995)とほぼ同じであり、15世紀前半には搬入量が減少し、後半にはほとんど見られなくなるようである。

〈山茶碗〉

山茶碗窯系の製品は、3個体の破片が出土している(Na27～29)。これらは、いずれも高台の付く片口鉢Ⅰ類(青木1993・中野1995)の破片で、碗や皿は見られない。第2号井戸跡出土のNa27は、緻密な胎土の渥美系のものである。底部と体部の境が緩やかに湾曲して移行する形態であることから、12世紀後半頃のものと考えられる。Na28とNa29は、常滑系のものである。底部と体部の境が明確で、体部が直線的に開く形態であることから、13世紀前半の5型式(中野1995)に該当すると考えられる。

〈珠 洲〉

第1号溝跡と第8号溝跡から、胴部と口縁部の破片が1片ずつ出土している(Na30・Na31)。これらは同一個体の壺の破片と考えられるもので、胎土には白色針状物質を含んでいる(注2)。破片のため形態や法量は明確ではないが、口頸部は緩やかに外反し、口唇部は広い平坦面をもつ方頭の形態を呈しており、胴部外面は幅広の平行叩き目で、内面には当道具痕を残している。時期は、口縁部の形態から吉岡氏のⅣ-1期と考えられ、年代は13世紀末～14世紀初頭とされている(吉岡1994)。



第84図 国産陶器(1)

12

渥美

13



32



33



34



35



36

14

瀬戸

瓶子



37



38



39



40

15

折縁深皿



41



42



43

直縁大皿



44

花瓶



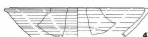
45

天目茶碗



46

卸目付大皿



47

平碗



48



49

口広有耳壺



51



52



52

0 1 2 cm

第85図 国産陶器(2)

珠洲窯の製品は、東日本の日本海側に広域流通圏を形成し、太平洋側ではほとんど出土することがない製品であり、関東地方では栃木県の小山城と茨城県(伝古河市)などのⅣ期の壺が知られている程度である(吉岡1994)。そのため、この流通圏外の北関東に搬入された製品は、その出土遺跡の階層性からも、一般的な流通によるものではなく、その地域の階層的求心力によって搬入されたものと考えられている(浅野1997)。本遺跡の珠洲窯製品の壺は、破片であるためその用途については明確ではないが、本遺跡の階層性を示す遺物の一つとして注目されよう(注3)。

〈渥 美〉

壺と甕の破片が21片出土している。器形の分かるものはほとんどないが、同一個体の破片もいくつか見られ、個体数にすれば10個体前後であろう。壺は、1～2個体程度で少ないが、第2号溝跡から2本横線によって区画された胴部上半に、篋描の蓮弁文を施した壺(No32)が出土している。口縁端部の折り返しが垂直ぎみに垂下する形態であることから見て、13世紀前半頃のものと思われる。甕は、すべて胴部破片で、器肉が薄手のものと厚手のものがほぼ半々である。外面の押印には、斜格子文(No33)と幅広の縦線文(No34～36)が見られる。細かな時期は明確ではないが、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

〈瀬 戸〉

瀬戸窯の製品は、図示できなかったものも含めると、全部で29片が出土している。接合しない同一個体の破片と思われるものもいくつかあり、個体数ではおそらく24個体前後であろう。これらの破片の中で器種が分かるものは、瓶子3・花瓶1・口広有耳壺1・折縁深皿2・直縁大皿2・大皿類5・天目茶碗3・平碗2・小皿1がある。これらは、中期様式～後期様式(藤澤1982・1991)のものが見られるが、大半は後期様式と考えられるもので、前期様式や大窯の製品は見られないようであり、北関東の生活遺跡に見られる瀬戸窯製品の流通の様相(浅野1997)とほぼ同じ在り方をしていると言える。

中期様式のものは、瓶子の破片が4片(うち2片は同一個体)見られるだけである。いずれも胴部破片であるため、器形や細かな時期は明確ではない。胴部外面に唐草文(No38・39)、押印による蓮弁文(No37)、押印による巴文(No40)を施文した3個体の破片があり、唐草文と蓮弁文の破片は暗褐色の鉄釉を、巴文の破片は淡緑色の灰釉を施している。

瓶子以外の器種は、すべて後期様式と考えられる。花瓶は、第1号溝跡からⅢ類の尊式花瓶が1点(No45)出土しただけである。口縁部径が16cm前後のやや大きめのもので、口縁端部まで緩やかに外反する形態であることから、後Ⅱ期のものと考えられる。口広有耳壺(No51)は、ピットから出土した破片で、外面と口縁部内面に鉄釉が施されている。形態は、口唇部が内外に肥厚してほぼ水平で中央部が若干窪む平坦面をもち、頸部は内傾ぎみに直立し、肩部が撫で肩を呈しており、後Ⅳ期の可能性が高い。折縁深皿(No41・42)は、口縁部内側の小突起状の段が上面のほぼ中央に位置することから、後Ⅱ期のものと考えられる。直縁大皿(No44)は、口唇部がやや丸みをもつが、その直線的な体部の形態から後Ⅱ期に近いものと考えられる。大皿としたNo47は、搦鉢Ⅰ類と同じ口唇部形態をした卸目付大皿(藤澤1997)とされるもので、その形態から後Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。天目茶碗の破片は3個体あるが、器形がある程度分かるものはNo46とNo50の2個体である。No46は、直線的な体部で口唇部が直立して端部は尖っており、これらの特徴から見て後Ⅱ期のものと考えられる。

No50は、体部がやや丸みをもち、器高も低いことから、後Ⅲ期のものと考えられる。平碗は、口縁部上半がやや内側に曲がり、口唇部が外反ぎみに尖る形態の口縁部破片（No48）と、高台部脇の削り込みが狭く深い形態の底部破片（No49）がある。いずれもその特徴から平碗の第4～5型式に該当し、後Ⅱ～Ⅲ期のものと考えられる。小皿（No52）は、口縁部径が10cm前後の小形のもので、底部外周に削り込みがあることから、削り出しによる低く偏平な輪高台が付く形態のものと思われる。小皿の第5型式に該当し、後Ⅳ期のものと考えられる。

3. 在地産土器(第86・87図、図版22～27)

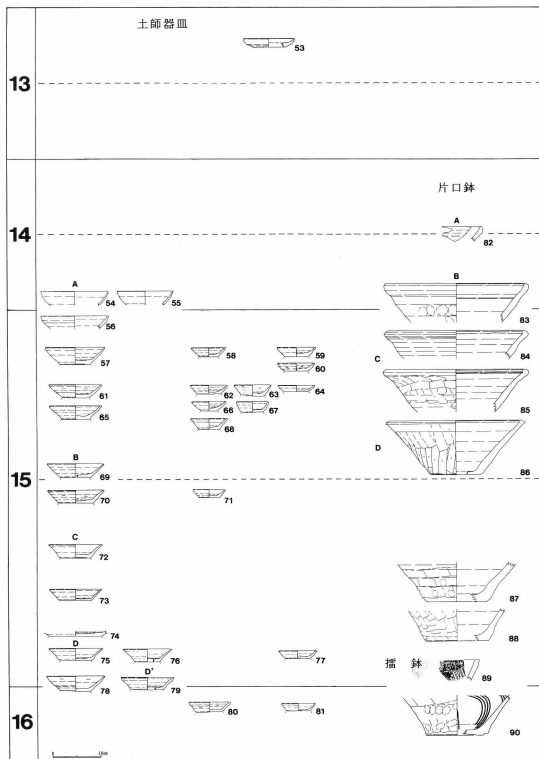
在地産土器は、概ね13世紀頃から15世紀後半もしくは16世紀前半頃までのものが見られるが、大半は15世紀以降のものである。13世紀～14世紀では、土師器皿・片口鉢・火鉢がごく少数あるが、新しい時期の遺構に混じって出土しているものがほとんどであるため、該期の様相は明確ではない。15世紀以降では、土師器皿・片口鉢・搥鉢・内耳鍋・土釜・火鉢・風炉などの、比較的豊富な器種が見られる。これらの器種のうち、量的には土師器皿が最も多く、当地域の一般的な生活遺跡ではあまり出土することのない火鉢や風炉なども見られることは、本遺跡の性格や階層性のある程度示すものとして注目される(注4)。

〈土師器皿〉

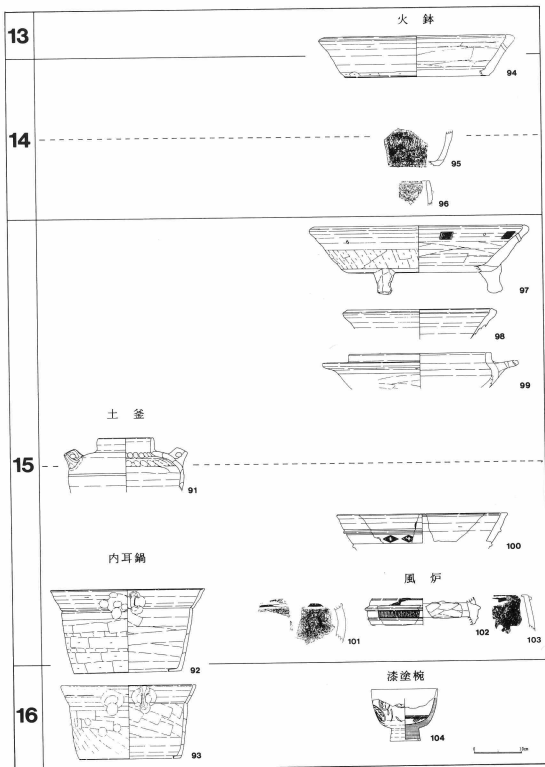
土師器皿は、在地産土器の中では最も多く、破片数ではおそらく200片以上はあろう。すべてロクロ成形のもので、手捏ね(非ロクロ)成形のものは見られない。時期は、13世紀前半頃～16世紀前半頃のものがあるが、大半は15世紀以降のものであり、その様相は概ね城の内遺跡(恋河内1997)の土師器皿の様相と類似している。

14世紀中葉以前のは、類似した胎土のものが数片あるが、器形が分かるものは南側調査区の攪乱内(イモ穴)から出土した小皿(No53)だけである。No53は、13世紀頃の土師器皿に特徴的な淡褐色系の粉っぽい胎土のもので、城内内遺跡の第1号門跡前庭部出土の土師器皿の胎土と良く似ている。形態は、口径が推定10cm前後で、底部がやや厚く突出し、口縁部が短くやや内湾ぎみに開いている。この小皿は、鎌倉市鶴岡八幡宮境内(研修道場用地)出土の12世紀後半とされる漆器小皿(齊木1994・1995)と形態的に類似しており、おそらくこのような木製小皿の模倣(浅野1991)と考えられるが、それに比べると底部の突出が緩やかでやや新しい形態と思われ、服部実喜氏の編年(服部1992)でも12世紀末～13世紀前半とするⅡ期に類似した形態のものが見られることから、一応本遺跡の屋敷形成期と考えられる13世紀前半頃のものとしておきたい。

14世紀末～16世紀前半頃のは、口径が10cm以上の大形タイプと、それ以下の小形タイプに分かれる。大形タイプは、口径が11cm前後のものが主体である。口縁部の形態が、A(内湾)・B(直線的)・C(外反)・D(下半外反・上半内湾)の4タイプが見られ、概ねこのA→B→C→Dの順に変化していくものと考えられる(浅野1991、恋河内1997)。つまり、14世紀からの内湾形態(A)が、口径が徐々に小さくなるとともに、内湾の度合いが緩やかになって直線的な形態(B)に移行し、その上半部から始まった外反形態(C)が、中位から下半へその外反位置を下げながら外反の度合いを強めるとともに、上半が内湾ぎみになり(D)、口唇部外面にヨコナデによる狭い平坦面をもつ、No79やそ



第86図 在地産土器(1)



第87図 在地産土器(2)

のやや崩れた形態のNo80のようなタイプ(D')が出現するようである。また、底部形態もこの口縁部形態に対応して、底部がやや厚く若干突出ぎみの形態(A)からやや薄く突出しない形態(B・C)に移行し、さらに底部外縁に調整を加えて、底部と体部の境に丸みをもたせる形態(D)に変化している。しかしながら、在地産土器の模倣性という特徴を考えるならば、土師器皿の形態変化も単純に在地における独自の一系的な変化としては考えられず、特に外反系のC・Dタイプなどは、京都系を中心とする西方の土師器皿の影響やその形態的模倣が、変化の要因としてあげられるのではないと思われる(田中1996)。また、C形態には、No74のような超大形のものも出現するが、今回調査した区域内ではほとんど出土していない。他器種との伴出関係では、第1号井戸跡でAと片口鉢C(No85)や足付盤状火鉢(No97)と瀬戸窯系直縁大皿(No44)の破片が出土し、第4号溝跡でDと平底の内耳鍋(No92)が出土している。小形タイプは大形のものとほぼ同形態の椗・坏タイプと、器高の低い皿タイプが見られる。本遺跡では、大形に比べて形態にややバラエティーが見られる。

〈片口鉢〉

片口鉢は、約30片の破片が出土している。多くは体部の破片であり、全体の器形が分かるものはほとんどない。口縁部の形態が分かるものでは、以下のA～Dの4形態が見られる。

- ・A形態—口縁部は短く内屈ぎみに直立し、口唇端部及び口縁部外面はやや丸みをもつ。内面の窪みの幅は、約1cm程度で狭い(No82)。
- ・B形態—口縁部はやや内湾し、口唇部に若干丸みをもった傾斜する平坦面をもつ。口縁部内面の窪みは、幅2.5cmで比較的広い(No83)。
- ・C形態—口縁部は若干外反ぎみに開き、口唇部は内側に丸く突出させ、外側に傾斜する平坦面をもつ(No84・85)。
- ・D形態—口縁部は直線的に開き、口唇部は内外に若干肥厚した傾斜する平坦面をもつ(No86)。

このA～Dは、口縁部屈曲系のAと口唇部平坦系のB・C・Dに分けられ、前者と後者は時期差と考えられる。木津氏や浅野氏の編年や年代観(木津1989・浅野1991)を参考にすると、前者のAは14世紀中葉以前に、後者はBが14世紀代に特徴的な口縁部がやや内湾ぎみで口唇部が尖る三日月状口縁片口鉢からの系譜が窺えることから14世紀末頃に、CがNo85とともに第1号井戸跡から出土した他の遺物の様相から見て15世紀前半に、Dが群馬県高崎市御布呂遺跡の播鉢(浅野1991)と同形態であることから15世紀中葉頃にほぼ位置づけられよう。また、第1号溝跡出土の体部下半の破片(No87・88)は、内面に播目をもたないが、体部の立ち上がりがやや急で、体部下半にくびれをもつことから、15世紀後半以降の可能性が高いものと思われる。しかしながら、これらの在地産片口鉢の年代比定については、具体的な定点が明確に示されていないわけではないため、系統性を含めた今後の明細な検討が必要であらう。

〈播鉢〉

播鉢は、第4号溝跡・第6号溝跡・第8号溝跡(No90)と第16号溝跡(No89)から、破片が5片出土しただけである。焼成は瓦質のものが多く、片口鉢に比べて器肉がやや薄い。播目は、斜方向に付けられるものが大半で、間隔が粗いもの(No89・90)と密なもの(第71図No8)があり、No89は口縁近くまで播目が施されている。全体の器形が分かるものはないが、体部の立ち上がりがやや急で、内面

の描目が長いものが多く、口唇部の平坦面が水平なもの(No89)も見られることから、これらの時期は大半が15世紀後半～16世紀前半頃と考えられる(木津1989・浅野1991)。

〈内耳鍋〉

内耳鍋は、第4・5・8・16号溝跡を中心に、比較的多く出土している。器肉がやや厚く、口縁部が短く内湾する坂戸市金井遺跡B区(赤熊1994)や岡部町菅原遺跡(大屋1996)のものに類似した、14世紀末～15世紀初頭とされる木津氏や浅野氏のI期に相当すると思われる小破片も、第16号溝跡の覆土中から1片出土しているが、大半は口縁部が長く体部が直線的な平底形態を呈した、木津氏のV期(木津1989)や浅野氏のIV期(浅野1991)に該当する、15世紀後葉～16世紀前半頃(服部1997)とされるものである。これらの平底形態の内耳鍋は、併走する第4号溝跡と第5号溝跡で、良好な資料が出土しているが、後者のもの(No93)は前者のもの(No92)に比べて口縁部のヨコナデが弱く、口唇部の作りも外側への摘み出しや凹線状の窪みもない単純な形状で、体部も垂直直みで若干浅めになっている。第5号溝跡よりも第4号溝跡の方が先に埋没した様相が窺えることから、両者の形態差は若干の時間差としてとらえてもよいと考えられ、前者の口縁部形態が城の内遺跡の丸底形態の内耳鍋の口縁部形態との類似性が強いことから、それからの漸移的な変化も想定されよう。また、土師器皿との関係では、城の内遺跡の丸底形態が土師器皿Cと、No92が土師器皿Dと、No93が土師器皿D'と並行することも推測されるが、今後の良好な一括資料による検討が必要である。

〈土 釜〉

土釜は、第2号掘立柱建物跡の柱穴掘り方埋土と、建物の北東側約4mに位置するP93から、No91の破片が数片と、第8号溝跡から胴部中位に一本の沈線を施した別個体の破片が1片出土しただけである。No91は、環状の耳の外側に長方形を呈する板状の火よけをもつB類(宮瀧1991)で、胴部の中位に一本の太い沈線を施している。時期は、第2号掘立柱建物跡が平底で薄手の内耳鍋を伴う第4号溝跡や第5号溝跡に切られ、三日月状口縁から方頭口縁に移行する段階の片口鉢を出土した第4号掘立柱建物跡を切っていることから、15世紀中葉頃と考えられる。

〈火 鉢〉

火鉢は、9個体分の破片が出土している。いずれも円形を呈する浅鉢形と思われるが、形態は多様である。No94は、有孔盤形火鉢(木津1989)と呼ばれるもので、形状的には13世紀に京都で使用された盤(菅原1989)や大鉢(伊野1989)と呼ばれるものに類似している。鎌倉では河野氏のI C類に該当し、時期は13世紀中葉～14世紀前葉とされている(河野1993)。No95は、破片の左端が縦方向に窪んでおり、あるいは輪花状を呈するものかもしれない。鎌倉の輪花状火鉢(河野氏のIII類)とは器表面の調整や焼成が異なるが、時期は概ね14世紀頃と思われる。No96は、口縁部外面の沈線間に円の中に花菱文をもつ押印と珠文を横位に連続して施したもので、河野氏のIV A類に該当し、時期は14世紀後葉～15世紀前葉とされる(河野1993)。No97は、有孔盤形火鉢の系譜を引くものと考えられるが、内面に押印による雷文を孔の間に施している。時期は、第1号井戸跡から一緒に出土した瀬戸窯系直縁大皿(No44)や他の在地産土器から見て、No98とともに15世紀前葉頃と考えておきたい。No99は、比較的最長い鋳の付くもので、鋳の上面には押印による大きな菊花文の周囲に小さな菊花文を巡らせた文様を施している。体部が強く内湾する形態であるが、河野氏のIV C類の系譜を引くもの

と思われ、第6号井戸跡から一緒に出土した常滑窯系壺(Na26)や瀬戸窯系平碗(Na49)を考慮すると、15世紀前半頃と思われる。Na100は、河野氏のV類に該当し、外面の凸帯間やその上に押印文を施す。一般的なものとは違って、口縁部が直線的に外傾し、凸帯による文様帯が口縁部直下ではなく体部の中位にある。第4号溝跡から出土した他の土器群から、15世紀後半～16世紀初頭以前と推測される。

〈風 炉〉

風炉は、壱丁田遺跡で4個体分の破片(5片)が出土しているが、いずれも小破片であるため全体の器形が分かるものはない。Na102は、壺形のもので、第4号溝跡から出土した他の土器群から15世紀後半～16世紀初頭以前と推測される。この風炉は、茶釜(土釜)とセットで使用され、茶の湯を沸かす火鉢状の道具(菅原1989)と考えられている。壱丁田遺跡では、出土した土釜(Na91)や瀬戸窯系の天目茶碗(Na46・50)などとは廃棄時期が異なるが、第4号溝跡からは茶臼の破片も出土しており、屋敷内で茶の湯が行われていたことも推測されよう。

第2節 遺構の変遷とその性格

1. 壱丁田遺跡の遺構の変遷

前述のように、壱丁田遺跡では概ね12世紀～16世紀前半にわたる遺物が出土しているが、調査区内で検出された遺構の中で時期が把握できるものは、13世紀以降に限られる。そのため、本遺跡の屋敷の形成が、12世紀代に溯るかどうかは明確ではないが、今回の調査区域が屋敷地全体のごく限られた狭い範囲であることからすると、現段階ではその可能性がないとは言えないだろう。13世紀以降の遺構は、調査区内でかなり重複して検出されており、長期間にわたる変遷が窺えるが、出土遺物から細かな時期が特定できるものは少ない。また、遺物が比較的多く出土した遺構についても、遺物に時間幅が見られる場合が多く、特に溝は埋没時期は分かるものの、その掘削時期については、その流路がずれないで維持されている場合や、掘り返しによって規模が大きくなった場合なども考慮され、明確にすることが困難である。このような個々の遺構の時期限定の困難さから、時期区分についてはかなり時間幅をもたせざるをえないが、ここでは、遺構の重複関係やその配置及び屋敷地内の地割り方向の変化を参考にしながら、屋敷内のごく一部の範囲ではあるが、調査区内の13世紀以降の遺構の変遷を考えてみたい。

I期(13世紀)

該期の建物跡は、大型総柱建物の第1号掘立柱建物跡(4間×5間1面庇付)があり、それと建物の方向が同一の東側の第7号掘立柱建物跡(3間以上×4間1面庇付)や、南側の第10号掘立柱建物跡(2間×3間2面庇付)も同時期と考えられる(注5)。建物の構造は、いずれも総柱式で、建物の西側に庇か下屋を伴う共通性がある。また、第7号掘立柱建物跡は建物の北側の側壁を第1号掘立柱建物跡の北側側壁の延長上に一致させ、第10号掘立柱建物跡も建物の身舎部分の南北方向の柱穴の位置を第1号掘立柱建物跡の柱穴列と一致させていることから、それらの建物の配置が大型の第1号掘立柱建物跡に規制された、計画的な建物配置であることが窺えよう。これらの建物跡は、第1号掘立柱建物跡がその規模や建物配置の中心的役割をもつことから、屋敷居住者の主屋的建物と考えられ、その南側に近接する第10号掘立柱建物跡は、主屋の付属的建物(副屋)と推測される。両

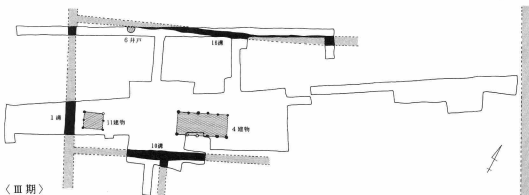
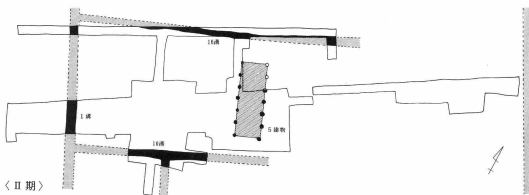
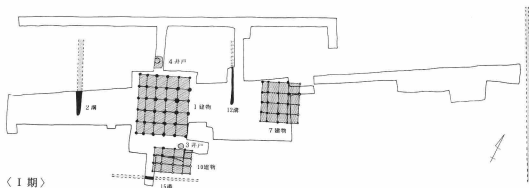
者は、約1間強の間隔で近接し、南北方向の柱穴列を一致させていることから、渡り廊下等により連結されていた可能性もあろう。この主屋や付属屋の東側にやや離れて位置する第7号掘立柱建物跡は、建物の中心の2間×3間の柱穴に比較的大きな礎石を伴う構造であることから、居住等のための一般的な建物とは異なった特別な建物と考えられ、おそらく蔵か持仏堂のような建物であった可能性が推測される。井戸跡は、第1号掘立柱建物跡と同一個体の常滑窯系甕の大形破片を出土した第3号井戸跡と、出土遺物から13世紀末～14世紀初頭頃には廃絶された可能性が高い第4号井戸跡がある。第3号井戸跡は、第10号掘立柱建物跡と極めて隣接していることから、第10号掘立柱建物跡の建築に伴って廃絶されたか、該期の遺構群よりも古い可能性も考えられる。第4号井戸跡は、井筒の上面に方形の浅い掘り込みを伴い、本遺跡で検出された井戸跡の中では特異な掘り方形態で、その位置からすると主屋の第1号掘立柱建物跡に付属する井戸と考えられる。溝跡は、13世紀前半を主体とする国産陶器を出土した西側の第2号溝跡があり、これとほぼ平行する東側の小規模で浅い第12号溝跡や、それらの溝跡とほぼ直交し、形態や覆土が第12号溝跡と類似する南側の第15号溝跡も同時期のものと推測される。これらの溝跡は、いずれも溝の端部が途切れており、敷地を区画する目的の溝であることが分かるが、西側の第12号溝跡と南側の第15号溝跡は、その規模や位置から見て、屋敷地内を二次的に区画する溝であったと考えられる。第2号溝跡は、後に第1号溝跡がほぼ同じ方向に重複して掘削されており、現地表面に見られる約100m四方の屋敷地の地割りが、該期の屋敷地を基本にして形成されたことが窺え注目される。また、これらの溝には、痕跡としては残っていないが、当然ながら垣根や塀等の遮蔽物が溝に沿って存在したものと思われる。

Ⅱ期(14世紀)

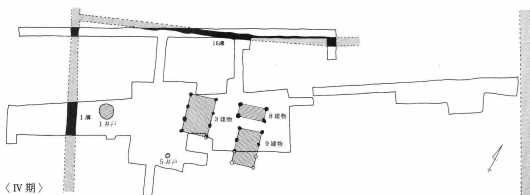
建物跡は、14世紀頃の輪花状火鉢の一種と思われる破片を出土した、第5号掘立柱建物跡がある。梁行側に棟持柱の柱穴をもたない2間×6間の長細い建物であるが、柱穴規模や版築状の埋土から見て、比較的しっかりした作りの建物と思われる。建物の向きがⅠ期の建物と同じであり、Ⅰ期の屋敷地内の区画割りが継続されていることが窺えるが、Ⅰ期の溝がⅡ期まで継続しないことや、第5号掘立柱建物跡の位置を考えると、西側の第1号溝跡、北側の第16号溝跡、南側の第10号溝跡などは、廃絶時の規模や形態とは異なるであろうが、建物を囲むように該期には掘削されていた可能性が高いであろう。

Ⅲ期(14世紀末～15世紀初頭)

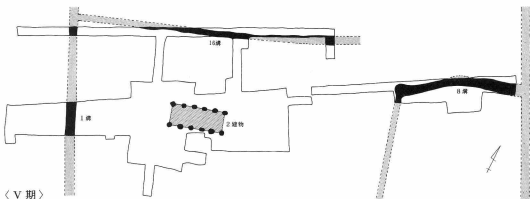
該期は、Ⅱ期の区画割りを継承して、その区画内での建物配置が変化する。建物は、第4号掘立柱建物跡があり、建物の側壁をこの第4号掘立柱建物跡の南側の側壁の延長線上にはほぼ一致させる西側の第11号掘立柱建物跡も同時期と考えてよいであろう。第4号掘立柱建物跡は、梁行側に棟持柱の柱穴をもたない2間×5間の長細い建物で、Ⅱ期の第5号掘立柱建物跡と類似するが、柱穴はやや規模の小さな方形ぎみの形態で、1間の間隔も狭く、桁行側の間数や建物規模も一回り小さく、長屋等の一般的な建物になっている。第11号掘立柱建物跡は、小規模で内部が土間のままの単純な作りと思われ、物置か作業小屋のような建物であろう。井戸は、出土遺物から15世紀初頭から前葉頃には廃絶されたと考えられる、第6号井戸跡がある。覆土中から木製の横桑が出土しており、近くに作業小屋が存在した可能性もある。



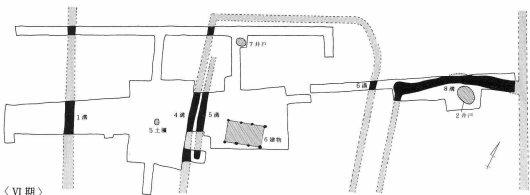
第88図 老丁田遺跡遺構変遷図(1)



〈IV期〉



〈V期〉



〈VI期〉

第89図 荅丁田遺跡遺構変遷図2

IV期(15世紀前葉)

建物跡は、遺構の重複関係から見ると、第3号掘立柱建物跡が該期のものと考えられ、それと同じ向きで建物の側壁の位置を相互に揃える、東側の第8号掘立柱建物跡と第9号掘立柱建物跡も同時期のものと推測される。第3号掘立柱建物跡と第9号掘立柱建物跡は、いずれも梁行側に棟持柱の柱穴をもたない2間×3間程度の一般的な規模の建物と推測されるが、若干規模の大きな第3号掘立柱建物跡は、柱穴内に礎石や根回しの石を多用しており、第9号掘立柱建物跡よりもやや上位の建物であったかもしれない。第8号掘立柱建物跡については、規模が極端に小さいため、建物かどうか明確ではないが、柱穴掘り方は比較的規模が大きく、何だかの建築物であったと思われる。これらの建物の向きは、Ⅲ期までの建物と若干異なって、北方向により近くっており、該期になって屋敷内の区画割りが変化したことが窺える。建物の向きや配置を直接規制するような、溝等の明確な区画割りの痕跡は見られないが、おそらく建物に沿って構や塀や生け垣等の簡単な構造の区画割りが存在したと思われる。あるいは、東側の第8号溝跡の掘削が該期に遡る可能性もあろう。井戸は、西側に第1号井戸跡があり、南側の第5号井戸跡も重複関係や出土物から該期のものと推測される。第1号井戸跡は、比較的掘り方規模が大きいもので、屋敷の区画内の共有的な井戸であったものと思われる(注6)。第5号井戸跡は小規模なもので、近くの特定制建物に付随する井戸であった可能性が高い。溝は、第1号溝跡と第16号溝跡は、継続して存在すると考えられるが、南側の第10号溝跡は遺構の重複関係から見て、該期の早い段階で廃絶されたようである。

V期(15世紀中頃)

該期は、Ⅳ期の区画割りを継承するものと思われ、その区画内での建物配置の変化としてとらえられる。建物跡は、第2号掘立柱建物跡があり、Ⅳ期の第3号掘立柱建物跡の場所に、それと建物の向きを直交させて建てられている。建物は、梁行側に棟持柱の柱穴をもたない2間×5間の東西方向に細長い建物で、礎石や根回しの石を多用している点は、第3号掘立柱建物跡と類似しているが、柱穴掘り方の規模がかなり大きいわりには1間の間隔が狭く、埋土は版築状に丁寧に埋められていることから、単なる居住用の建物ではないと思われる。この他では、この建物と向きをほぼ一致させる東側の第8号溝跡も、該期には掘削されていたものと思われる。また、北側の第16号溝跡は、次期の第4号溝跡との重複関係から、該期のうちに廃絶されたものと考えられる。

VI期(15世紀後葉～16世紀前半)

該期には、西側の第4号溝跡と東側の第6号溝跡が掘削されている。これらの溝は、溝断面の形態が異なるものの、ほぼその流路が平行しており、現地表面に残る地割りからすると、やや不整の長方形ぎみに圍繞する内郭を形成するものと考えられる。第4号溝跡の西側に隣接して併走する端部が途切れた区画溝の第5号溝跡は、これらの溝よりもやや遅れて掘削されたものと思われるが、西側の第6号溝跡と第8号溝跡の関係からすると、第4号溝跡と第5号溝跡も一時期同時に存在し、あるいは内郭を部分的に二重堀の形態にしていたのかもしれない。建物跡は、明確ではないが、建物の配置からすると第6号掘立柱建物跡が該期の可能性が高いと思われる。井戸跡は、内郭内に位置すると考えられる第7号井戸跡と、東側外郭の第8号溝跡による区画内に位置する第2号井戸跡がある。この第2号井戸跡の覆土上半には、多量の玉砂利が充填しており、この井戸の周囲に玉砂

利が厚く敷かれていたか、近くに玉砂利を敷いた施設が存在が推測される。この他では、西側の外郭に位置する第5号土塋も、出土遺物から該期のものと考えられる。なお、該期の溝の多くは、屋敷が廃絶された以後も現在まで、小規模な排水路としてほぼその位置で維持されている。このことから、現在の地表面に見られる土地区画の形態(第32図・第90図)は、最終段階の屋敷地の地割りを比較的良く残しているのではないと思われる。

2. 壱丁田遺跡の性格と周辺の様相

本遺跡は、前述した遺物や遺構の様相から見て、当地域における在地領主層の屋敷つまり居館と考えられるものであるが、その出現期のⅠ期の段階(13世紀代)から、すでに建物面積が 100m^2 を超える大型総柱建物(第1号掘立柱建物跡)を有する在地有力者層の屋敷として形成されていることは注目されよう。このⅠ期の屋敷は、その屋敷地の広さは不明であるが、典型的な館に見られるような、防御的機能をもった規模の大きな堀と土塁によって圍繞される形態ではなく、単なる敷地の区分を目的とした比較的小規模な溝によって区画されている。このような大型建物を有するものの、防御的機能をもたない小規模な溝や櫓等によって区画された屋敷の形態は、中世城館の出現と展開過程を近畿地方の資料を中心にして検討された中井均氏や、関東地方の資料を中心にして検討された橋口定志氏により、古代末頃の「初期館」出現以前の「前館的なもの」(中井1987)、古代末～中世前期の「出現期居館」(橋口1987)として、それぞれ類型化されている。本遺跡のこのⅠ期の屋敷も、中井氏のⅠタイプや橋口氏のⅠ・Ⅱ群に該当するものと考えられるが(注7)、その屋敷地の区画形態や建物の配置は、13世紀初頭頃の作とされる『一遍上人絵伝』の中の「信濃国佐久郡の武士大井太郎の館」(玉井1996)を彷彿させよう(注8)。

その後、屋敷の主屋と考えられるような建物は、調査区内では検出されていないため、調査区外の隣接地に移るものと思われるが、屋敷内部の区画や建物の方向は、14世紀末～15世紀初頭のⅢ期まで、Ⅰ期の建物と同じく約100m四方の屋敷外側を区画する地割りの方向とはほぼ一致している。おそらくこのⅢ期までの14世紀代には、現地表面に残る約100m四方の屋敷外側の溝も掘削され、方形館の形態が形成されていたと思われる。15世紀前葉のⅣ期になると、中心部の建物の配置に大きな変化が見られ、屋敷地の地割り方向と若干異なった向きに建物が配置されるようになる。おそらくこの時期になって、屋敷中央部に屋敷外側の区画とは若干向きを違えた地割りの内郭的な空間が形成されたものと思われる。そして、15世紀後葉以降のⅥ期に、溝によって明確に区画された内郭が形成され、ある程度防御的機能を高めた外郭と内郭による複郭構造の形態をとるようになったものと推測される。また、本遺跡の建物の構造は、中世前期のⅠ期(13世紀)では総柱式建物が主体であるが、後期のⅡ期以降(14世紀以降)になると、梁行側の棟持柱の柱穴を持たない側柱式建物が主体となり、越中地方で指摘される中世掘立柱建物の構造変化(前川1996)と同じ傾向が見られることは注目されよう。

このように、本遺跡は中世前期の「前館的」(中井1987)あるいは「出現期居館」(橋口1987)とされた形態から、中世後期には約100m四方の「方形館」の形態になることが推測され、さらに内郭が形成されて複郭構造の館に発展する遺跡として注目されるが、実は現地表面や地籍図の地割りを見る



第90図 壱丁田遺跡周辺の地割り (明治9年地籍図を一部改変)

と、本屋敷地の東側に接して、ほぼ同規模の100m四方の方形区画が、もう一つ並んで存在することが伺える(第90図)。この東側の方形区画は、本遺跡の屋敷地が現在まで畑として利用されていたのとは異なり、ほぼその全域が水田化されて一段低くなっているが、比較的大きな溝によって圍繞されていたような地割りの痕跡が部分的ながら見られることや、その区画内部の水田耕地としてはやや不自然な地割り形態から、本屋敷地と同様の屋敷地であった可能性が高いと思われる。これらは、両区画の北側を画する溝の痕跡と考えられる同規模で直線的な帯状の水田が、鉤の手状に連続していることから見て、両者は本屋敷の廃絶時には併存していたことが推測される。この東側の方形区画の形成時期や性格については、調査が及んでいないため明確にできないが、この方形区画の東側を画する現道に隣接した向田B遺跡のⅠ区(本書第四章)では、方形区画の南側を画する溝と関係する可能性が考えられる第2号溝跡(第27図)や第6号溝跡(第29図)が検出されている。このうち、向田B遺跡のⅠ区で検出された遺構の中で最も古い第6号溝跡が、15世紀中頃～後半頃の水田Dの下に埋没していることから推測すると、15世紀前半(Ⅳ期～Ⅴ期)にはこの方形区画の基本的な形態が、すでに形成されていたのではないかとと思われる。また、この東側の方形区画の屋敷地が、本屋敷地に付随する郭的な敷地であったのか、あるいは本屋敷と密接な関係をもちながらも、元服した嫡子が居住した「新屋敷」のような、ある程度独自性をもった館であったのか細かなことは一切分からないが、その区画内の地割り形態からは、本屋敷地と同様に長方形ぎみの内郭の存在も伺え、本遺跡は15世紀後半には複郭構造をとるほぼ同規模の方形館が2つ連接するような、連館構造の比較的大きな館を構成していた可能性もあろう(注9)。

さて、本館が丘陵部に立地する他の館と違って(注10)、谷内の平坦部に立地する要因は、その谷内の最奥部という位置からして、本館の東側に広がる谷田の灌漑に関する水利権の直接的な掌握に

あったことが考えられよう。これらの谷田は、残丘からの湧水による天水によって灌漑されており、その水源である通称「上の池」・「うさぎ(兎田)池」・「弁天池」の3つの溜池が、いずれも本館の近辺に所在していることは注目される。この3つの溜池のうち、「上の池」と「うさぎ池」は谷の南側残丘に入り込む狭い小支谷の入り口に土手を築いた谷池で、「弁天池」は谷内の平坦地に土手を圍繞させた皿池である。これらの築造時期については、近世後期までは確認できるが(注11)、それ以前については明確なことは分らない。しかし、「上の池」は本館の西側方形区画の西側から北側の外堀にあたる部分に沿って、「うさぎ池」は東側方形区画の東側の外堀にあたる部分に沿って、現在それぞれの用水が流れており、元々は本館の外堀に用水を引き込んでいたことが伺える。このことから、本館(屋敷)が形成された中世に、この両谷池が存在していた可能性は極めて高いであろう。また、周辺の古代集落の動向から見て、この谷田の開発が古代に遡ると考えられることからすると、谷池という古い溜池灌漑の形態(金田1993)をとる両池は、その築造がさらに古代にまで遡る可能性もある。 「弁天池」については、本館の西側に近接しているにもかかわらず、本館の堀とは直接関係しない現在の北側の道に沿って流れる用水にその水を入れていることや、皿池というやや新しい溜池の形態(金田1993)であることから、谷池よりも新しいものと思われ、恐らく本館廃絶後の近世の新田開発に伴って、新しく築造されたのではないかと推測される(注12)。

このように、本館は「上の池」と「うさぎ池」の灌漑用水を、その上流で館の外堀に直接引き込むことによって、その水利権を掌握し、下流の谷田に対する勸農権を行使したものと考えられ、それは「勸農機能を媒介として農民を自己の支配下に包摂する最も現実的な方法」(小山1987)として評価される。そして、用水を最初に引水することができる館の周辺には、門田等の直営田を展開したものと推測される。本館において、このような館堀の滞水機能を利用した灌漑形態が確立するのは、現在までの調査では本館の外堀が形成されたと推測される14世紀以降と考えられ、それ以前の13世紀の屋敷の段階(I期)については不明である。しかし、このI期の屋敷に滞水機能をもつような規模の大きな堀が形成されていなくても、谷田を灌漑するこれらの溜池が谷奥からの湧水を集めた用水が、本屋敷地のすぐ近くを流れていたことはその立地場所から見て間違いなく、恐らくその用水を管理することで、同様に水利権を掌握し、勸農権を確保していたものと推測される。

本屋敷(館)の居住者については、現状では不明であるが、自らの財力によってこれらの溜池を築造したか、あるいは荒廃した谷内の溜池や灌漑用水の修繕整備を行い、中世前期には用水不足や地力不足によってこの谷内にも多く存在していたと思われる「片あらし」と呼ばれるような年荒や常荒の不安定耕地(戸田1967)を再開発することによって、谷田の支配権を確立した開発領主であったことは容易に想像されよう。このI期の屋敷が形成された時期(13世紀前半)には、本屋敷と至近距離にあり、中世を通じて密接な関係をもつと考えられる城の内遺跡(恋河内1997)に、立派な門や瓦葺き建物を有する寺も作られており、それらの財力を考えると、当地域を本貫地にした児玉党阿佐美氏との関係が推測され、この生野山残丘内の谷田が、庄弘方・阿佐美実高父子に代表される、初期阿佐美氏の基盤であったことも十分考えられよう。その後、本遺跡は15世紀後半～16世紀前半頃まで、館として整備されながら継続するが、この阿佐美氏一族がそのまま代々居住していたかどうかは、中世後期における在地領主の具体的な動向がほとんど分からないため不明である。(恋河内昭彦)

注

- (注1) 荒川正夫氏のご教授による。なお、同氏には本遺跡の中世土器についての様々なご教示や、文献収集に関しても多大なご協力をいただいた。この場を借りて感謝いたします。
- (注2) この破片については、荒川正夫氏を通じて吉岡康暢氏に鑑定していただいた。この場を借りて両氏に感謝いたします。なお、吉岡氏によると珠洲窯製品でも窯の場所によっては、白色針状物質(海綿骨針)を含むものがあるそうである。
- (注3) 本遺跡から出土した珠洲窯の壺が、どのような経緯で当地にもたらされたのか知るすべもないが、当地域の階層的求心力を考えると、鎌倉時代初期(13世紀前半)に当地域を本貫地にしていたと考えられる兄玉党の阿佐美実高(仁治2年・1241年没)は、この珠洲窯製品の流通圏である北陸の越後国の荏保・横倉備保や加賀国の島田村などの所領も有しており、その所領支配に子息(庶子)らを派遣していたことが注目される。この阿佐美氏の惣領家と北陸所領との交流関係が、実高の子の実家やあるいは孫の実村(実行)の代にあたる13世紀末以降まである程度継続され、その関係を介して珠洲窯製品が当地にもたらされたことも推測されるが、現段階での検証は資料的に困難である。
- (注4) 一般的な生活遺跡とは、当地域のような農村部において大多数を占める農民層の屋敷跡のことである。本遺跡の周辺では、雷電下遺跡(恋河内1991)・南街道遺跡(恋河内1996)・浅見境北遺跡(恋河内1997)などが農民層の屋敷跡の一部と考えられるが、これらの遺跡から出土した在地土器は、片口鉢や内耳鉢が主体で、鎌倉などの大都市における一般的な町民層の屋敷跡(河野1995)とは違って、土師器皿や火鉢などはほとんど見られない。
- (注5) 第7号掘立柱建物跡では、14世紀頃の在地産片口鉢や火鉢と15世紀後半頃の土師器皿の小破片が出土している(第48図)、これらは柱穴と重複するピットからの混入と考えられる。後述のように、第7号掘立柱建物跡はその建物の向きや配置から見て、第1号掘立柱建物跡との関係が強く、I期に存在した可能性が極めて高いと考えられる。
- (注6) このような屋敷内の1つの区画に規模の大きな共有的な井戸が1基と、特定建物に付随するような小規模な井戸が複数存在する様相は、本遺跡と近距離にある15世紀後半を主体とする城の内遺跡(恋河内1997)でも、調査された複数の区画で見られる。
- (注7) 中井氏のIタイプや橋口氏のI・II群とも、現状では類例が少ないようで、単純に発展段階的な類型として一般化できるか疑問がない訳でもない。また、両氏の館の捉え方には差異があり、方形館の出現時期についても両氏の意見は対立している(中井1991、橋口1991)。屋敷地の明確な区画施設の形態や存否については、領主階級内の階層差や身分秩序なども関係するのではないかとと思われるが、本遺跡の場合は谷内に位置しており、屋敷の三方を狭い丘陵根根によって囲まれているという軍事的な立地条件も考慮される。
- (注8) 「信濃国佐久郡の武士大井太郎の館」は、梁行4間・桁行5間(梁行側1間は下屋構造)・4面庇(縁)付の板葺建物の主屋に、廊によって連結された厨か台所と考えられる付属屋と、主屋の対面に位置する梁行3間・桁行4間・3面庇(縁)付の持仏堂の可能性もある茅葺建物(小規模な板葺建物を伴う)によって構成されている(玉井1996)。この館の屋敷地には、堀もしくは溝や櫓等の明確な区画施設が見られず、館を構成する建物の平面形態や配置とともに、本遺跡のI期の屋敷形態と比較的に類似した構造の屋敷と言えよう。
- (注9) この隣接する二つの方形区画の範囲は、小字の「谷丁田」の範囲とはほぼ一致しており、小字の形成がこの館の基本的な範囲と直営田等の関係地を反映している可能性もあり、注目されよう。
- (注10) 当地域の館は、沖積低地内やそれを望む縁辺の平坦な台地上に立地するものが多いが、本遺跡と同様に丘陵部に立地する館としては、兄玉丘陵の兄玉町真鏡寺館跡(恋河内1991)や大久保山残丘内の本庄市大久保山遺跡(荒川1995)がある。これらは、平地部の館が中世後期になって形成されるものが多いのに対して、いずれも中世前期から形成されているが、真鏡寺館跡や大久保山遺跡では、いずれも谷田に面した日当たりの良い丘陵の南側緩斜面のやや高所に館の屋敷部分を構えている。本遺跡の館は、丘陵部の谷田を基盤とする館としては、谷内の平坦部に立地する点で、特異な立地と言えよう。
- (注11) 文政11年(1828年)の『新編武蔵風土記稿』の「入浅見村」の項には「辨天社」の記載があり、これが「用水溜池内にあり」とされていることから、この溜池は今の弁天池のことであることが分かる。また、地元の入浅見に残る安政5年(1858年)の「入浅見村明細帳」には「當村溜池三ヶ所」、文久3年(1863年)正月の「溜井普請下知書」にも「用水溜井三ヶ所」と記されており(兄玉町1990)、これらも現存する3箇所の溜池のことであろう。しかしながら、地元には天保10年(1839年)6月の「諏訪御池御普請諸掛り帳」(兄玉町1990)があり、「諏訪池」

と呼ばれた池もあったようである。この諏訪池については現在その所在はまったく不明であり、また3箇所の溜池との関係も分らない。現在ゴルフ場の敷地になっている本道跡西側の丘陵部には「諏訪入」という小字名があり、あるいはその辺にあったのかもしれないが、「御池」と言う表現からすると、単なる灌漑を目的とした溜池とは異なった性格の池であった可能性もあろう。

(注12) 天保元年(1830年)12月の「入浅見村年貢皆済目録」(児玉町1990)には、年貢の引方分として「新池場引」と「古池場引」という記載があり、村内にある溜池の築造時期の差異が、江戸時代後期にも意識されていたことが分かる注目される。

参考文献

- 青木 修(1993)「片口鉢の研究」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第1輯
(1994)「続片口鉢の研究」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第2輯
赤熊 浩一(1994)『金井遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第146集
浅野 晴樹(1991)「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31号
(1991)「中世遺跡の土器組成における問題」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
(1995)「東国の常滑焼の出土状況」『常滑焼と中世社会』小学館
(1997)「北関東における古瀬戸の流通と消費」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
荒川 正夫(1995)『大久保山Ⅲ』早稲田大学本庄校地文化財調査室
伊野 近富(1989)「12～16世紀の京都の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 日本中世土器研究会
井上 尚明(1986)『将監塚・古井戸Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
大屋 道則(1996)『菅原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第169集
金子 彰男(1994)『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪の木古墳』神川町教育委員会文化財調査報告第11集
(1995)『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』神川町教育委員会文化財調査報告第12集
神川 町(1989)『神川町誌』
上里 町(1992)『上里町史』資料編
河野真知郎(1993)「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢神奈河』第2集 神奈川県考古学会
(1995)『中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都—』講談社選書メチエ49
木津 博明(1989)「上野国に於ける在地生産土器に就いて」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 日本中世土器研究会
木村 茂光(1992)『古代・中世畠作史の研究』校倉書房
金田 章裕(1993)『微地形と中世村落』吉川弘文館
神川町伝元大師跡の出土遺物について」『研究紀要』第18号 埼玉県立歴史資料館
黒田日出男(1983)「中世農業技術の様相」『講座・日本技術の社会史』第1巻(農業・農産加工) 日本評論社
(1984)『日本中世開発史の研究』校倉書房
恋河内昭彦(1991)『雷電下遺跡—B・C地点—(図版編)』児玉町文化財調査報告書第13集
(1991)『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
(1995)『飯王東Ⅰ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集
(1996)『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集
(1997)『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集
児玉 町(1989)『九郷用水関係資料集』児玉町史史料調査報告第12集
(1990)『児玉町史』近世資料編
(1992)『児玉町史』中世資料編
小山 靖憲(1987)『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会
斉木 秀雄(1994)『鎌倉における出土遺物の個体数調査』『考古論叢神奈河』第3集 神奈川県考古学会
(1995)『漆器と陶磁器—鎌倉佐助ヶ谷遺跡を中心に—』『貿易陶磁研究』No15 日本貿易陶磁研究会
埼玉 県(1968)『埼玉の城跡』埼玉県教育委員会
(1968)『埼玉の中世城跡』埼玉県教育委員会
篠崎 潔(1995)『安保氏館跡』神川町遺跡調査会発掘調査報告第5集
柴田 龍司(1991)「中世城館の面影」『中世の城と考古学』新人物往来社

- 水 藤 真(1989)「村や町を囲うこと」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19号
- 菅 谷 浩(1980)『中世武蔵武士館跡の研究Ⅰー見玉党四方田氏館についてー』埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部
(1881)『見玉党阿佐美氏館について』見玉町史料調査報告中世Ⅰ 見玉町史編纂委員会
- 菅谷浩之・岡本幸男(1980)『武蔵新倉館』美里村教育委員会
- 菅 原 正 明(1989)「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19号
- 鈴木 徳 雄(1995)『堀向・慶塚A・柿島・内手BC・見玉条里遺跡』見玉町文化財調査報告書第18集
- 田 中 信(1996)『川越市内出土の中世土師器皿について』『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅷ)』
- 玉 井 哲 雄(1996)『武家住宅』『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会
- 徳 山 寿 樹(1992)『見玉町田端中原遺跡の調査』『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会 埼玉会館
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育委員会
- 戸 田 芳 実(1967)『日本領主制成立史の研究』岩波書店
- 富田和夫・赤熊浩一(1985)『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財
調査事業団報告書第46集
- 中 井 均(1987)「中世城館の発生と展開」『物質文化』48 物質文化研究会
(1991)「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 中 野 晴 久(1995)「常滑」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
(1995)「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
- 野 口 泰 宣(1991)「見玉党塩谷氏と塩谷郷」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』見玉町文化財調査報告書第14集
(1997)「中世における共和地区の様相」『城の内・日延・東田・浅見焼北遺跡』見玉町文化財調査報告書第23集
- 橋 口 定 志(1987)「中世居館の再検討」『東京考古』第5号 東京考古学談話会
(1991)「中世居館研究の現状と問題点」『考古学と中世史研究』名著出版
- 長谷川 勇(1970)「金鑑神社と九郷用水と見玉党」『あゆみ』第19号 埼玉県立深谷商業高等学校地歴研究部
(1987)『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊
- 服 部 敬 史(1997)「内耳土鍋の研究(上)」『土曜考古』第21号 土曜考古学研究会
- 服 部 実 喜(1992)「南武蔵・相模における中世の食器様相(1)」『神奈川考古』第28号 神奈川考古同人会
(1994)「南武蔵・相模における中世の食器様相(2)」『神奈川考古』第30号 神奈川考古同人会
- 平 田 重 之(1989)『臼樹原・松下遺跡Ⅰ(阿保境館跡)』臼樹原・松下遺跡調査会報告書第1集
- 広 瀬 和 雄(1988)「中世村落の形成と展開」『物質文化』50 物質文化研究会
- 藤 澤 良 祐(1982)「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』Vol.8 東洋陶磁学会
(1991)「瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
(1995)「古瀬戸」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
(1997)「付編ー古瀬戸編年表ー」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
- 本 庄 市(1976)『本庄市史』資料編
(1986)『本庄市史』通史編Ⅰ
(1989)『本庄市史』通史編Ⅱ
- 前 川 要(1996)「中世の家族と住居」『考古学による日本歴史』15(家族と住まい) 雄山閣
- 丸 山 陽 一(1990)『国指定史跡水殿瓦窯跡試掘調査報告』美里町遺跡発掘調査報告書第6集
- 峰 岸 純 夫(1973)「十五世紀後半の土地制度」『土地制度史Ⅰ』体系日本史叢書6 山川出版社
- 宮 瀧 文 二(1991)「壹山下遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集
(1995)「東国における常滑焼の流通と消費」『常滑焼と中世社会』小学館
- 柳 進(1969)『埼玉県北部の城』
(1976)『おあちゃ稲荷』『県北の民俗と伝承』
- 山 本 信 夫(1990)「太宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究』No10 日本貿易陶磁研究会
(1995)「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 横田賢次郎・森田勉(1978)「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 吉 岡 康 暢(1994)『中世須恵器の研究』吉川弘文館

写 真 图 版



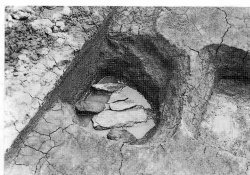
向田A遺跡Ⅰ区



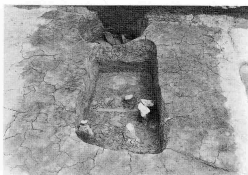
向田A遺跡Ⅱ区



水田跡



第2号井戸跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



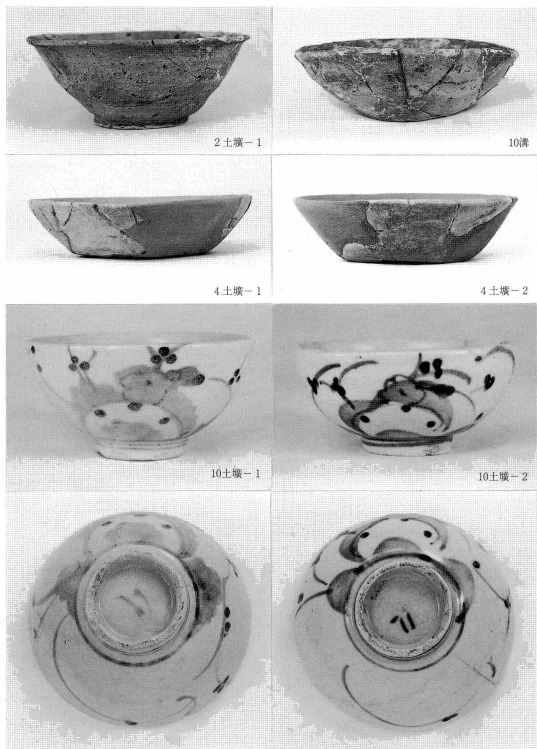
第4・5号土坑



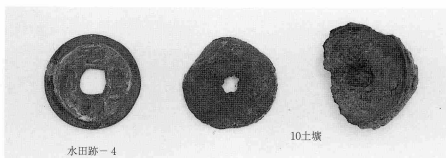
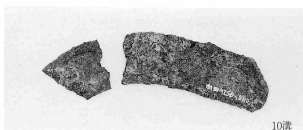
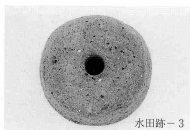
第6～9号土坑



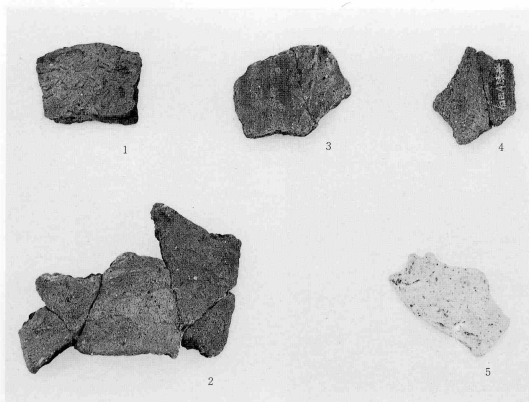
第10号土坑



向田 A 遺跡出土遺物(1)



向田 A 遺跡出土遺物(2)



向田 A 遺跡出土縄文土器



向田B遺跡Ⅰ区



向田B遺跡Ⅱ区



水田跡A・C (西より)



水田跡A・C (東より)



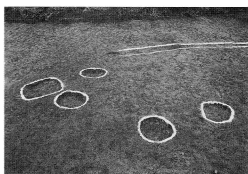
第2・6号溝跡



第5号溝跡



第1号土壇



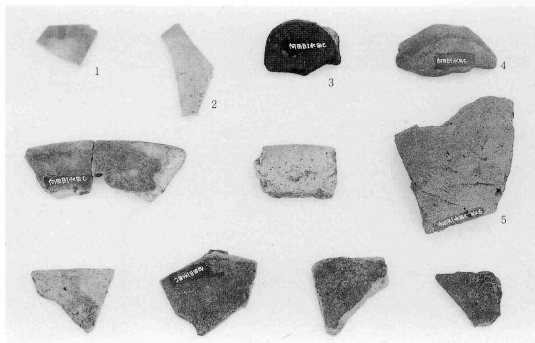
第4～8号土壇



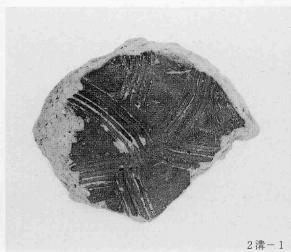
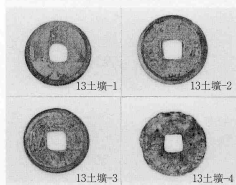
I区調査風景



II区調査風景



水田跡C



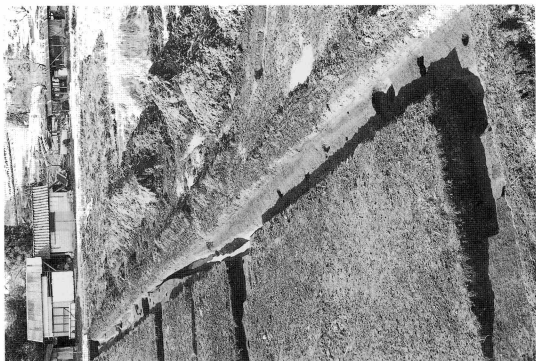
向田B遺跡出土遺物



壺丁田遺跡調査区全景



壺丁田遺跡西側調査区



壹丁田遺跡北側調査区



壹丁田遺跡東側調査区



西側調査区中央部建物群（西より）



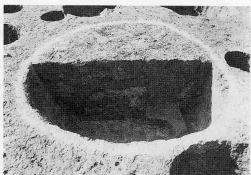
西側調査区中央部建物群（東より）



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡柱穴P3



第2号掘立柱建物跡柱穴P4



第3号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡柱穴P11



第7号掘立柱建物跡



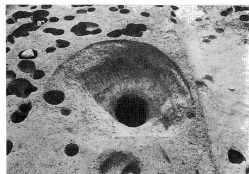
第8・9号掘立柱建物跡



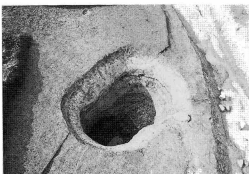
第9号掘立柱建物跡



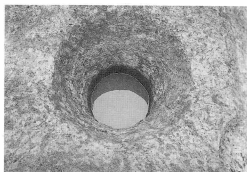
第11号掘立柱建物跡



第1号井戸跡



第2号井戸跡



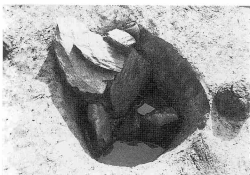
第3号井戸跡



第4号井戸跡



第5号井戸跡



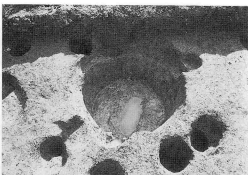
第5号井戸跡石出土状態



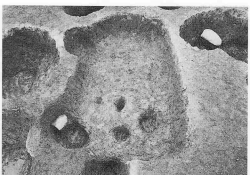
第6号井戸跡



第7号井戸跡



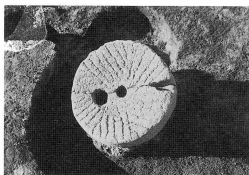
第4号土坑



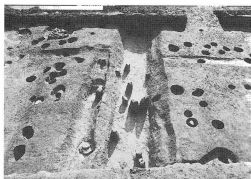
第5号土坑



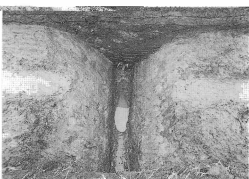
第6号土坑



P88石臼出土状態



第1・2号溝跡



第1号溝跡（北側調査区）



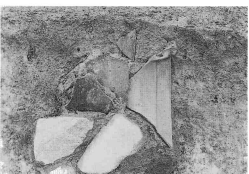
第1～3号溝跡



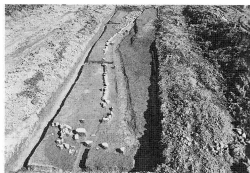
第4・5号溝跡



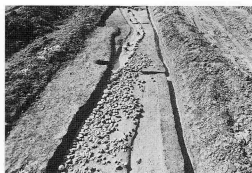
第4号溝跡（北側調査区）



第4号溝跡内耳鍋出土状態



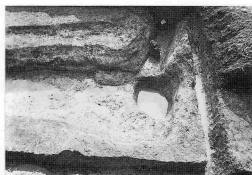
第7号溝跡（西より）



第7号溝跡（東より）



第8号溝跡



第8号溝跡西端部



第10号溝跡



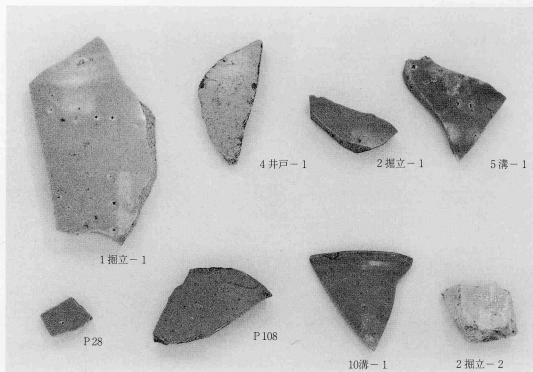
第11号溝跡



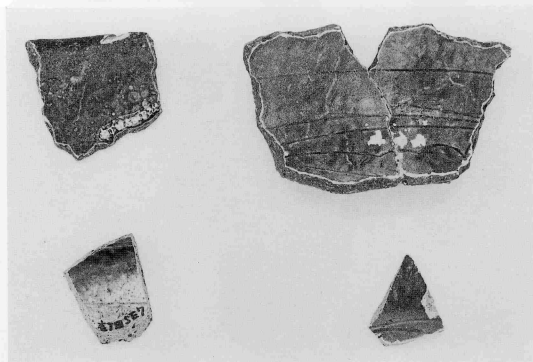
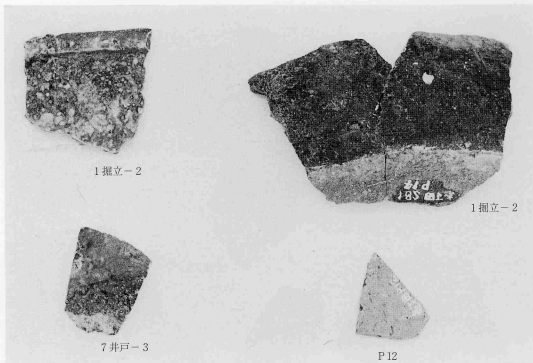
第16号溝跡西側



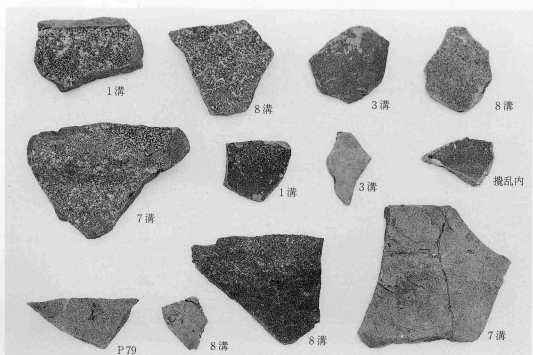
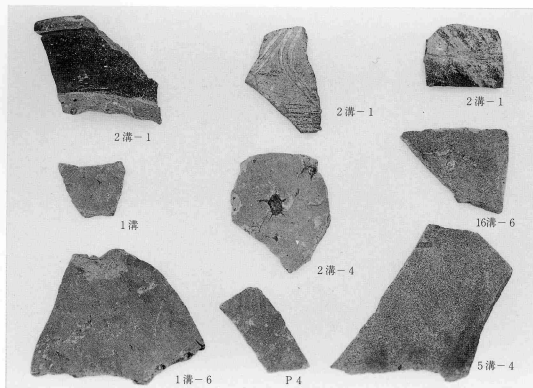
第16号溝跡東側



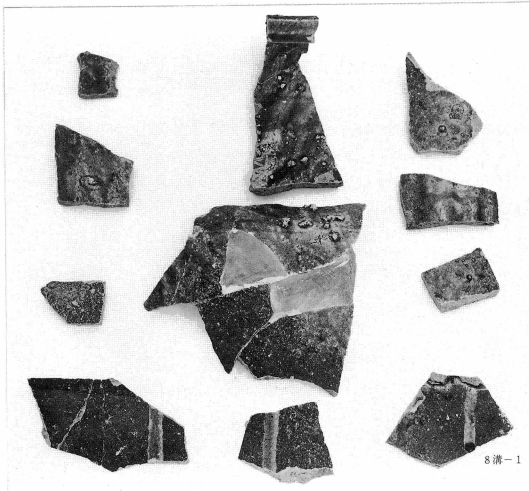
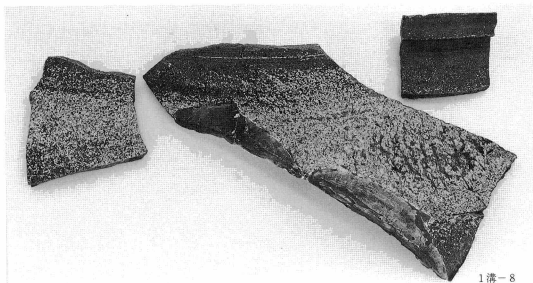
白磁・青白磁（上-外面、下-内面）



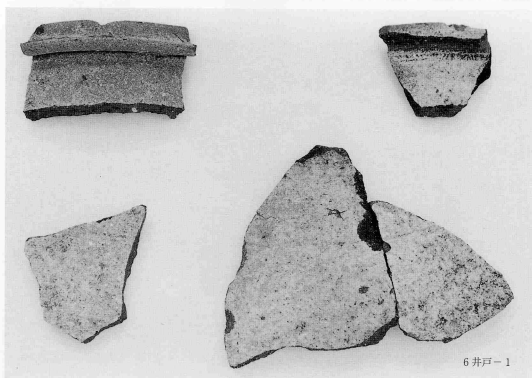
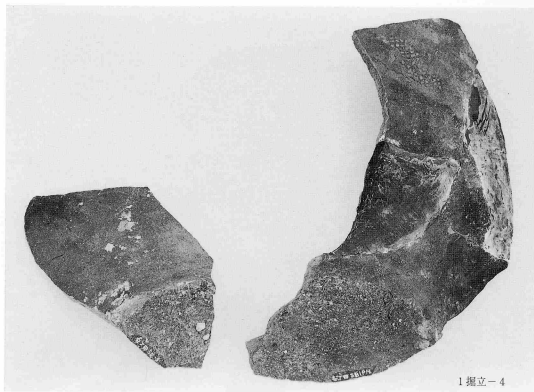
中国陶器（上一外面、下一内面）



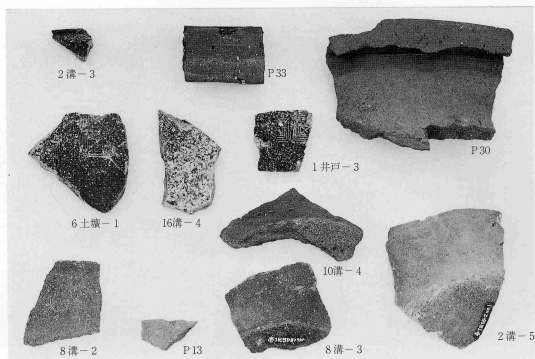
渥美窯系製品



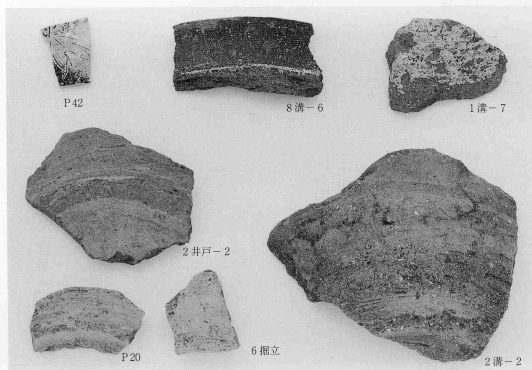
常滑窯系製品(1)



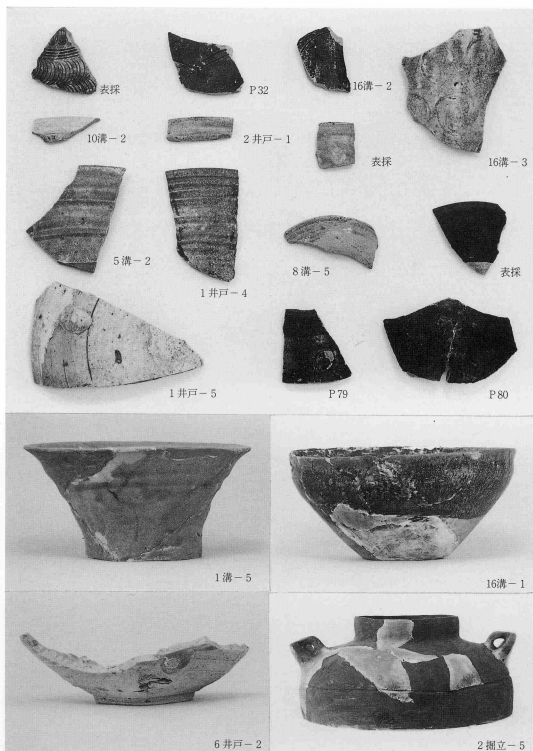
常滑窯系製品(2)



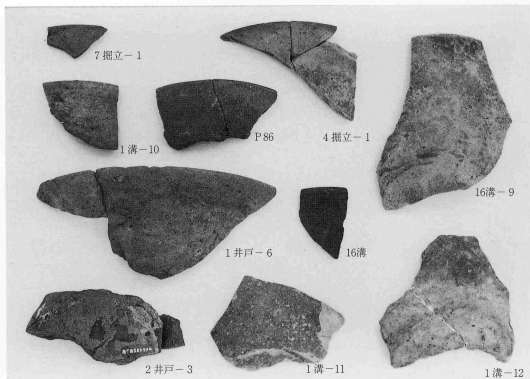
常滑窯系製品(3)



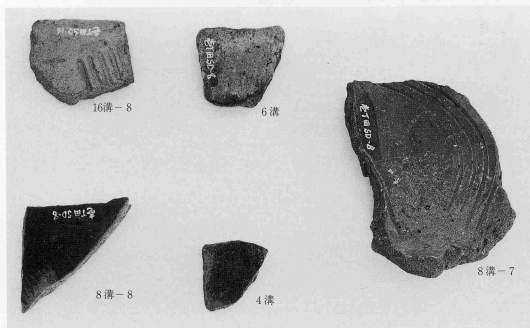
猿投・珠洲・山茶碗窯系製品



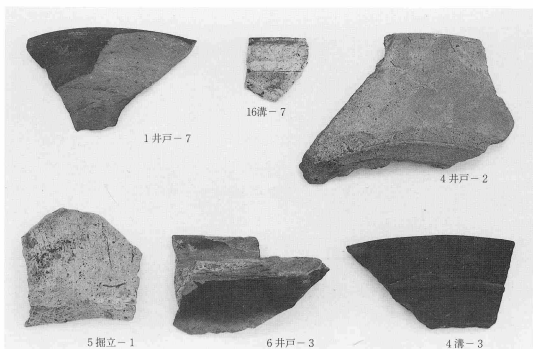
瀬戸窯系製品・在地産土器（土釜）



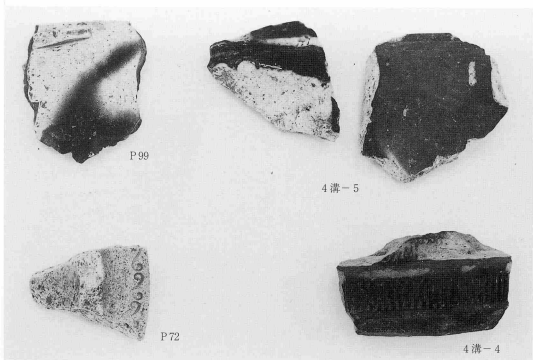
在地産土器 (鉢)



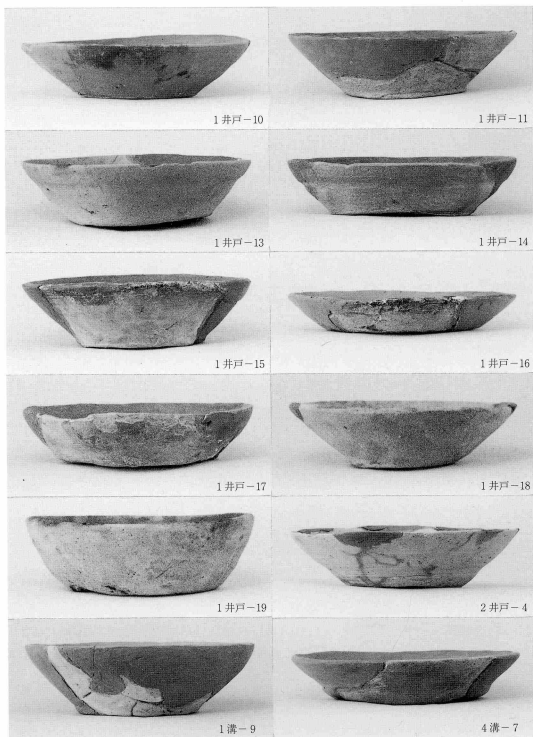
在地産土器 (描鉢)



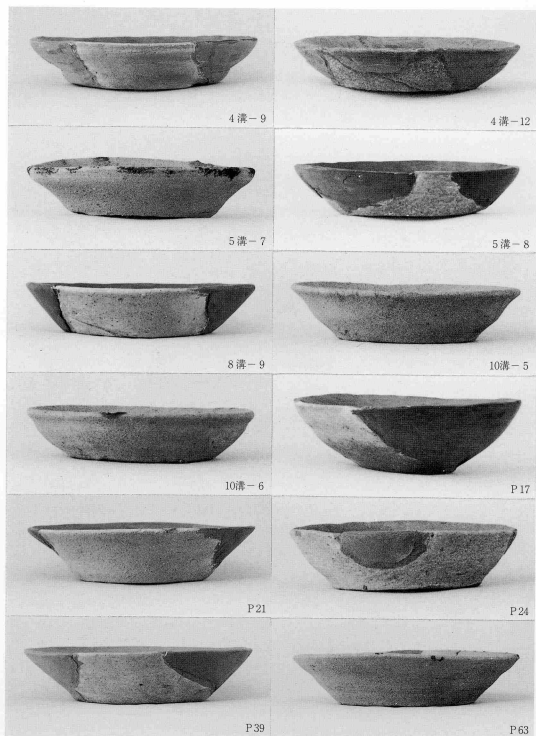
在地産土器（火鉢）



在地産土器（風炉）



在地産土器（土師器皿）

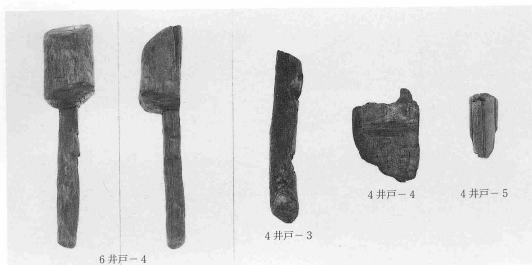


在地産土器 (土師器皿)

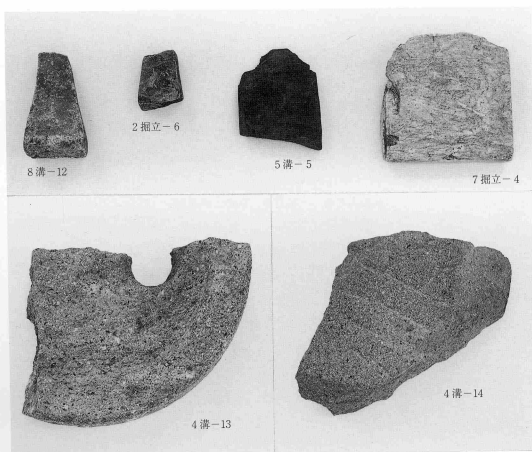


在地産土器（土師器皿・火鉢・内耳鍋）

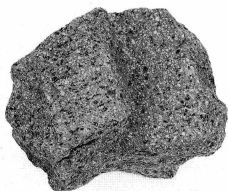




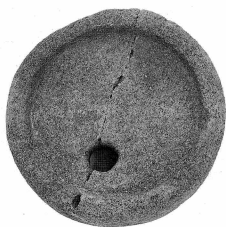
木 製 品



石製品（砥石・硯・温石・粉挽臼）



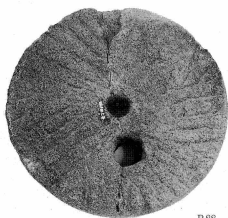
4溝-15



8溝-13

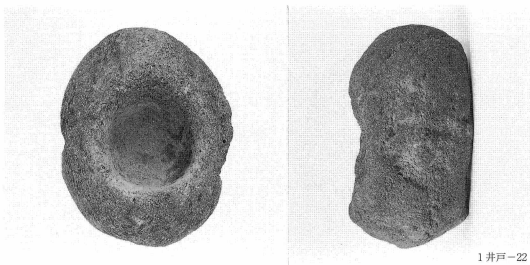


8溝-14



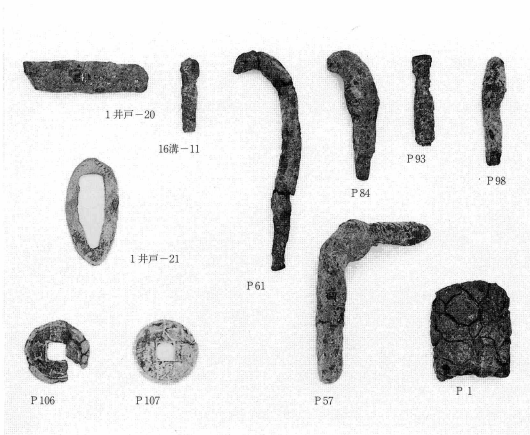
P 88

石製品（茶臼・粉挽臼）



1井戸-22

石製品（窪み石）



金属製品

報告書抄録

フリガナ	ムカイダA・ムカイダB・イッチョウダイセキ							
書 名	向田A・向田B・老丁田遺跡							
副 書 名	県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6							
シリーズ	児玉町文化財調査報告書						巻 次	第27集
編 集 者	恋 河 内 昭 彦							
編集機関	児玉町教育委員会							
所 在 地	〒367-0217 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL0495(72)1331							
発 行 日	1998 (平成10) 年 3 月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
ムカイダ 向田A遺跡	コ ダマダン コ ダマツキセキ 児玉郡児玉町大字 イシツギミヤダ イ セタニ 入浅見字向田	113824	035	36°11'54"	139°9'35"	19920630 19920928	1,000	ほ場整備
ムカイダ 向田B遺跡	コ ダマダン コ ダマツキセキ 児玉郡児玉町大字 イシツギミヤダ イ セタニ 入浅見字伊勢谷	113824	035	36°11'52"	139°9'26"	19930110 19930131	1,200	ほ場整備
イシツギミヤダ 老丁田遺跡	コ ダマダン コ ダマツキセキ 児玉郡児玉町大字 イシツギミヤダ イ セタニ 入浅見字老丁田	113824	301	36°11'50"	139°9'18"	19921004 19921224	1,300	ほ場整備
所収遺跡	種別	主な年代	主 な 遺 構		主 な 遺 物			特記事項
向田A遺跡	包含層	縄文前～後期	土壌1		土器片、石器			
	墓	平安時代	土壌1		土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、土製紡錘車、鉄鎌			
	水田	中 世	水田1、井戸1、 土壌7、溝3		在地産土器(片口鉢、土師器Ⅲ)、 国産陶器(瀬戸窯花板)、古銭			
		近世以降	井戸1、溝3、土壌1、溝10		焙烙、摺鉢、伊万里系染付碗、瓦、釘			
向田B遺跡		縄文時代	土壌3		土師器片、須恵器片、土製紡錘車			
	水田	古 代			土師器片、須恵器片、土製紡錘車			
		中 世	水田4、土壌10、溝3		中国陶磁(白磁、青磁)、国産陶器(常滑窯、在地産土器(摺鉢、火鉢、片口鉢、内耳鍋、土師器Ⅲ)、硯、古銭			
		近世以降	土壌3、溝4					
老丁田遺跡	屋敷	古墳時代			土師器片、埴輪片			
		平安時代			土師器片、須恵器片			
		中 世	掘立柱建物11、 井戸7、土壌5、溝13		中国陶磁(白磁、青白磁、青磁)、 国産陶器(猿投窯、常滑窯、瀬美窯、山茶碗窯、珠洲窯、瀬戸窯)、在地産土器(土釜、片口鉢、摺鉢、火鉢、 風炉、内耳鍋、土師器Ⅲ)、木製品(漆塗碗、横組、枕)、金属製品(切刃、古銭、刀子、釘)、石製品(硯、 温石、茶臼、粉挽臼、窪み石、砥石)			
		近世以降	土壌1、溝6		染付碗、摺鉢			

児玉町文化財調査報告書第27集

向田A・向田B・壺丁田遺跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う発掘調査報告書6

平成10年3月20日印刷

平成10年3月31日発行

発行者 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356